松山市文化財調査報告書100

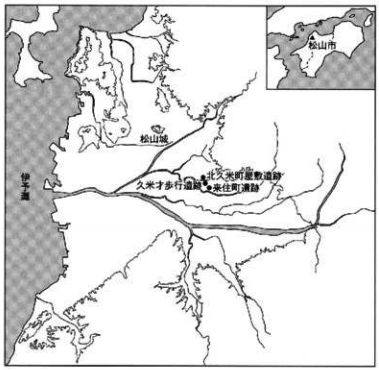
来住・久米地区の遺跡Ⅳ

来住町遺跡6次調査地
北久米町屋敷遺跡2次調査地
久米才歩行遺跡2次調査地

2004
松山市教育委員会

来住・久米地区の遺跡Ⅳ

来住町遺跡6次調査地
北久米町屋敷遺跡2次調査地
久米才歩行遺跡2次調査地



2004

松山市教育委員会

序

本書は、松山平野東部の小野川と堀越川の形成する来住台地上に所在する国指定史跡「久米官衙遺跡群　－久米官衙遺跡・来住廃寺跡－」周辺において松山市教育委員会が国庫補助事業の一環として実施した埋蔵文化財発掘調査の記録であります。

現在、残されている文化財は、われわれ郷土の歴史・文化などを正しく理解するために欠くことのできないものであり、将来の文化創造の基礎をなす重要なものです。この文化財を後世に永く保存し、伝え、活用を図ることが国民的課題となっております。

本書に掲載する３つの遺跡からは、久米官衙に関連するものは僅かに久米才歩行遺跡２次調査で確認されたＬ字状の区画溝にとどまりましたが、それ以前の弥生時代前期から中期にかけての集落関連遺構や古墳時代６世紀頃の竪穴住居跡等の古代久米官衙を形成する以前の様相を知る上で貴重な資料を得ることができました。

久米官衙遺跡群を取り巻く来住台地上の調査において明らかにされた埋蔵文化財は、全国的にみても学術的価値の極めて高いものが多く、本市の歴史を知る上で欠くことのできない重要な資料であります。

本書に収録された調査資料が、教育、学術研究、文化の振興等のために広く活用されることを切に願うものです。

また、調査の実施及び報告書の作成にあたり、更には埋蔵文化財行政に深いご理解とご協力をいただいた関係各位に対し、心より感謝申し上げますとともに、今後ともなお一層のご指導、ご鞭撻の程よろしくお願い申し上げる次第です。

平成16年３月31日

松山市教育長
中　矢　陽　三

例　言

1．この報告書は、松山市教育委員会が平成７年12月、同８年７月および11月に、国庫補助事業として実施した埋蔵文化財発掘調査の報告書である。

2．遺構は呼称を略号で記述した。竪穴住居址：ＳＢ、掘立柱建物址：掘立、溝：ＳＤ、土坑：ＳＫ、柱穴：ＳＰ、性格不明遺構：ＳＸとし、遺跡ごとに通し番号を付記した。

3．遺構の測量は、担当調査員指示のもと補助員・作業員が実施した。

4．遺物の実測及び掲載図の製作は、調査担当者指示のもと整理作業員が行った。

5．遺構図・遺物図の縮尺は、縮分値をスケール下に記した。

6．写真図版は、遺構図の撮影は担当者と大西朋子が、遺物の撮影は大西朋子が担当し、図版作成は担当者と協議のうえ大西朋子が行った。

7．本書に使用した方位は、磁北と真北である。

8．本書に掲載した遺物及び写真・図版等の記録類は、すべて松山市立埋蔵文化財センターにて収蔵保管している。

9．北久米町屋敷遺跡２次調査では九州大学大学院教授田中良之先生、同助手（当時）金宰賢先生に人骨に関する指導を賜った。

10．本書の執筆は田城武志、高尾和長、小玉亜紀子、梅木謙一が行い、田城と梅木とが編集した。

11．**製版**　カラー図版－175線、白黒図版－175線
印刷　オフセット印刷
用紙　白黒図版－ミューマット菊判 93.5kg 使用

本 文 目 次

第1章　はじめに ……〔田城・梅木〕……1
1．調査・刊行に至る経緯　2．組　織　3．環　境

第2章　来住町遺跡6次調査地 ……〔小　玉〕……5
1．調査の経過　2．層　位　3．遺構と遺物　4．小　結

第3章　北久米町屋敷遺跡2次調査地 ……〔小　玉〕……27
1．調査の経過　2．層　位　3．遺構と遺物　4．小　結

第4章　久米才歩行遺跡2次調査地 ……〔高　尾〕……53
1．調査の経過　2．層　位　3．遺構と遺物　4．小　結

第5章　おわりに ……〔梅　木〕……93

挿 図 目 次

第1章　はじめに

第1図　調査地位置図（縮尺1：50,000）…… 4

第2章　来住町遺跡6次調査地

第2図　調査地位置図（縮尺1：1,000）…… 9
第3図　調査地区画図（縮尺1：200）
第4図　土層断面図（縮尺1：40）…… 11
第5図　遺構配置図（縮尺1：100）…… 13
第6図　SK1測量図（縮尺1：40）…… 14
第7図　SK1出土遺物実測図（縮尺1：3）…… 15
第8図　SD3測量図（縮尺1：40）…… 16
第9図　SX1測量図（縮尺1：40）…… 17
第10図　SX2測量図・出土遺物実測図（縮尺1：40・1：3）
第11図　SD1・耕作痕・SP11測量図（縮尺1：80）…… 18
第12図　SD1・SD2・SP11出土遺物実測図（縮尺1：3）…… 19
第13図　SK2・SK3・SX3測量図（縮尺1：40）…… 20
第14図　Ⅱ・Ⅳ層出土遺物・表採遺物実測図（縮尺1：3）…… 21
第15図　Ⅰ層出土遺物実測図（縮尺1：3・1：4）…… 22
第16図　3次・6次調査地の対応図（縮尺1：40・1：400）…… 23

第3章　北久米町屋敷遺跡2次調査地

第17図　調査地位置図（縮尺1：1,000）…… 30
第18図　調査地区画図（縮尺1：400）
第19図　遺構配置図（縮尺1：100）…… 32
第20図　北壁・東壁土層図（縮尺1：40）…… 33
第21図　SD4上層出土遺物実測図（縮尺1：4）…… 35
第22図　SD4下層出土遺物実測図（縮尺1：4）…… 36
第23図　SD1～SD13測量図（縮尺1：80・1：60）…… 37
第24図　橋1測量図（縮尺1：40）…… 40
第25図　SK1測量図・出土遺物実測図（縮尺1：40・1：4）…… 41
第26図　SD1～3・7・9出土遺物実測図（縮尺1：3・1：1）…… 42
第27図　柱穴測量図（縮尺1：40）…… 44
第28図　包含層・地点不明遺物実測図（縮尺1：3）
第29図　北久米町屋敷遺跡1次・2次調査地測量図（縮尺1：400）…… 46
第30図　北久米町屋敷遺跡の変遷図（縮尺1：800）…… 47

第４章　久米才歩行遺跡２次調査地

第31図　調査地位置図（縮尺１：1,000）……56
第32図　北壁土層図（縮尺１：40）……57
第33図　南壁土層図（縮尺１：40）
第34図　東壁土層図（縮尺１：40）……58
第35図　西壁土層図（縮尺１：40）
第36図　遺構配置図（縮尺１：100）……59
第37図　ＳＢ２測量図・出土遺物実測図（縮尺１：40・１：４）……62
第38図　ＳＫ２測量図（縮尺１：40）……63
第39図　ＳＫ２出土遺物実測図（縮尺１：４・１：３）……64
第40図　ＳＫ５・６測量図・ＳＫ６出土遺物実測図（縮尺１：40・１：４）……65
第41図　ＳＢ１測量図（縮尺１：50）……66
第42図　ＳＢ１出土遺物実測図（縮尺１：３・１：１）……67
第43図　ＳＤ６測量図・出土遺物実測図（縮尺１：30・１：３）……68
第44図　ＳＫ９測量図・出土遺物実測図（縮尺１：40・１：３）……69
第45図　ＳＫ８測量図・出土遺物実測図（縮尺１：40・１：３）……70
第46図　ＳＫ12測量図・出土遺物実測図（縮尺１：40・１：３）……71
第47図　ＳＫ10測量図（縮尺１：40）
第48図　ＳＤ４測量図・出土遺物実測図（縮尺１：30・１：３・１：１）……72
第49図　ＳＤ２測量図・出土遺物実測図（縮尺１：30・１：３）……73
第50図　ＳＫ７測量図・出土遺物実測図（縮尺１：40・１：３）……74
第51図　掘立１測量図（縮尺１：80）……75
第52図　ＳＤ７測量図（縮尺１：30）……76
第53図　ＳＫ４測量図・出土遺物実測図（縮尺１：40・１：４）
第54図　ＳＫ３測量図（縮尺１：40）……77
第55図　ＳＫ11測量図（縮尺１：10）……78
第56図　ＳＫ11出土遺物実測図（縮尺１：６）……79
第57図　ＳＤ１測量図・出土遺物実測図（縮尺１：30・１：３）……80
第58図　ＳＫ１測量図（縮尺１：10）……81
第59図　ＳＫ１出土遺物実測図（縮尺１：６・１：３）……82
第60図　ピット出土遺物実測図（縮尺１：４・１：３）
第61図　第Ⅴ層出土遺物実測図（１）（縮尺１：４）……83
第62図　第Ⅴ層出土遺物実測図（２）（縮尺１：４・１：３・１：１）……84

第５章　おわりに

第63図　二つ塚古墳採集品（縮尺１：６）……94

表 目 次

第1章　はじめに

表1　調査地一覧 …… 1

第2章　来住町遺跡6次調査地

表2　土坑一覧 …… 24

表3　溝一覧

表4　性格不明遺構一覧

表5　SK1出土遺物観察表　土製品

表6　SK1出土遺物観察表　石製品 …… 25

表7　SX2出土遺物観察表　土製品

表8　SD1出土遺物観察表　土製品

表9　SD2出土遺物観察表　瓦製品

表10　SP11出土遺物観察表　土製品

表11　Ⅳ層出土遺物観察表　土製品

表12　Ⅱ層出土遺物観察表　土製品 …… 26

表13　Ⅰ層出土遺物観察表　土製品

表14　Ⅰ層出土遺物観察表　瓦製品

表15　表採遺物観察表　銅製品

第3章　北久米町屋敷遺跡2次調査地

表16　溝一覧 …… 49

表17　土坑一覧

表18　SD4出土遺物観察表　土製品

表19　SD4出土遺物観察表　石製品 …… 50

表20　SK1出土遺物観察表　土製品 …… 51

表21　SD1出土遺物観察表　土製品

表22　SD2出土遺物観察表　土製品

表23　SD3出土遺物観察表　土製品

表24　SD7出土遺物観察表　土製品

表25　SD7出土遺物観察表　ガラス製品

表26　SD9出土遺物観察表　土製品

表27　包含層出土遺物観察表　土製品 …… 52

表28　地点不明出土遺物観察表　土製品

第４章　久米才歩行遺跡２次調査地
表29　竪穴式住居址一覧 …… 86
表30　掘立柱建物址一覧
表31　溝一覧
表32　土坑一覧
表33　ＳＢ２出土遺物観察表　土製品 …… 87
表34　ＳＫ２出土遺物観察表　土製品
表35　ＳＫ２出土遺物観察表　石製品 …… 88
表36　ＳＫ６出土遺物観察表　土製品
表37　ＳＢ１出土遺物観察表　土製品
表38　ＳＢ１出土遺物観察表　石製品
表39　ＳＢ１出土遺物観察表　装身具 …… 89
表40　ＳＤ６出土遺物観察表　土製品
表41　ＳＫ９出土遺物観察表　土製品
表42　ＳＫ８出土遺物観察表　土製品
表43　ＳＫ８出土遺物観察表　石製品
表44　ＳＫ12出土遺物観察表　土製品
表45　ＳＤ４出土遺物観察表　土製品 …… 90
表46　ＳＤ４出土遺物観察表　装身具
表47　ＳＤ２出土遺物観察表　土製品
表48　ＳＫ７出土遺物観察表　土製品
表49　ＳＫ４出土遺物観察表　土製品
表50　ＳＫ11出土遺物観察表　土製品 …… 91
表51　ＳＤ１出土遺物観察表　土製品
表52　ＳＫ１出土遺物観察表　土製品
表53　ＳＫ１出土遺物観察表　石製品
表54　ピット出土遺物観察表　土製品
表55　第Ⅴ層出土遺物観察表　土製品 …… 92
表56　第Ⅴ層出土遺物観察表　石製品
表57　第Ⅴ層出土遺物観察表　装身具

図　版　目　次

第２章　来住町遺跡６次調査地
図版１　１　調査地完掘状況（東から）
　　２　ＳＤ１・耕作痕完掘状況（南東から）

図版２　１　ＳＫ１完掘状況（北西から）
　　２　ＳＸ２完掘状況（東から）
図版３　１　出土遺物（ＳＫ１・ＳＸ２・Ⅰ層・表採）

第３章　北久米町屋敷遺跡２次調査地
図版４　１　調査地近景（南西より）
　　２　東壁土層（西より）
図版５　１　遺構検出状況（北より）
　　２　ＳＤ４検出状況（北より）
図版６　１　ＳＤ１～３・５～13検出状況（北西より）
　　２　北半部遺構検出状況（南より）
図版７　１　ＳＤ４完掘状況（北より）
　　２　北半部遺構完掘状況（北より）
図版８　１　橋１完掘状況（北西より）
　　２　ＳＤ１～３・５～13完掘状況（北より）
図版９　１　１次調査地完掘状況１（北より）
　　２　１次調査地完掘状況２（東より）
図版10　１　出土遺物（ＳＤ４・ＳＤ７）

第４章　久米才歩行遺跡２次調査地
図版11　１　調査前の状況（南東より）
　　２　遺構検出状況１（南より）
図版12　１　遺構検出状況２（南より）
　　２　遺構完掘状況（南より）
図版13　１　ＳＢ２検出状況（南東より）
　　２　ＳＢ２完掘状況（東より）
図版14　１　ＳＫ１遺物出土状況（北西より）
図版15　１　ＳＫ11遺物出土状況（北東より）
図版16　１　ＳＫ６遺物出土状況（南より）
　　２　ＳＫ２遺物出土状況（南東より）
図版17　１　遺物出土状況（東より）
　　２　遺構完掘状況（南より）
図版18　１　出土遺物（ＳＫ２・ＳＫ６・ＳＢ１・ＳＤ４）
図版19　１　ＳＫ１出土遺物
図版20　１　第Ⅴ層出土遺物

第1章　はじめに

1．調査・刊行に至る経緯

松山市教育委員会文化教育課（現、文化財課）は、平成7年12月に市内来住町533－1、平成8年7月に市内北久米町477－2、同年11月に市内南久米町476－1他で開発に伴う事前の発掘調査を実施した。発掘調査に至るまでの詳細は、第2章以降の各調査報告で行い、ここでは遺跡名称と周辺遺跡についての若干の解説を加える。

平成7年12月に調査した来住町533－1は、埋蔵文化財包蔵地「127　来住廃寺跡」内にあり、周辺地の既存の遺跡調査から来住町遺跡6次調査地とした。来住町遺跡は、来住廃寺跡の北～東に展開する遺跡で、主に古墳時代～中世の集落跡が展開し、自然流路や掘立建物群を確認することが多い。

平成8年7月に調査した北久米町477－2は、埋蔵文化財包蔵地「126　高畑遺物包含地」内にあり、周辺地の既存の遺跡調査から北久米町屋敷遺跡2調査地とした。北久米町屋敷遺跡は、高畑遺物包含地内にあるが、久米高畑遺跡とは堀越川を挟んだ北側地域にあり、古代～中世の集落遺構が展開している。

平成8年11月に調査した南久米町476－1他は、埋蔵文化財包蔵地「126　高畑遺物包含地」内にあり、周辺地の既存の遺跡調査から久米才歩行遺跡2次調査地とした。久米才歩行遺跡は堀越川の北側地域にあり、北久米町屋敷遺跡の南方にある。また、久米高畑遺跡とは堀越川を挟んだ位置になる。

野外調査以降は、各調査担当者が整理作業を行い、平成15年度には本格的な報告書作成作業を実施した。

なお、野外調査から整理・報告書作成までの間では、松山市立埋蔵文化財センターならびに財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センターの協力・支援を得た。

表1　調査地一覧

遺跡名	所在地	面積(㎡)	調査期間
来住町遺跡6次	来住町533-1	202.85㎡	1995年12月11日～1996年2月9日
北久米町屋敷遺跡2次	北久米町477-2	347.64㎡	1996年7月1日～1996年8月30日
久米才歩行遺跡2次	北久米町476-1-2,475-3	361.91㎡	1996年11月12日～1997年1月31日

2．組　織

(1) 調査組織

平成７年度

松山市教育委員会	教育長	池山尚郷
生涯教育部	部長	渡辺和彦
	次長	三好俊彦
文化教育課	課長	松平泰定
	係長	西尾幸則
財団法人松山市生涯学習振興財団	理事長	田中誠一
	事務局長	一色正士
埋蔵文化財センター	所長	河口雄三
	主幹	山内仁
	次長	田所延行
調査係	係長	田城武志
	主任	栗田正芳（文化教育課）

平成８年度

松山市教育委員会	教育長	池田尚郷
生涯教育部	部長	三好俊彦
	次長	丹下正勝
文化教育課	課長	松平泰定
	係長	西尾幸則
財団法人松山市生涯学習振興財団	理事長	田中誠一
	事務局長	池山秀雄
	事務局次長	丹下正勝
埋蔵文化財センター	所長	河口雄三
	次長	田所延行
調査係	係長	田城武志
	主任	栗田正芳（文化教育課）

(2) 刊行組織 [平成16年3月31日現在]

平成15年度

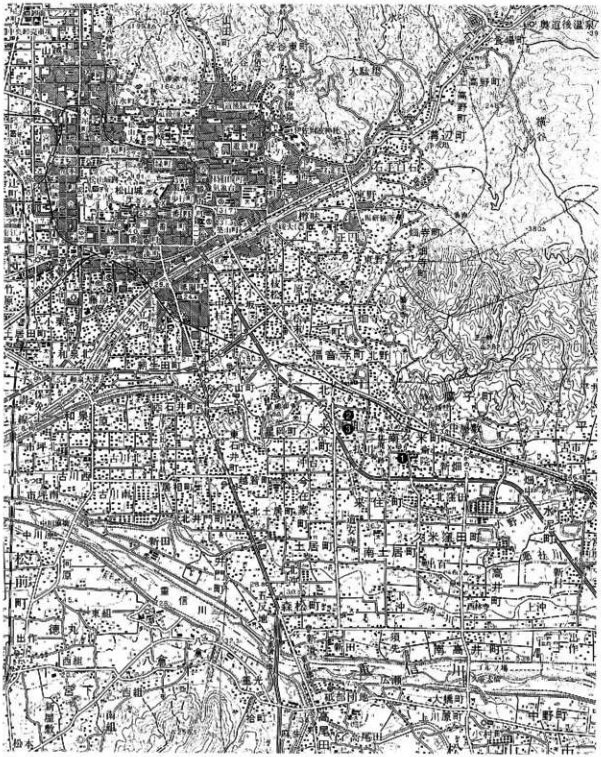
松山市教育委員会	教育長		中矢陽三
事務局	局長		武井正浩
	企画官		遠藤宗敏
	企画官		石丸修
文化財課	課長		八木方人
	上席幹		家久則雄
	副主幹		田城武志
財団法人松山市生涯学習振興財団	理事長		中村時広
	事務局長		三宅泰生
	事務局次長		菅嘉見
埋蔵文化財センター	所長		杉田久憲
	専門監兼学芸係長		高本昌陽
	次長兼調査係長		西尾幸則
	調査員		梅木謙一
	〃		高尾和長
	〃		小玉亜紀子
	〃		大西朋子

3．環　境

本書で報告する3遺跡は、松山平野を代表する古代遺跡の来住廃寺や久米高畑官衙遺跡群が含まれる「来住・久米地区」に属している。この地区には多くの遺跡があり、報告書も刊行したものが幾つかある。したがって、各遺跡の歴史的・自然地理的環境は関係の報告書を参照していただきたい。

報告書一覧

『来住廃寺』松山市文化財調査報告書 第12集、1979年。
『来住廃寺 －平成2年度調査概報－』松山市文化財調査報告書 第23集、1991年。
『来住・久米地区の遺跡』松山市文化財調査報告書 第27集、1992年。
『来住廃寺遺跡 －第15次調査－』松山市文化財調査報告書 第34集、1993年。
『来住・久米地区の遺跡 Ⅱ』松山市文化財調査報告書 第44集、1994年。
『来住廃寺 －第19次調査－』松山市文化財調査報告書 第56集、1996年。
『小野川流域の遺跡』松山市文化財調査報告書 第57集、1996年。
『小野川流域の遺跡 Ⅱ』松山市文化財調査報告書 第66集、1998年。
『来住・久米地区の遺跡 Ⅲ』松山市文化財調査報告書 第76集、2000年。
『小野地区の遺跡』松山市文化財調査報告書 第81集、2001年。
『久米高畑遺跡 －25次調査－』松山市文化財調査報告書 第93集、2003年。



第1図　調査地位置図（S=1：50.000）

第2章

来住町遺跡

6次調査地

第２章　来住町遺跡６次調査地

１．調査の経過

(1) 調査に至る経緯

平成７（1995）年５月、山内定樹氏より宅地開発に伴う埋蔵文化財の確認願いが、松山市教育委員会（以下、市教委）に提出された。本調査地は、松山市埋蔵文化財包蔵地『127 来住廃寺跡』の来住町533-1に位置している。周囲には、来住町遺跡群があり、過去に５回の調査が行われている。調査地の北隣地には、来住町遺跡３次調査地が位置しており、弥生時代から古代までの遺構が確認されている。このため、試掘調査を平成７年６月２日に実施し、土坑遺構・柱穴遺構・溝などの遺構と、須恵器片・土師器片などの遺物が確認された。その結果、両者は遺跡の取扱いについて協議を行い、本格調査を実施することになった。発掘調査は平成７（1995）年12月11日に着手し、平成８（1996）年２月９日まで行った。

(2) 調査の経過

調査は12月11日より３日間、重機を導入して地山面までの剥ぎ取り作業を行った。排土は、造成土の量が多く、外へ搬出することになった。同月19日には遺構の検出作業を終了し、遺構の調査に入った。平成８年１月25日には主要な遺構の調査を終了し、完掘写真撮影を26日に行った。その後、遺構図、地形図の測量を行い、２月９日には屋外作業を終了した。一般向現地説明会は「来住町遺跡７次調査地」と合同で２月17日に行った。

(3) 調査組織

調 査 地：松山市来住町533-1
遺 跡 名：来住町遺跡６次調査地
調査期間：平成７（1995）年12月11日～平成８（1996）年２月９日
調査面積：202.85㎡
調査協力：山内定樹
調査担当：西尾幸則（文化教育課係長）
　　栗田茂敏（(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター調査員）
　　加島次郎（同上）
　　小玉亜紀子（同上）

(4) 来住町遺跡の調査概要（第２図）

来住町遺跡は来住台地上の東部に位置し、過去５度にわたって本格調査が行われている。ここでは５回の調査の概要を述べる。

１次調査地は標高40mに立地している。調査地は昭和20～30年代に粘土採掘が行われており、遺構が殆ど破壊されていた。調査地からは土坑１基、自然流路３条などが検出され、いずれも７世紀以降に比定されている。

明確な時期は不明である。自然流路は７世紀以降に急速に土が埋まったと考えられる。

2次調査地は標高39mに立地している。検出遺構は柱穴62基、土坑2基、溝4条、井戸1基、竪穴状遺構1基（ＳＸ－1）である。溝は、水の流れていた様子が土層から判明した。遺物は主に包含層から出土している。第Ⅴ層からは、土師器・須恵器、第Ⅵ層からは弥生土器と石器が出土している。遺構では、井戸跡から8世紀前半の須恵器盤、土師器が出土している。ＳＸ－1からは7世紀前半の須恵器が出土している。本調査地は7～8世紀には溝、井戸があり、水利施設地として利用されていた土地である。

3次調査地は標高39mに立地している。遺構は第Ⅵ層（地山）上面で確認された。遺構は柱穴168基、土坑8基、溝3条、掘立柱建物址1棟、竪穴状遺構1基（ＳＸ－1）、土坑状遺構1基（ＳＸ－2）である。3次調査地は6次調査地の北隣に位置する。

4次調査地は標高38.5mに立地している。確認された遺構は溝状遺構1条である。遺物は第Ⅴ層の包含層から大量の遺物が出土した。溝状遺構は埋土・遺物・流路の方向性から、第1次調査地で検出された自然流路につながる可能性をもつ。

5次調査地からは掘立柱建物址2棟、土坑5基、溝4条、自然流路1条と、人の足跡が多数検出された。

以上、1次～5次調査地の概要を記述した。来住町遺跡は回廊状遺構や来住廃寺の東側にあたる地域で、弥生時代、古墳時代、古代、中世の遺構や遺物が多く検出している。

参考文献

(1) 梅木謙一　1990「来住町遺跡（1次）」『松山市埋蔵文化財調査年報　Ⅱ』

(2) 梅木謙一・宮内慎一　1992「来住町遺跡1次調査」『来住・久米地区の遺跡』（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

(3) 藤原敏秀　1991「来住町遺跡2次調査地」『松山市埋蔵文化財調査年報　Ⅲ』

(4) 藤原敏秀　1991「来住町遺跡3次調査地」『松山市埋蔵文化財調査年報　Ⅲ』

(5) 藤原敏秀・小笠原善治　1992「来住町遺跡3次調査」『来住・久米地区の遺跡』（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

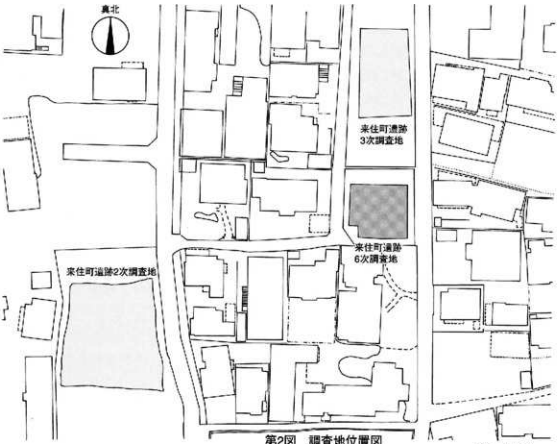
(6) 田城武志・高尾和長　1993「来住町遺跡4次調査地」『松山市埋蔵文化財調査年報　Ⅴ』

(7) 橋本雄一・梢原秀仁　1994「来住町遺跡5次調査地」『松山市埋蔵文化財調査年報　Ⅵ』

(8) 栗田茂敏・加島次郎・小玉亜紀子　1996「来住町遺跡6次調査地」『松山市埋蔵文化財調査年報　Ⅶ』

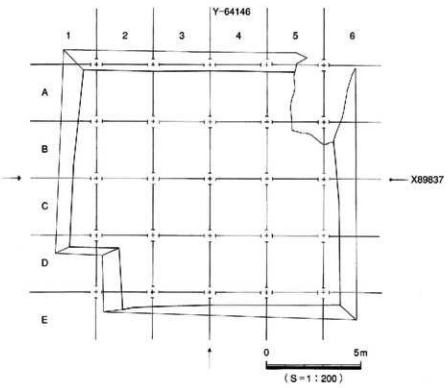
(9) 橋本雄一・小笠原善治　1996「来住町遺跡7次調査地」『松山市埋蔵文化財調査年報　Ⅶ』

(10) 宮内慎一・梢原秀仁　1999「来住町遺跡9次調査地」『松山市埋蔵文化財調査年報　11』



第2図　調査地位置図

(S=1:1,000)



第3図　調査地区画図

２．層　位（第４図）

調査地は標高39mに立地し、調査以前は耕作地であった。基本層位は、基盤層を含めて７層に分層される。色調は『新版標準土色帖　1989年版農林水産省農林水産技術会議事務所　監修』を参照した。

Ⅰ　層：近現代の造成工事・農耕による上。礫層と真砂土層が薄く幾重にも重なっている。調査区全体に厚さ0.9m堆積している。

Ⅱ　層：旧水田層。厚さは0.2mで、褐灰色土（10ＹＲ6/1）の粘性が大変強い土である。

Ⅲ　層：旧水田層。酸化鉄を多く含む土。褐色土（10ＹＲ4/6）で、遺物は殆ど含まれていない。

Ⅳ—①層：遺物包含層。調査区全面に薄く広がっている。調査区北半分では0.0５～0.1mの堆積で、南側ほど厚くなる。暗褐色土（10ＹＲ3/3）で、粘性はあまり強くない。Ⅲ層からの流れ込みの鉄分の粒が含まれる。

Ⅳ—②層：遺物包含層。調査地の南側半分に分布している。厚さは0.0５m。暗褐色土（10ＹＲ3/4）で、Ⅳ—①層よりもやや濃くなり、鉄分の包含量も多い。遺物は須恵器片、土師器片が出土している。中世以降の遺構の埋土でもある。

Ⅴ　層：調査地の北半分に分布している。厚さは0.1mで、黒褐色土（10ＹＲ2/2）。礫はまったく含まれない。粘性はなく、透水性に富んでいる。サラサラした感触がある。弥生時代～古墳時代の遺構埋土である。

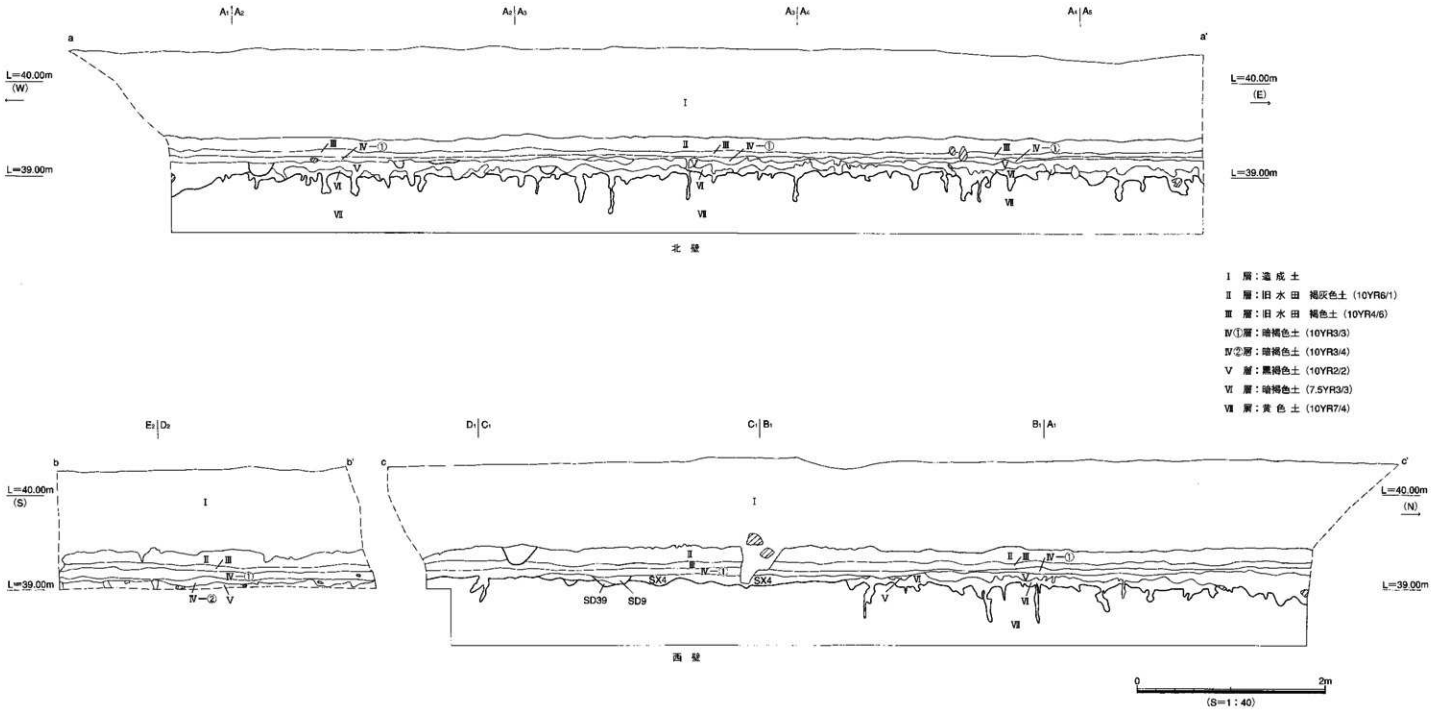
Ⅵ　層：基盤層との漸移層にあたる。第Ⅴ層と第Ⅶ層の２種類の土が混在している層である。調査地北半分に分布しており、この面で遺構を確認した。厚さは0.1mである。この土は、粘性はなく、透水性に富んでいた。暗褐色土（7.5ＹＲ3/3）で、遺物は全く含まれない。

Ⅶ　層：基盤層、いわゆる地山にあたる。調査地全体に広がっている。この面でも遺構を確認した。黄色土（10ＹＲ7/4）で、礫は含まれない。粘性が大変強く、透水性がまったくない。Ⅶ層はさほど高低差はないが、調査地北東方向から南西方向に傾斜している。

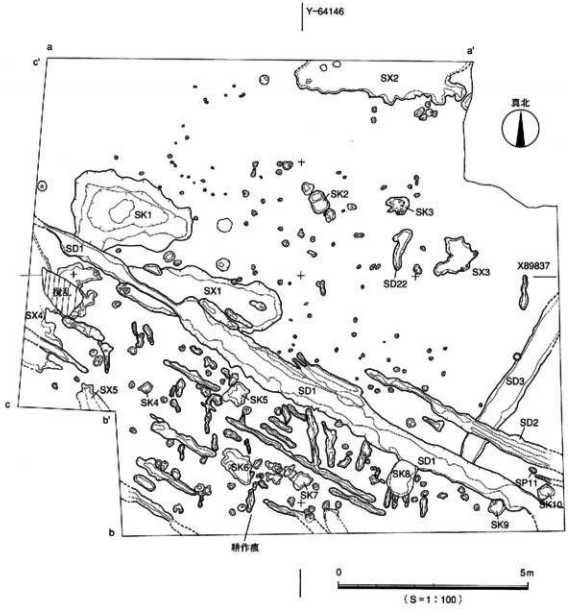
遺構は北半分ではⅥ層で、南半分ではⅦ層の上面での検出である（第４・５図）。遺物は遺構・包含層からの出土である。

３．遺構と遺物

本調査において確認された遺構は、Ⅵ層とⅦ層の上面で検出した。遺構は溝２条、鋤先状遺構39条、土坑10基、柱穴49基、性格不明遺構５基である。以下、主な遺構について記述する。


A1 A2
A2 A3
A3 A4
A4 A5
a
a'
L=40.00m
(W)
L=39.00m
L=40.00m
(E)
L=39.00m
I
II
III
IV—①
IV—②
V
VI
VII
北 壁
I 層：造 成 土
II 層：旧 水 田 褐灰色土（10YR6/1）
III 層：旧 水 田 褐色土（10YR4/6）
IV①層：暗褐色土（10YR3/3）
IV②層：暗褐色土（10YR3/4）
V 層：黒褐色土（10YR2/2）
VI 層：暗褐色土（7.5YR3/3）
VII 層：黄 色 土（10YR7/4）
E2 D2
D1 C1
C1 B1
B1 A1
b
b'
c
c'
L=40.00m
(S)
L=39.00m
L=40.00m
(N)
L=39.00m
SX4
SD39
SD9
西 壁
0
2m
(S=1：40)

第4図　土層断面図


Y-64146
a
a'
c'
c
b'
b
SX2
真北
SK2
SK3
SK1
SD1
SX3
X89837
SD22
SX1
SX4
SX5
SK4
SK5
SD1
SD3
SD2
SD1
SK6
SK8
SP11
SK7
SK10
SK9
耕作痕
0
5m
(S=1:100)

第5図　遺構配置図

(1) 弥生時代の遺構と遺物

弥生時代の遺構には、前期末～中期初頭の土坑が１基ある。

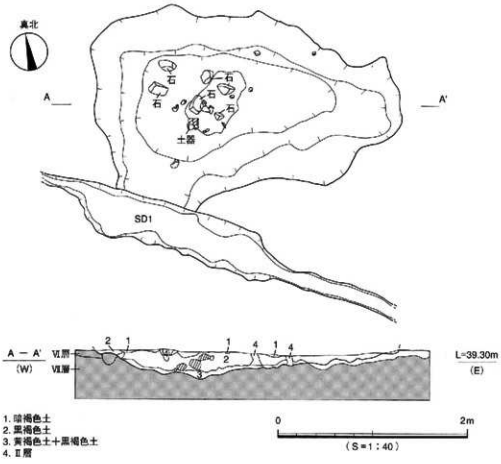
ＳＫ１（第６図、図版２）

調査区の西側に位置する。遺構の南端がＳＤ１に切られている。平面形態は不整形、規模は長軸3.2m、短軸2.1mである。断面形態は半円状・テラス状を呈する。埋土は３層に分けられる。上層は暗褐色土（5ＹＲ3/3）、中層は黒褐色土（10ＹＲ2/1）、下層は黄褐色土（10ＹＲ5/3）と黒褐色土（10ＹＲ2/1）の混在土である。下層には、焼土や焼土塊は全く確認されなかった。遺物は中層の深い場所に密集して出土し、上層と下層には含まれていない。遺物には、二次焼成を受けて破砕した弥生土器片・石器片と二次焼成を受けていない人頭大の礫が出土している。この内、実測可能な遺物は５点である。

出土遺物（第７図、図版３）

１は壺の口縁部、２は無頸壺の口縁部。外面はナデ調整で、内面は指オサエを行っている。同土器の口縁部と考えられる破片には焼成前穿孔があった。３は壺の頸部である。外面は縦刷毛調整の後、ナデ調整を行い、横方向に磨きを施している。内面はナデ調整である。４は石皿・台石の破片。５は敲石・磨石である。

時期：出土した遺物から、弥生時代前期末～中期初頭にかけての遺構である。



第6図　SK1 測量図

(2) 古墳時代の遺構と遺物

古墳時代の遺構は、溝（ＳＤ３）と性格不明遺構（ＳＸ１・２）がある。

１）溝（ＳＤ）

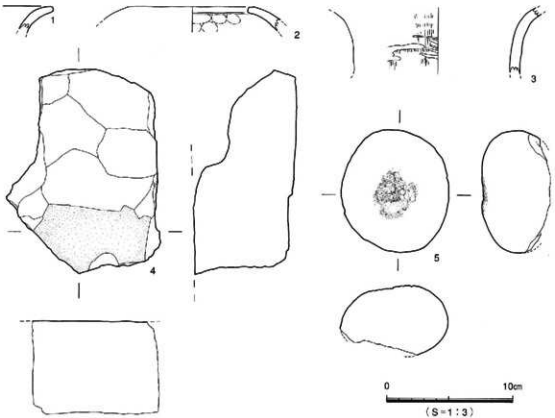
ＳＤ３（第８図）

調査区内を北東から南西方向に走る直線溝である。高低差はほとんどない。ＳＤ１・２に切られている。幅は0.8m、残存長は4.5m、深さは0.1mを測る。断面形態は、凹凸な部分と皿状な部分とがある。埋土は黒褐色土で、粘性は弱い。砂粒は確認されず、流水はなかった様子である。遺物は須恵器、土師器、弥生土器の小破片が出土している。図化できる遺物はない。

２）性格不明遺構（ＳＸ）

ＳＸ１（第９図）

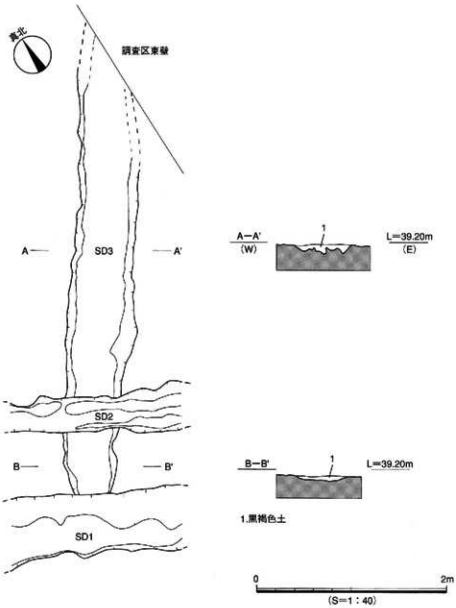
調査地のほぼ中央に位置する。遺構の南側はＳＤ１・４～７（耕作痕）に切られる。平面形態は不正形で、規模は長軸4.3m、短軸1.2m、深さ0.1mを測る。断面形態は皿状で、底面は凹凸である。埋土は黒褐色土（10ＹＲ2/2）であり、礫はまったく出土しなかった。遺物は、須恵器と弥生土器の小破片が僅かに出土している。図化できる遺物はない。ＳＫ１の主軸と平行で、埋土は類似している。



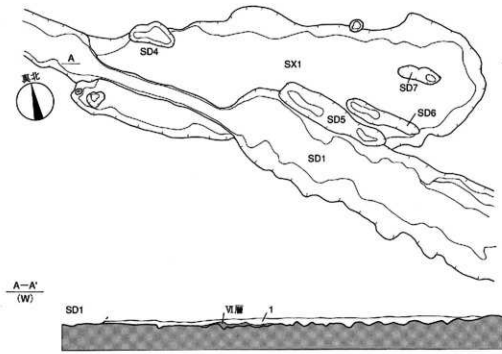
第7図　SK1 出土遺物実測図

ＳＸ２（第10図、図版２・３）

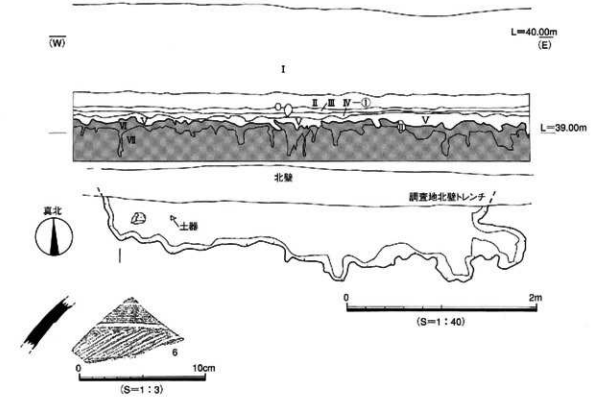
調査地の北側に位置する。遺構の大半は北壁にかかっており、正確な平面形態は不整形である。埋土は黒褐色土（10ＹＲ2/2）で、第Ⅴ層の埋土と同質同色である。断面形態は皿状で、底面は凹凸である。全体的に0.1ｍと浅い。遺物は、土師器片と須恵器片の小破片が僅かに出土した。実測可能なものは１点で、６の須恵器片は甕の口縁部である。時期は古墳時代と考えられる。



第8図　SD3 測量図



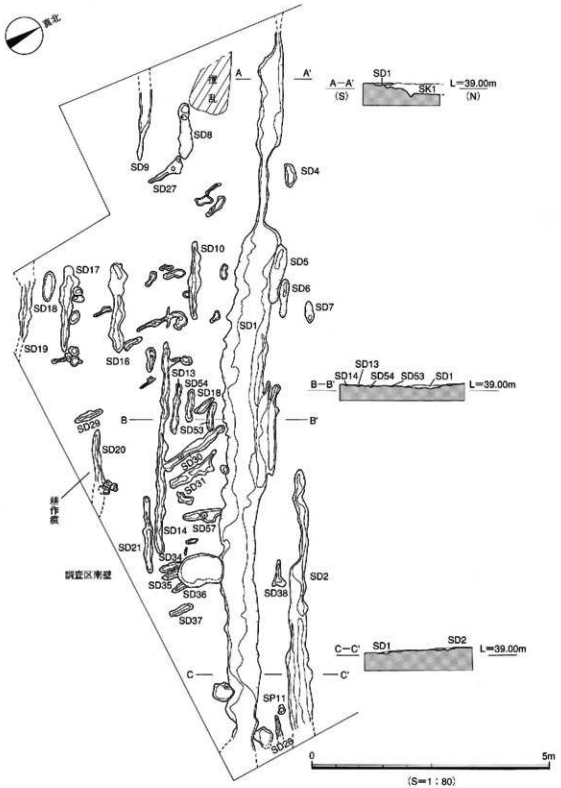
第9図　SX1 測量図



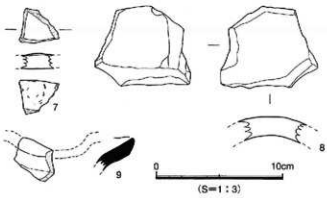
第10図　SX2 測量図・出土遺物実測図

(3) 中世以降の遺構と遺物（第11図、図版１）

中世以降の遺構について述べてゆく。これらの遺構はどれも第Ⅳ－②層が埋土になる遺構である。遺構には溝２条（ＳＤ１・２）と、鋤先状遺構36条（ＳＤ４～39）、小穴群がある。



第11図　SD1・耕作痕・SP11 測量図



7：SD1
8：SD2
9：SP11

第12図　SD1・SD2・SP11 出土遺物実測図

1）溝（ＳＤ）

ＳＤ１（第11・12図、図版１）　調査地内を東西に走る直線溝である。ＳＫ１・ＳＸ１・ＳＤ３を切る。溝の幅は0.2～0.9mと場所によって違う。深さは0.05mと浅く、痕跡的な遺構である。埋土はⅣ－②層と同じ土質・土色であり、砂礫はまったく含まれていなかった。遺物は須恵器と陶器の小破片が２点出土している。７は床面から出土した。底部と考えられるが、どちらが内外面か不明である。それぞれ明緑灰色の釉薬と、暗赤色の釉薬を施釉している。

ＳＤ２（第11・12図、図版１）

ＳＤ１と平行に調査区内を北東から東西方向に走る直線溝である。高低差はほとんどない。ＳＤ３を切る。溝の幅は0.2～0.5m、残存長は5.8m、深さは0.05mを測る。断面形態は皿状な部分と凸凹な部分がある。埋土は、Ⅳ－②層と同じ土質・土色であり、砂礫はない。遺物は遺構の底面で丸瓦片が１点出土した。８は近現代の丸瓦片である。ＳＤ２の時期は、遺物から近現代である。

2）鋤先状遺構

ＳＤ４～39（第11図、図版１）

ＳＤ１を境にしてほぼ南側に分布している小溝群である。ＳＤ１とほぼ同じ方向（東西方向）の小溝と、南北方位の小溝の２種類がある。溝によって長さに相違があるものの、幅・深さはほぼ類似している。深さは0.05mである。両者の切り合い関係は埋土が類似していた為に確認出来なかった。出土遺物はない。

3）土坑（ＳＫ）

ＳＫ４～10（第13図）

平面形態はＳＫ４～７・10が不整形、８が楕円形、９が方形である。断面形態は何れも凸凹で、深さは0.05～0.18mと浅い。遺物は全く含まれていない。埋土は中世以後の遺構と同様のⅣ層を埋土にもつ。

4）小穴（ＳＰ）

ＳＰ11（第11・12図）

調査区東壁の近くで確認された。ＳＤ１・２の間に位置する。平面形態は円形であり、規模は直径0.1m、深さ0.05mである。断面形態は皿状を呈する。埋土は中世以後の遺構と同様のⅣ層を埋土にもつ。出土遺物は床面で検出された。９は、東播系須恵器こね鉢か擂鉢の片口部分にあたる。

(4) 時期不明の遺構

1) 土坑（SK）（第13図）

SK2

調査地の北東に位置する。他の遺構と切り合い関係はない。平面形態は楕円形で、規模は長軸0.58m、短軸0.42m、深さは0.03～0.14mを測る。断面形態は北側がテラス状、南側が半円状である。埋土は黒褐色土（10YR2/3）と暗褐色土（10YR3/4）、黒色土（7.5YR2/1）との混合土であった。出土遺物はない。

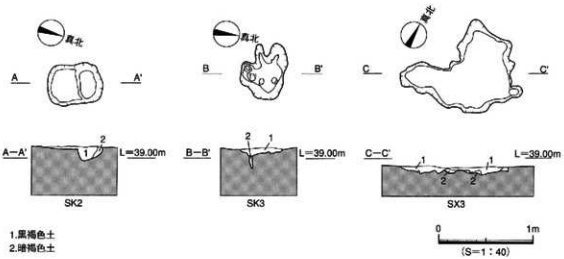
SK3

調査地の北東に位置する。平面形態は不整形で、規模は0.48×0.42m、深さ0.08mを測る。断面形態は凸凹である。埋土は黒褐色土（10YR3/2）と黒色土（10YR2/1）の混合土であった。出土遺物はない。

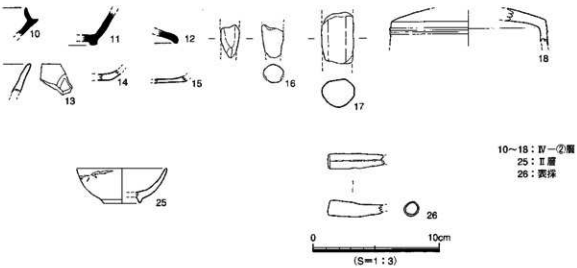
2) 性格不明遺構（SX）（第13図）

SX3

調査地の北東に位置する。他の遺構と切り合い関係はない。平面形態は不整形で、規模1.02×1.22m、深さ0.08mを測る。断面形態は凸凹である。埋土は黒褐色土（10YR3/2）と黒色土（7.5YR3/2）、暗褐色土（10YR3/3）との混合土であった。出土遺物はない。



第13図　SK2・SK3・SX3 測量図



第14図　Ⅱ・Ⅳ層 出土遺物・表採遺物実測図

(5) 遺構に伴わない遺物

ここでは遺構に伴わない遺物を報告する。遺物はⅡ・Ⅳ層から僅かに出土し、造成土であるⅠ層や表採遺物もある。

1）Ⅳ－②層出土の遺物（第14図）

10～12は須恵器片である。10は坏身の受け部、11は高台付き坏、12は坏蓋になる。13は龍泉窯系の青磁碗片である。外面には蓮弁文が描かれている。14～17は土師器である。14・15は土師器坏もしくは皿の底部で、外底面には糸切り離し痕、14の内底面は摩滅している。16・17は三足土釜の足の一部で、摩滅が激しい。18は外面に薄い乳白色の釉薬を施釉している。近世の壺の胴部上部であろう。

2）Ⅱ層出土の遺物（第14図）

25は白磁の陶磁器片である。

3）Ⅰ層出土の遺物（第15図、図版3）

19～22は弥生土器である。19は甕形土器の口縁部にあたる。口縁部は貼り付けによる。口縁端部には刻み目を施し、胴部には多条の施描き沈線文をもっている。20は壺形土器の口縁部になる。口縁端部には2条の沈線の後、刻目文を施す。19・20は弥生時代前期末～中期初頭。21は甕形土器の口縁部になる。21は口縁部の下には粘土紐を貼り付ける。22は底部である。21・22は弥生時代中期中葉の土器である。23は中世の土師器碗である。24は丸瓦の破片である。外面は縄目痕があり、内面は布目痕とナデ調整痕がある。類例は来住廃寺19次調査にある。

4）表採（第14図、図版3）

26はキセルである。吸口で、先が欠損している。時期は近世である。

４．小　結

調査地は、来住町遺跡の中でも、３次調査地と共に東端に位置している。このため、小野川と堀越川に挟まれた来住台地上に展開する遺跡の東側の範囲を知る上で、重要な場所になる。

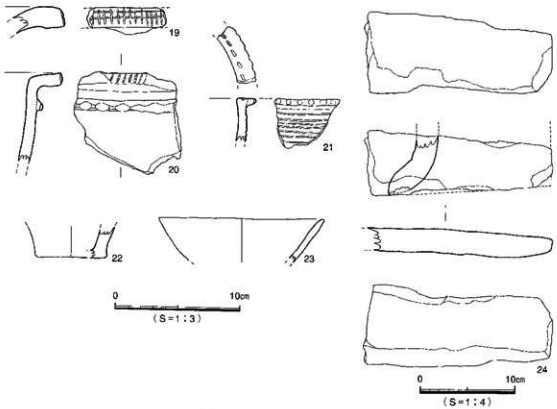
調査の結果、調査地は後世の水田耕作などで大幅な削平を受けたことが解った。このため、遺構はすべて浅かった。北隣の３次調査地の遺構検出面は、６次調査地よりも低い。しかし、遺構の残存状況は３次よりも良好であった。これは、元々の地形が３次調査地は低地部、６次調査地は高地部であったことを意味している（第16図）。

今回の調査では、遺構と遺物から確認できた時期は４段階あり、弥生時代の前期末～中期初頭の時期、古墳時代、中世、中世以後の時期がある。

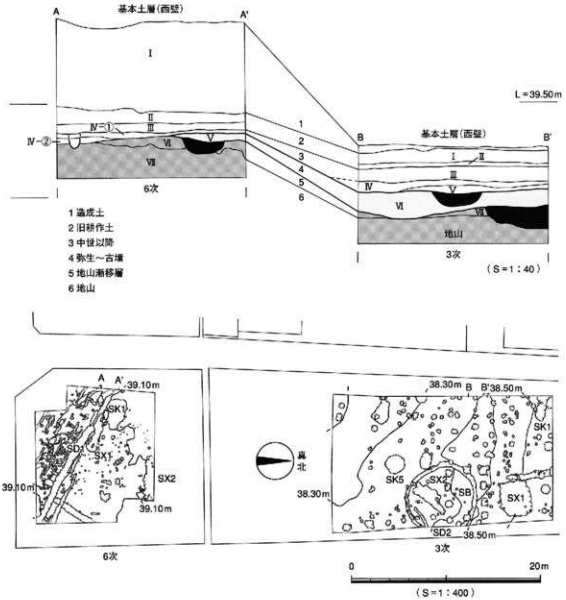
このうち、注目すべきものは、弥生時代の前期末～中期初頭のＳＫ１である。遺構の性格は、遺物の廃棄土坑と考える。埋土中には、焼土塊はまったく確認されなかったが、遺物は二次焼成を受けている。このことから、別の場所で二次焼成を受け、持ってきたと推測できる。ＳＫ１は遺物の出土状況から、来住台地上の久米高畑遺跡群や来住廃寺でも同様の遺構と遺物が数多く確認されている。弥生時代の前期末～中期初頭の時期の集落の範囲がこの場所まで及んでいたことが解った。

また、Ⅳ－②層出土品からは、中世の遺物が出土し、土師器皿や三足土釜といった生活に必要な土器以外にも、貿易陶磁器（13の龍泉窯系の青磁碗片）が出土している。

さらに、中世以後の鍬先状遺構の性格は以下のように推測できる。小溝群は耕作に伴う痕で、鍬先遺構になる。小溝の方向は２方向あり、これは耕作の方向がある時期に変化した為であろう。時期は僅かな遺物から、上限を中世、下限を近現代とする。



第15図　１層 出土遺物実測図



第16図　3次・6次調査地の対応図

遺構・遺物観察表　－凡例－

(1) 以下の表は、本調査地検出の遺構・遺物の計測値、及び観察の一覧である。

(2) 遺構の一覧中の出土遺物欄の略号について。

例)　弥生→弥生土器、土師→土師器、須恵→須恵器

(3) 遺物観察表の各記載について。

法量欄（　）：復元推定値

形態・施文欄　土器の各部位名称を略記。例）口→口縁部、頸→頸部

胎土・焼成欄　胎土欄では混和剤を略記した。

例）石→石英、長→長石、金→金雲母、密→精製土

焼成欄では焼成具合を略記した。

例）◎→良好、○→良、△→不良

表2　土坑一覧

土坑(SK)	地区	平面形	断面形	規模 長さ×幅×深さ(m)	埋土	出土遺物	時期	備考
1	B2	不整形	東側 テラス状 西側 半円形	3.2×2.1×(0.1/0.3)	㊤暗褐色土 ㊦黒褐色土 ㊦黄褐色土＋黒褐色土	弥生・石器	弥生	SD1に切られる
2	B4	楕円形	北側 テラス状 南側 半円形	0.58×0.42×(0.14/0.03)	黒褐色土 暗褐色土 黒色土			
3	B4	不整形	凸 凹	0.48×0.42×0.08	黒褐色土 黒色土			
4	D2	不整形	皿 状	0.3×0.25×0.08	暗褐色土		中世以降	
5	C3	不整形	皿 状	0.5×0.5×0.05	暗褐色土		中世以降	
6	D3	不整形	皿 状	1.1×0.6×0.05	暗褐色土		中世以降	
7	D4	不整形	皿 状	0.5×0.5×0.05	暗褐色土		中世以降	
8	D5	楕円形	皿 状	1.1×0.7×0.05	暗褐色土		中世以降	
9	E5	方形	皿 状	0.5×0.4×0.05	暗褐色土		中世以降	
10	D6	不整形	皿 状	0.4×0.4×0.05	暗褐色土		中世以降	

表3　溝一覧

溝(SD)	地区	断面形	規模 長さ×幅×深さ(m)	埋土	出土遺物	時期	備考
1	B1～D6	皿 状	16.35×(0.2/～0.9)×0.05	暗褐色土	須恵・陶器	中世以降	SD3を切る
2	C～D6	皿 状	5.80×(0.2/～0.5)×0.05	暗褐色土	丸瓦	中世以降	SD3を切る
3	C6～D5	皿 状	4.5×0.8×0.10	黒褐色土	弥生・土師 須恵	古墳	SD1・SD2に切られる

表4　性格不明遺構一覧

性格不明(SX)	地区	平面形	断面形	規模 長さ×幅×深さ(m)	埋土	出土遺物	時期	備考
1	B2～C3	不整形	凹 状	4.3×1.2×0.1	黒褐色土	弥生・須恵	古墳	
2	A3～A5	不整形	皿 状	4.2×　×0.1	黒褐色土	須恵・土師	古墳	

表5　SK1　出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
1	壺	残高2.0	ゆるやかに外反する口縁部。口縁端は丸い。	㊀ハケ→ヨコナデ	㊁ヨコナデ	黄灰色 黄灰色	石・長(2～3) 金　○		
2	壺	口径(8.8) 残高2.0	無頸壺。	㊂ナデ	㊃ナデ・指頭痕	黄灰色 黄灰色	石・長(2～3) 金　○	2次焼成を受けている	
3	壺	残高5.3	頸部は筒状を呈し、上方に立ち上がる。	㊄ハケ→ナデ→ミガキ	㊅ナデ	橙色 橙色	石・長(0.5～2) 金　○		

表6　SK1　出土遺物観察表　石製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考	図版
4	台石又は石皿	大きく欠損	砂岩	16.0	12.0	7.4	1,828.8		3
5	敲石又は磨石	一部欠損	砂岩	9.5	8.5	5.5	598.7	焼成を受けている	3

表7　SX2　出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
6	甕	残高3.9	要口縁部分。強く外反し外面には刺突刻点文が施されている。	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	灰色 灰色	長(1～2) ○		3

表8　SD1　出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
7	不明	—	陶器片。小破片のため、内・外面が不明。	施釉	施釉	明緑灰色 暗赤色	密 ○		

表9　SD2　出土遺物観察表　瓦製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
8	丸瓦	残高5.0 厚さ1.6	凹面に3本の沈線がある。	摩滅にて不明	摩滅にて不明	暗灰色 暗赤色	長(0.5以下) ○		

表10　SP11　出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
9	こね鉢か擂鉢	残高2.6	東播系こね鉢の片口部分。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰色 灰色	長(0.5以下) ○		

表11　Ⅳ層　出土遺物観察表　土製品　(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
10	坏身	残高2.3	たちあがりは内傾し、端部は丸い。受部は上外方へ短くのびる。	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	灰色 灰色	石・長(0.5～1) ○	Ⅳ－②	
11	坏	残高2.7	高台杯。高台は低く、底体部の境界付近に付く。端部は「コ」字状に仕上げる。	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	灰色 灰色	石・長(0.5以下) 赤色粒 ○	Ⅳ－②	
12	坏蓋	残高1.1	口縁部は下内方へ下がる。口縁端部は丸く仕上げる。小破片。	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	灰色 灰色	長(0.5以下) ○	Ⅳ－②	
13	碗	残高2.3	龍泉窯系青磁。 外面に蓮弁文を描く。	施釉	施釉	濃緑色 濃緑色	密 ○	Ⅳ－②	

Ⅳ層　出土遺物観察表　土製品　(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
14	皿か坏	残高 0.8	土師皿もしくは坏の底部。	糸切り痕	摩滅にて不明	橙色 橙色	密 ○	Ⅳ－②	
15	皿か坏	残高 0.5	土師皿もしくは坏の底部。	糸切り痕	ナデ	黄灰色 黄灰色	密 ○	Ⅳ－②	
16	土釜	残高	土釜の脚部。	摩滅にて不明	摩滅にて不明	黄灰色	石・長(0.5～1) △	Ⅳ－②	
17	土釜	残高	土釜の脚部。	摩滅にて不明	摩滅にて不明	黄灰色	石・長(0.5～1) △	Ⅳ－②	
18	壺釜	残高 3.0	胴部上面に、2本の凹線あり。	施釉	ヨコナデ	乳灰色 乳白色	長(0.5以下) ○	Ⅳ－②	

表12　Ⅱ層　出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
25	小鉢	口径(7.0) 残高 2.8	陶磁器。外面に草花紋あり。	施釉	施釉	白色 白色	密 ○		

表13　Ⅰ層　出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
19	甕	残高 3.5	口縁端と口縁上面に網突文を施す。外面には7本の沈線文が残存している	タテハケ→ナデ	ナデ	黄灰色 黄灰色	石・長(1～2) ○		3
20	壺	残高 2.1	口縁部分。口縁端に2本の沈線文の後に刻目文。	ナデ	ナデ	黄灰色 暗灰色	石・長(1～5) 金 △		3
21	壺	残高 7.1	指頭押圧の刻目凸帯。口縁端に刻目。	ナデ	摩滅にて不明	黄灰色 黄灰色	石・長(0.5～2) 金 ○		3
22	壺	残高 2.5 底径(6.9)	平底。	摩滅にて不明	摩滅にて不明	黄灰色 黄灰色	石・長(1～3) 金 ○	黒斑有	
23	碗	口径(13.0) 残高 3.4	口縁端は先細り。	摩滅にて不明	摩滅にて不明	橙色 橙色	石・長(0.5以下) 金 ○		

表14　Ⅰ層　出土遺物観察表　瓦製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
24	丸瓦	残高 18.8 厚さ 1.9		縄叩き ナデ	布目痕 ナデ	淡灰色	長(0.5以下) ○		3

表15　表採　遺物観察表　銅製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
26	キセル	ほぼ完形	銅	4.2	1.2	0.1	4.71		3

第3章

北久米町屋敷遺跡

2次調査地

第３章　北久米町屋敷遺跡２次調査地

１．調査の経過

(1) 調査に至る経緯

1995（平成７）年４月20日、岡本雅人氏より松山市北久米町477番地２地内における宅地開発に伴う埋蔵文化財の確認願いが、松山市教育委員会文化教育課（以下、文化教育課）に提出された。当地は松山市埋蔵文化財包蔵地『Ｎｏ.126　高畑遺物包含地』に位置している。周辺の遺跡には東隣地に北久米町屋敷遺跡調査地（以後、１次調査地と記載する）があり、中世や近世の遺構や遺物が数多く確認されている。このため、文化教育課は同年５月12日に試掘調査を実施した。試掘では、土坑状遺構や柱穴状遺構などの遺構と、須恵器片、土師器片などの遺物が確認された。この結果を受け、申請者と文化教育課の二者は遺跡の取扱いについて協議を行い、本格調査を実施することとなった。調査は、財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センターが文化教育課の指導のもと1996（平成８）年７月１日に着手し、同年８月９日まで行った。

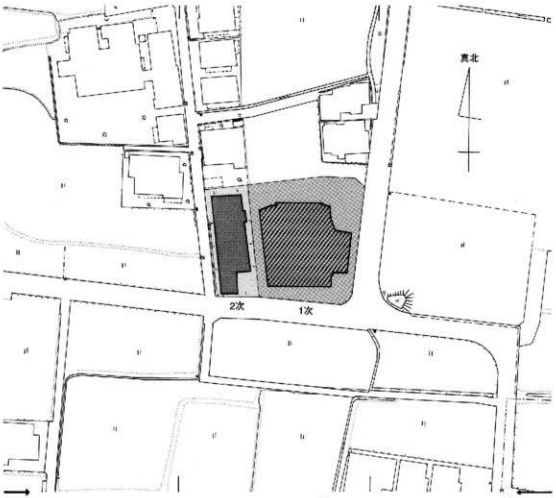
(2) 調査組織

調　査　地：松山市北久米町477番地2
遺　跡　名：北久米町屋敷遺跡２次調査地
調査期間：1996（平成８）年７月１日～同年８月30日
調査面積：347.64㎡
調査協力：岡本雅人
調査担当：西尾幸則（文化教育課係長）
　　相原浩二（(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター調査員）
　　小玉亜紀子（同上）

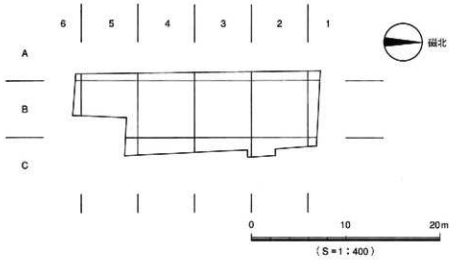
(3) 調査の経過

発掘調査は排土置き場の関係上、調査地を半分に分割して行った。先ず北半部から調査し、次いで南半部を調査した。北半部の作業は平成８年７月１日より開始し、重機を導入して地山面までの剥ぎ取りを行った。同月12日に終了した。一部剥ぎ取りの際、北側部分を掘削しすぎた。南半部の調査は同月15日から開始し、８月６日に終了した。その後、重機による埋め戻しを行い、プレハブ・道具類の撤収、そして現場の保全作業を行って９日に屋外作業を終了した。屋内作業は12日から開始し、８月30日に終了した。

発掘調査・整理は、以下の方法で行った。重機にて造成土・旧水田層の掘削を行った後、調査区北西方向に杭を打ち、任意の原点として一辺６ｍ四方の区割りを行った。区割りのラインは、任意原点の杭を基準として南北方向の軸をアルファベットで、東西方向の軸を数字で表記した（第18図）。本調査地出土の遺物はコンテナ箱に収納し、報告書掲載の遺物は、遺物番号を緑色で注記し、収納している。遺構写真類は、35㎜白黒を基準として台帳記入し、他（35㎜カラー・スライドと６×７白黒・カラー・４×５白黒）を対応させた。



第17図　調査地位置図



第18図　調査地区画図

2．層　位（第20図、図版4）

調査地は、標高33mにあり、調査以前は既存宅地であった。北久米町屋敷遺跡1次調査地は調査地の東隣地にあたる。本調査地の基本層位は基盤層を含めて大きく5層に分層される。そのうち、微弱な土色や土質の違いから第Ⅱ層は①・②・③の3層に、第Ⅳ層は①・②の2層にさらに分層した。各層位は、第Ⅰ層造成土、第Ⅱ－①層褐灰色土、第Ⅱ－②層にぶい黄褐色土、第Ⅱ－③層暗褐色土と明黄褐色土の混合土、第Ⅲ層暗赤褐色土、第Ⅳ－①層黒褐色土、第Ⅳ－②層黒褐色土、第Ⅴ層にぶい黄橙色土で、明褐色土と黒褐色土が混じる。色調は『新版標準土色帖』1989年版『農林水産省農林水産技術会議事務局　監修』を参照した。

第Ⅰ層　：近現代の造成工事による客土である。真砂土層が調査地全面に厚さ20cm程度堆積している。

第Ⅱ層－①：旧水田層。耕作土層である。褐灰色土（10YR4/1）で、厚さ約10cmである。粘性が大変強い。遺物は包含されていない。

第Ⅱ層－②：旧水田層。酸化鉄を多く含む土である。にぶい黄褐色土（10YR4/3）で遺物は殆ど含まれていない。

第Ⅱ層－③：旧水田の床土層。調査地の南東部分に分布している。暗褐色土（10YR3/3）と明黄褐色（10YR6/6）の混合土である。

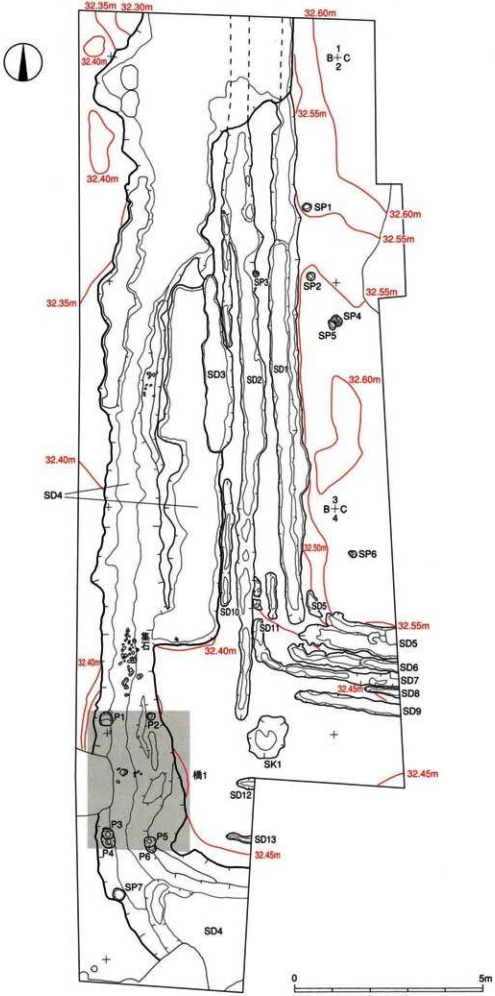
第Ⅲ層　：調査地北東部分に分布している。暗赤褐色土（2.5YR3/3）で、粘性はやや強い。遺物は含まれない。

第Ⅳ層－①：黒褐色土（10YR3/2）で、調査区全面に薄く広がっている。調査区北半分では約5～10cmの堆積で、南側になるほど厚い。粘性はあまり強くない。Ⅲ層からの流れ込みの鉄分の粒が含まれる。

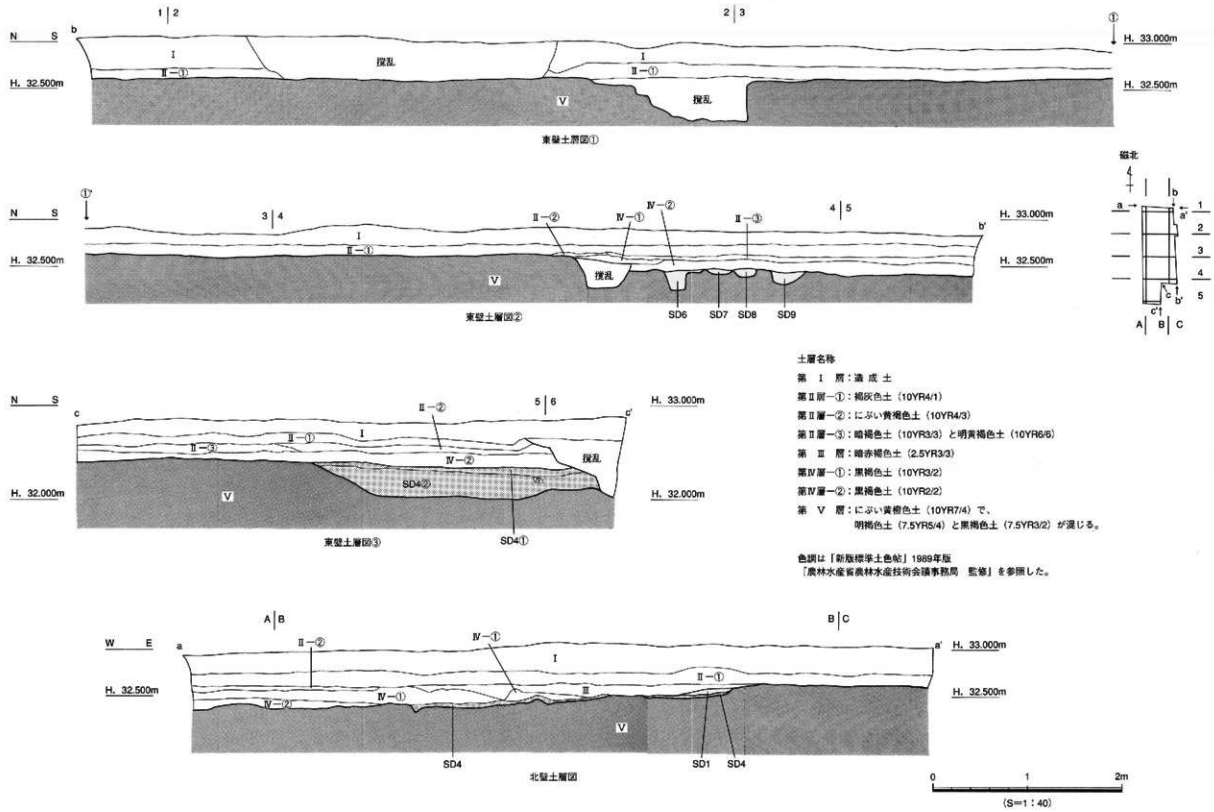
第Ⅳ層－②：調査地の北側半分に分布している。黒褐色土（10YR2/2）で、Ⅳ－①層よりもやや色調は濃くかなり鉄分の量も多い。遺物包含層で掘削時に須恵器片、土師器片、陶器片などの遺物が出土している。

第Ⅴ層　：いわゆる地山にあたる。調査地全体に広がっている。にぶい黄橙色土（10YR7/4）で、明褐色土（7.5YR5/4）と黒褐色土（7.5YR3/2）が混じる。礫は含まれない。粘性が大変強く、透水性がまったくない。本層上面で検出した遺構はいずれも遺存状況は良好なものではなく、痕跡的であった。この事からも後世、大幅に削平されている様子である。

遺構はすべて第Ⅴ層上面での検出である（第20図）。溝13条、柵1基、柱穴7基、性格不明遺構1基である。遺物は遺構及び、包含層から出土したもののほか、地点不明出土遺物がある。包含層遺物は第Ⅰ層から第Ⅲ層までは重機で掘削したために、第Ⅵ層のみの出土である。出土した遺物はテンバコ（縦60cm×横44cm×深さ8cm）に3箱ほど出土したが、殆どが図化しえない小片ばかりであった。


32.35m
32.30m
32.60m
32.40m
B-C 1-2
32.55m
32.40m
SP1
32.60m
32.55m
SP3
SP2
32.55m
32.35m
SP4
SP5
SD3
SD2
SD1
32.60m
32.40m
SD4
B-C 3-4
32.50m
SP6
SD10
SD11
SD5
32.55m
SD5
32.40m
32.40m
SD6
SD7
32.45m
SD8
SD9
P1
P2
SK1
橋1
32.45m
SD12
P3
P5
SD13
P4
P6
32.45m
SP7
SD4
0
5m
(S=1:100)

第19図　遺構配置図



土層名称

第 I 層：遺 成 土
第II層一①：褐灰色土（10YR4/1）
第II層一②：にぶい黄褐色土（10YR4/3）
第II層一③：暗褐色土（10YR3/3）と明黄褐色土（10YR6/6）
第 II 層：暗赤褐色土（2.5YR3/3）
第IV層一①：黒褐色土（10YR3/2）
第IV層一②：黒褐色土（10YR2/2）
第 V 層：にぶい黄橙色土（10YR7/4）で、
明褐色土（7.5YR5/4）と黒褐色土（7.5YR3/2）が混じる。

色調は『新版標準土色帖』1989年版
『農林水産省農林水産技術会議事務局 監修』を参照した。

第20図 北壁・東壁土層図

3．遺構と遺物

(1) 中　世

本調査では13条の溝を検出したが、室町時代の溝はＳＤ４の１条のみである。

1）溝

ＳＤ４（第23図、図版５）

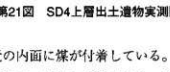
調査地西半部Ａ２～Ｂ５区に位置する。北側の部分は撹乱の際に掘りすぎたこの為、不明の部分がある。溝の南端は、「Ｌ」字形に折れ曲がる。幅は約1.3～3.4m、断面形は「Ｕ」字状を呈す。床面は北から南へそして、西から東方向へと傾斜しており、各方向での比高差は南北方向では約30cm、東西方向では約10cmである。埋土は２層に分層される。上層は黒褐色土（10YR3/2）で、堆積は薄く、粘性は強い。下層は灰黄色土（10ＹＲ4/2）で、粘性は上層よりも弱く、砂質の混入する層である。溝の南側の床面には所々に拳大の礫が集積していた。これらのことから、当時は流水があったものと推測する。遺物は殆どこの下層で出土した。

一方、ＳＤ４の中央部にはテラス部分がある。ＳＤ４とは幅10～50cmの地山に隔てられており、埋土はＳＤ４上層の土が堆積していた。幅は約1.4mで、床面は北から南へと傾斜し、比高差は約10cmであった。北側と南側はそれぞれＳＤ４の本流と連結している。テラス面の方が本流より高い。テラス面は、その形状やＳＤ４との配置関係などからＳＤ４に付設する給排水施設の可能性も考えられる。しかし、遺構の遺存状況が悪く、杭なども確認できない為、可能性に留めておく。

出土遺物　（第21・22図、図版10）

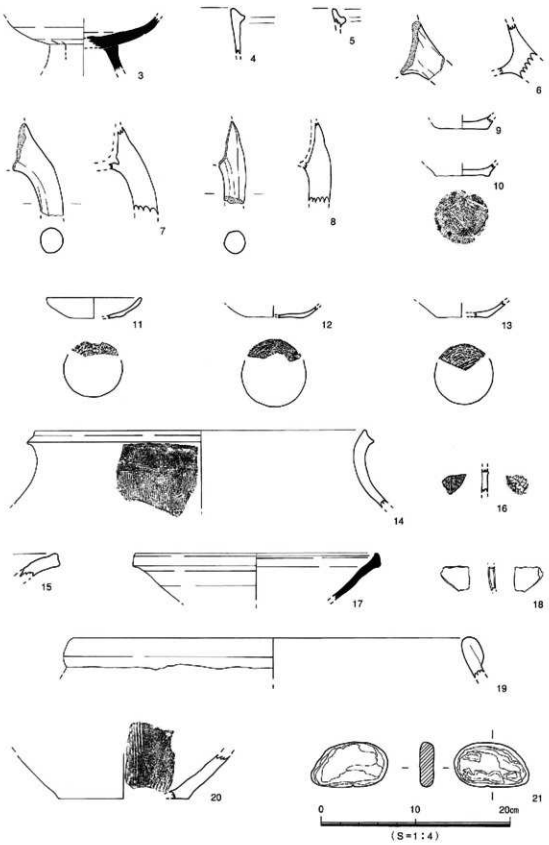
上層出土品　１は土師器坏である。外底面は回転糸切り痕が、内底面には同心円のくぼみ痕が残る。２は三足付き羽釜の脚部である。

下層出土品　３は須恵器の高坏で、坏部は丸く仕上がり、脚部には方形の透かし孔を有す。ＳＤ４からの古墳時代の遺物はこの１点のみである。４～８は土釜で、５は瓦質、その他は土師質である。４は口縁端部に断面三角形の凸帯が垂下し、外面には煤が付着している。６～８は脚部で、いずれも胴部との接合部分にあたり、接合方法が観察できる。外底部と脚部の接合部付近の内面に煤が付着している。５は凸帯が口縁端部からやや下がった部位に巡っている。９～13は土師器で、坏および皿である。９は内外底面とも摩滅が激しく、10は糸切りの後に板状工具の痕が残り、11・12は糸切り痕を残す。13は外底部に、回転糸切り後の板状工具の痕が見られる。内底面には同心円状の凹みが数条巡り、指ナデが残る。14～16は亀山焼で、14は大甕で、頸部から口縁部にかけてはゆるやかに内傾し、口縁部は外反、口縁端部は上下にやや拡張する。外面には荒い縦方向の刷毛目調整を施し、胴部に格子目叩き痕を施す。内面は摩滅が激しい。15は甕の口縁部になる。16は胴部片で、外面には格子目叩き痕があり、内面は刷毛目調整を施す。17は播磨系のこね鉢で、口縁端部は上下に肥厚し、内面に凹みを有す。18は貿易陶磁器で、青磁器の胴部片で、器種は不明である。19・20は備前焼であり、19は大甕の口縁部で、口縁部は内傾し、端部は口縁部を引き伸ばし、外面に折り曲げて玉縁状に仕上げている。20は擂鉢の胴底部で、内面には櫛描きの平行条線を放射状に施す。21は緑色片岩製の石で、加工した痕跡はみられない。他には、火葬骨片が数点出土している（未掲載）。

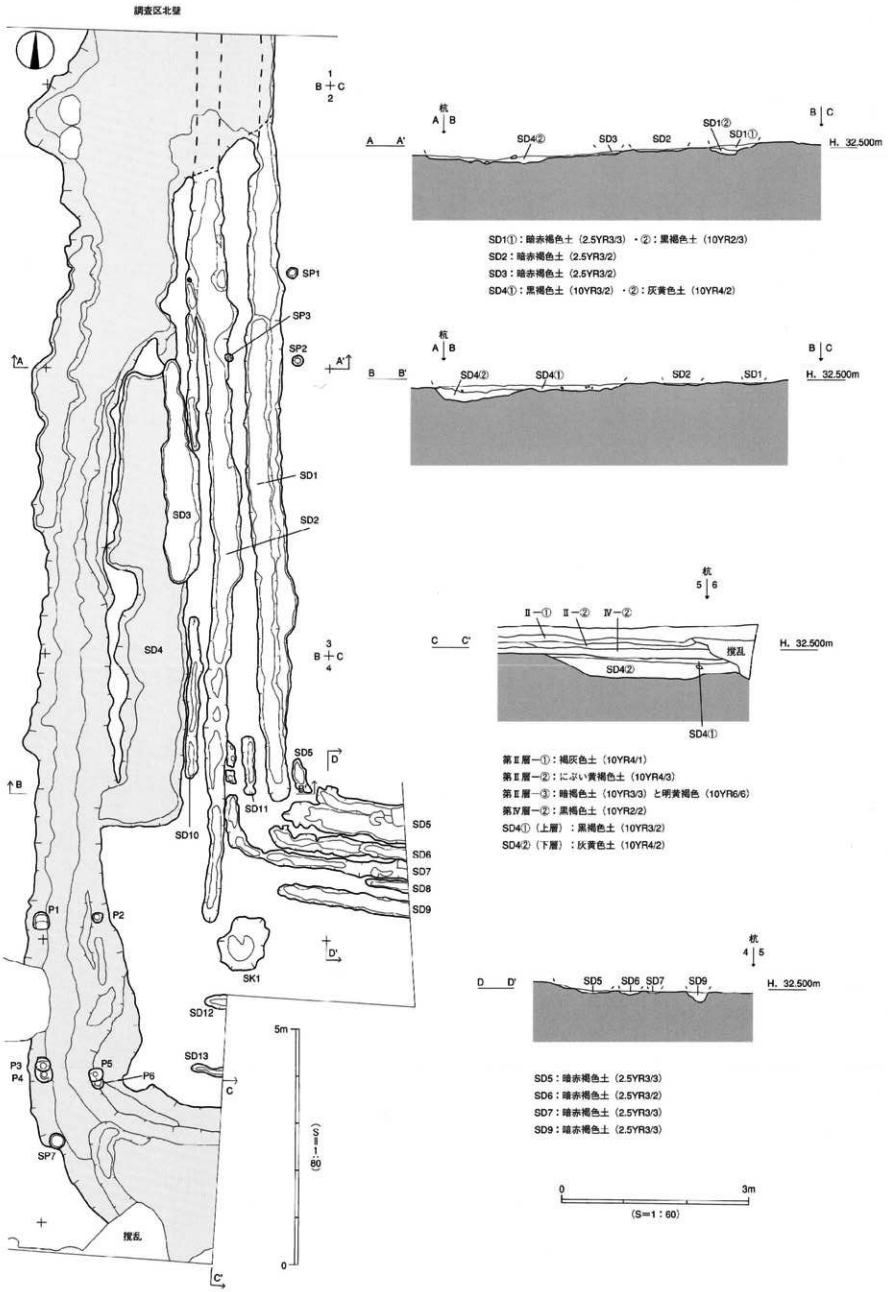


（S=1：4）

第21図　SD4上層出土遺物実測図



第22図　SD4下層 出土遺物実測図



第23図　SD1～SD13 測量図

時期：遺物は殆どが下層からの出土であり、古墳時代の遺物もみられるが、出土した遺物の大半は15世紀後半の特徴を示している。よって、ＳＤ４の時期も室町時代後期、15世紀後半と考えられる。

２）橋（第24図、図版８）

橋１

調査地の南西部、ＳＤ４底面で検出された。柱穴は６基あり（Ｐ１～Ｐ６）、いずれの柱穴からも柱痕材・柱痕跡などは検出されず、出土遺物もなかった。Ｐ１・２・４・６の埋土は黒褐色土（10ＹＲ3/2）で粘性は強い。Ｐ３・５の埋土は暗褐色土（7.5ＹＲ3/4）である。以下、それぞれの規模、形状を記載する。Ｐ１は円形で、径35～37cm、深さ50cmを測る。Ｐ2は円形で、径21～24cm、深さ15cmを測る。Ｐ３は円形で、径27～29cm、深さ46cmを測る。Ｐ４は楕円形で、長径42cm、短径33cm、深さ55cmを測る。Ｐ３とＰ４は切り合い関係にあり、Ｐ３がＰ４を切っている。Ｐ５は円形で、径27～29cm、深さ37cmを測る。Ｐ６は楕円形で、長径25cm、短径14cm、深さ13cmを測る。Ｐ５とＰ６は切り合っており、Ｐ５がＰ６を切っている。この柱穴群を「橋」と推定する根拠には遺構の配置があげられる。柱穴はＳＤ４内にあり、溝の方向とほぼ直交していることや、断面形では西側にある柱穴群はいずれも深く、東側は浅いと共通していることである。そして、中世の絵図・絵巻物などを参考すると橋遺構（板橋）が想定でき、ＳＤ４に伴うものと判断した。柱穴の切り合い関係からは修復された様子も推測できる。

時期：検出状況より、15世紀後半とする。

３）土坑（第25図）

ＳＫ１　調査地南側、Ｂ４・５区に位置する。平面形は不整楕円形を呈し、規模は長径1.18m、短径0.88m、深さ10cmである。断面形は皿状を呈し、埋土は黒褐色土である。遺物には15世紀後半の亀山焼の甕口縁部が１点ある。22は大甕の口縁部で、口縁端部はつまみ上げられている。外面には荒い縦刷毛目調整が、内面には横方向の刷毛目調整が施されている。

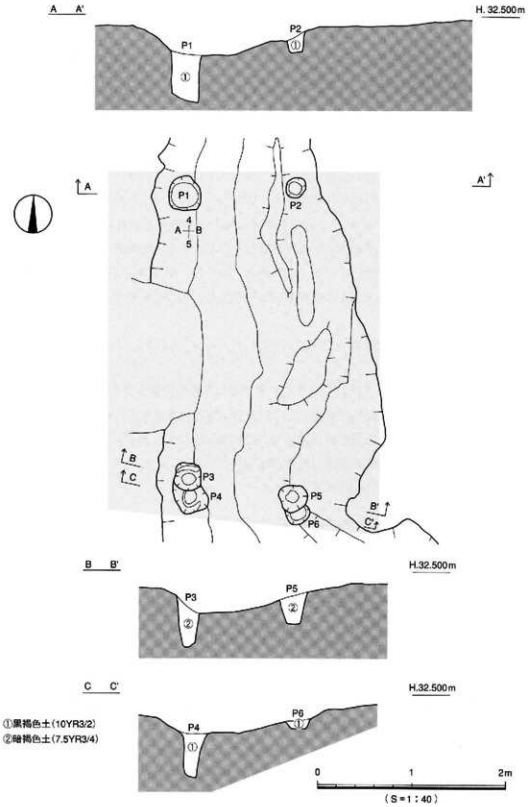
時期：出土した遺物から、15世紀後半頃とする。

(2) 江戸時代

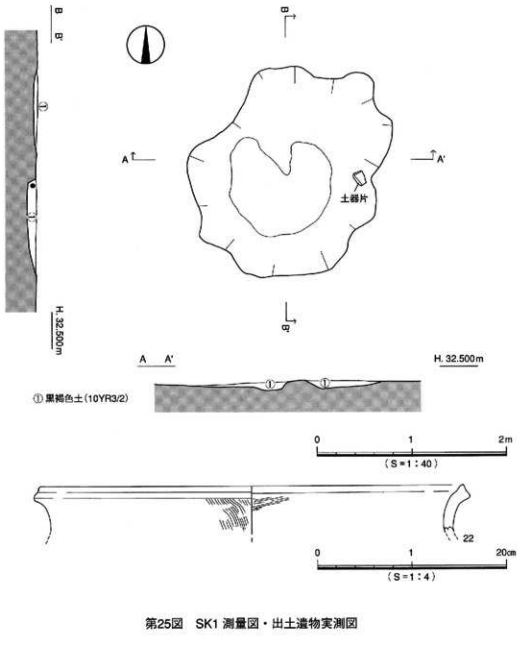
１）溝（第23図、図版６・８・10）

溝は12条確認されている。溝は南北方向（ＳＤ１～３・10・11）と東西方向（ＳＤ５～９・12・13）の２方向に属し、調査区南側でほぼ直交する。どれも痕跡的な溝ばかりであった。遺物は近世の陶器片や中世の土師器・陶器片など出土している。うち、図化できるものは中世のものばかりであった。

ＳＤ１　調査地の中央部、Ｂ２～Ｂ３区に位置する。北側の部分は掘削の際に掘りすぎた。しかし、北壁面の断面観察を行い、南北に走る溝であると確認した。調査区南側でＳＤ５と直交する。底面は北から南方向へと傾斜している。幅は40～70cm、深さは8cmを測る。断面形は舟底状で、中段にテラスを持つ。埋土は２層に分層できる。上層は暗赤褐色土（2.5ＹＲ3/3）で、堆積は薄く、粘性は弱い。下層は黒褐色土（10YR2/3）で、粘性の強い層である。砂礫は確認されなかった。遺物は、上下層共に小片が数点出土したのみである。近世の陶器片や中世の陶磁器片も出土し、そのうち図化しうるもの１点を掲載した（第26図）。23は上層出土の備前焼擂鉢の胴部片で、内面に櫛描きの平行条線を放射状に施す。


A　A'
H.32.500m
P1
P2
①
A
A'
P1
P2
4
A
B
5
B
C
P3
P4
P5
P6
B'
C'
B　B'
H.32.500m
P3
P5
②
②
C　C'
H.32.500m
P4
P6
①
①
①黒褐色土(10YR3/2)
②暗褐色土(7.5YR3/4)
0
1
2m
(S=1:40)

第24図　橋1測量図



第25図　SK1 測量図・出土遺物実測図

SD2　SD1とSD3の間に位置し、SD1とほぼ平行に南北に走る溝である。SD1と同様に北側の部分は掘削の際に掘りすぎたが、北壁面の断面観察により、南北に走る溝であると確認した。幅は40～70cm、深さは7cmを測る。断面形は舟底状で、埋土は暗赤褐色土（2.5YR3/2）で粘性が強い。砂礫は確認されなかった。調査地北側に幅20cmの細い溝が重複しているが、埋土が共通するために、切り合い関係を確認できなかった。遺物は中世の土師器や陶磁器のほか、近世の陶器片も少量出土している。遺物は図化しうるものを2点掲載した（第26図）。24は備前焼の擂鉢の胴部片。25は土師器皿で、底部外面に回転糸切り痕を残す。

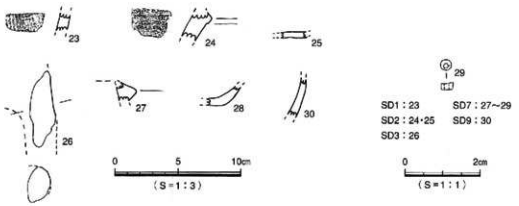
ＳＤ３　ＳＤ２の西側を南北に走る溝で、ＳＤ４を切っている。幅は40～70cm、深さは7cm、全長は4.8mを測る。東西方向に対応する溝はない。断面形は舟底状で、埋土は暗赤褐色土（2.5YR3/2）で粘性が大変強い。砂礫は確認されず、出土遺物は小破片のみであった。遺物は図化しうるものを１点掲載した（第26図）。26は土師質の三足羽釜の脚部で、摩滅が激しい。

ＳＤ５　東西方向の溝の最も北側を走る溝で、ＳＤ１と直交する。完掘後に２条に観察できたが、埋土がほぼ共通であった為、切り合いは確認できなかった。幅は50～80cm、深さは8cmを測る。断面形はどちらも皿状で、埋土は暗赤褐色土（2.5YR3/3）で、粘性が大変強い。砂礫はなく、遺物は土師器と陶器の小片が出土したが、図化しうるものはない。

ＳＤ６　ＳＤ５とＳＤ７の間を東西方向に走る溝で、ＳＤ11と直交する。幅は50～80cm、深さは10cm、検出長は3.0mを測る。断面形は皿状である。埋土は暗赤褐色土（2.5YR3/2）で粘性が大変強い。砂礫は確認されず、遺物は近世段階の陶器片のみであった。

ＳＤ７　ＳＤ６とＳＤ８の間に位置し、「L」字形に折れ曲がる溝である。幅は80cm、深さは9cmを測る。断面形は舟底状で、埋土は暗赤褐色土（2.5YR3/3）で粘性は強い。砂礫は確認されず、遺物は近世段階の小破片とガラス小玉１点が出土している（第26図、図版10）。27・28とも土師質土器であり、27は三足羽釜の口縁部で、口縁端部に断面三角形の凸帯を貼付する。28は坏で、内外底面とも摩滅が激しい。29はガラス小玉で、色は透明感のある青色であり、幅0.1cmの棒を螺旋に巻いて形成している様子がうかがえる。

ＳＤ８　ＳＤ７とＳＤ９の間に位置し、東西方向に走る溝である。幅は20cm、深さ30cm、検出長1.0mを測る。断面形は皿状で、埋土は暗赤褐色土（2.5YR3/2）で粘性は強い。砂礫は確認されなかった。出土遺物は土師器の小片であった。



第26図　SD1～3・7・9 出土遺物実測図

ＳＤ９　東西方向の溝で、ＳＤ８の南側を走る溝である。幅は30cm、検出長2.8ｍを測る。深さは35cmと他に比べてやや深い。断面形は「Ｕ」字状で、埋土は暗赤褐色土（2.5YR3/3）で、粘性が大変強い。砂礫は確認されず、出土遺物は土師器、陶器の小片であった。遺物は図化しうるものを１点掲載した（第26図）。30は陶器片で、内外面とも鉄釉を施している。

ＳＤ10　ＳＤ２とＳＤ４の間に位置し、南北に走る溝である。幅は20cm、深さは30cm、全長は3.3ｍを測る。東西方向に対応する溝はないが、ＳＤ２と重複している溝とつながる可能性がある。断面形は皿状で、埋土は暗赤褐色土（2.5YR3/2）で粘性は強い。砂礫は確認されなかった。遺物は小破片が出土したが、図化しうるものはない。

ＳＤ11　ＳＤ１とＳＤ２の間を南北方向に走る溝である。幅は30cm、深さは3cm、全長は1.3ｍを測る。東西方向に対応する溝はＳＤ６である。断面形は皿状で、埋土は暗赤褐色土（2.5YR3/2）で粘性が大変強い。砂礫は確認されず、遺物は少量の土師器破片が出土したが、図化しうるものはない。

ＳＤ12　東西方向の溝で、調査区の南端で検出された。幅は30cm、深さ4cmである。断面形は皿状を呈し、埋土は暗赤褐色土（2.5YR3/3）で、粘性は強い。砂礫は確認されず、出土遺物はない。

ＳＤ13　東西方向の溝で、ＳＤ12の南側で検出された。幅は20cm、検出長80cm、深さ1cmである。断面形は皿状、埋土は暗赤褐色土（2.5YR3/3）で、粘性は強い。砂礫や遺物は出土していない。

(3) その他の遺構と遺物

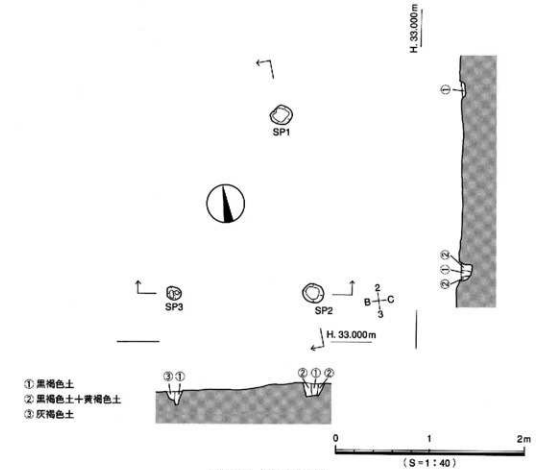
1）柱穴（第27図）

柱穴は７基確認した。ＳＰ１は円形で、径21～24cm、深さ４cmを測り、ＳＰ２は円形で、径19～23cm、深さ14cmを測る。ＳＰ２とＳＰ３では柱痕を確認した。ＳＰ３は楕円形で、長径16cm、短径13cm、深さ15cmを測る。ＳＰ１～ＳＰ３は、柱穴の配置から掘立柱建物柱穴の可能性が考えられる。時期は出土遺物がない為、特定できない。

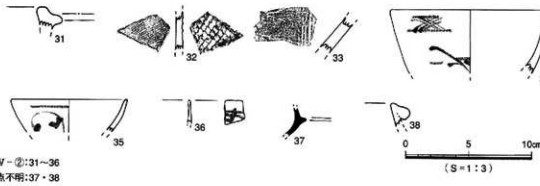
ＳＰ４～ＳＰ７は柱痕もなく、単独で存在しており、性格や時期は不明である。ＳＰ４は円形で、長径31cm、短径19cm、深さ13cmを測る。ＳＰ５は楕円形で、長径24cm、短径19cm、深さ7cmを測る。ＳＰ６は楕円形で、長径22cm、短径16cm、深さ5cmを測る。ＳＰ７は円形で、径は33～34cm、深さ６cmを測る。各柱穴の埋土はいずれも黒褐色土（10ＹＲ3/2）で、粘性は強い。砂礫は確認されなかった。

2）Ⅳ－②層出土遺物（第28図）

31は土釜の口縁部で、口縁端部直下に断面方形の凸帯が巡り、器壁が厚い。32は亀山焼の甕の胴部で、外面は格子目の叩き痕、内面には刷毛目調整を施す。33は備前焼の擂鉢の胴部で、内面には放射線状に平行条線が入る。34・35は陶器の碗で、34は外内面に灰オリーブ色が施釉され、暗緑灰色の染付があり、35は灰白色で施釉しており、暗緑色の染付がある。36は白磁の陶磁器破片で、器種は不明。外面に暗赤色の染付が施されている。他に、小片の為図化できない遺物としては龍泉窯系の青磁の破片や、火葬骨片も出土している。



第27図　柱穴測量図



第Ⅳ－②:31～36
地点不明:37・38

第28図　包含層・地点不明遺物実測図

3）地点不明出土遺物（第28図）

37は須恵器の坏身で、たちあがりは内傾しており、受部は水平にのびる。38は土師質の土釜の口縁部で、凸帯は口縁端部の直下を垂下して巡っている。

4．小　結（第29・30図、図版９）

本調査では中世と近世の２時期の遺構と古墳時代から近世までの遺物を確認した。本調査地と東隣地の１次調査地で検出した各溝は、それぞれ同一の遺構であることが確認できた。以下、１次調査地の遺構も合わせて時代ごとにまとめをおこなう。

(1) 古墳時代

古墳時代の遺物は、ＳＤ４内で須恵器の高坏片が１点と、地点不明の坏身片が１点出土し、時期は５世紀末から６世紀初頭と考えられる。遺構は確認していない。

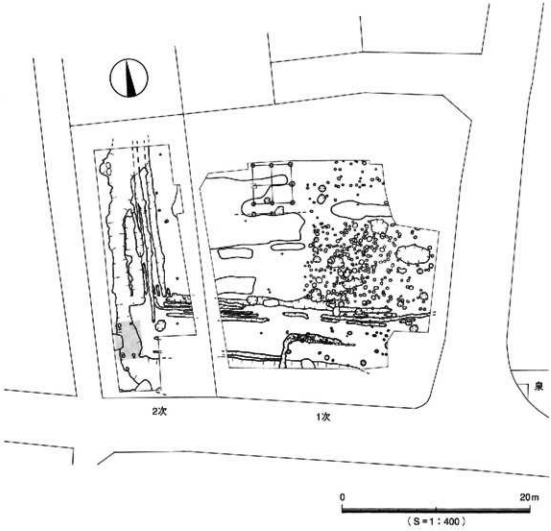
(2) 中　世

中世に時期比定される遺構には、溝１条、橋１基、土坑１基がある。溝ＳＤ４は出土遺物より室町時代後期に埋没した溝と考えられる。溝は調査地南端をコーナーにして「Ｌ」字形に折れ曲がり、調査地外に延びている。調査地北東を巡って、区画溝になる可能性が高い。１次調査地の北部から２×２間の小規模な掘立柱建物が１棟検出されている事や、出土遺物には、三足羽釜や土師皿、坏などがまとまって出土している事から、ＳＤ４より東側に居住空間のあった可能性が高い。橋１は区画溝の西辺に位置する「板橋」と考えられる。また、１次調査地からも貿易陶磁器片が出土し、集落の中心である屋敷跡のあった可能性が高い。ＳＤ４出土の火葬骨片は調査地北方向から流れてきたと推測される。火葬墓の存在を知らず破壊したか、または近辺に火葬場があったことが考えられる。土坑ＳＫ１は、性格を明確にすることができなかった。

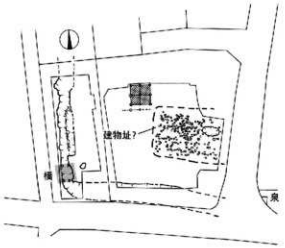
(3) 近　世

近世の遺構には溝12条がある（ＳＤ１～３・５～13）。12条の溝は、規模や形状が類似すること、埋土がほぼ同色であること、さらに出土した遺物がいずれも中・近世のものであることから、ほぼ同時期の遺構と考えられる。ただし、同時に併存していたのかは判断しがたい。また、埋土は粘性が強く、流水溝とは考えにくく、どの溝の床面にも柱穴などは検出されなかった。溝の性格は、その形状や埋土より居住空間を区画するものと考えられている。区域内では、この時期の遺構は確認されていないが、土師皿や灯明皿などの生活に使用する遺物は出土している事から、住居などが存在するものと考えられる。また、殆どの溝は中世の溝（ＳＤ４）と同じ区域を巡状況にあり、幾度か修復している様子が伺われる。他にも、１次調査地から人頭大の石敷き溝が１条検出している。しかし、これらの溝が同時併存していたかは明らかでない。

以上、調査成果としては中世に引き続き近世においても溝が同じ区域を巡っていた事を確認した。本調査地の字名は『町屋敷』と云い、地名からは何らかの「やしき・やかた」が本調査地周辺に存在していた事が考えられる。現状ではいつ頃から当地がこのように呼称され出したかは調べにおよばなかった。今回の調査では、北久米地域の一部分を調査したにすぎない。今後の課題では調査地の北東方面の調査は重要になり、中・近世における溝の規模、溝の区域内の遺構確認、その配置、居住者の階層等を解明する事や、文献調査があげられる。



第29図　北久米町屋敷遺跡 1次・2次調査地測量図



第30図　北久米町屋敷遺跡の変遷図

参考・関連文献

(1) 渋澤敬三　1965『絵巻物による　日本常民生活絵引』第二巻　角川書店
(2) 森田　稔　1986「東播系中世須恵器生産の成立と展開　－神出古窯址群を中心に－」『神戸市立博物館研究紀要　第3号』神戸市立博物館
(3) 伊藤　晃　1987「窯業」『岡山県の考古学』吉川弘文館
(4) 篠原芳秀　1987「草戸千軒町遺跡出土の亀山焼選」『中近世土器の基礎研究Ⅱ』
(5) 中野良一　1988「愛媛県における古代末から中世の土器様相」『中近世土器の基礎研究Ⅳ』
(6) 宮本一夫編　1989「道後平野の中世土器編年－13～15世紀を中心に」『鹿子・樽味遺跡の調査』愛媛大学埋蔵文化財調査室
(7) 間壁忠彦　1991考古学ライブラリー60『備前焼』ニューサイエンス社
(8) 久米郷誌編纂委員会　1992『久米郷誌』久米公民館
(9) 上田　真編　1993「由江戸園日遺跡』松山市教育委員会・（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
(10) 田崎博之編　1993『樽味遺跡Ⅱ－樽味遺跡2次調査報告－』愛媛大学埋蔵文化財調査室
(11) 梁田正芳・河野史知編　1993「古照遺跡7次調査地」松山市教育委員会・（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
(12) 松山市教育委員会・（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター編　1993「北久米町屋敷遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報　V』
(13) 武正良浩　1994「北斎院地内遺跡の中世集落」『斎院の遺跡』松山市教育委員会・（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
(14) 橋本雄一　1994「道後今市9次遺跡」『道後城北遺跡群Ⅱ』松山市教育委員会・（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
(15) 橋本雄　編　1994『北久米浄蓮寺遺跡～3次調査地～』松山市教育委員会・（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

遺構・遺物観察表　－凡例－

(1) 以下の表は、本調査地検出の遺構・遺物の計測値、及び観察の一覧である。
(2) 遺物観察表の各記載について。
　法量欄　　（　）：復元推定値
　形態・施文欄　土器の各部位名称を略記。
　　例）口→口縁部、頸→頸部、胴→胴部、底→底部
(3) 胎土・焼成欄　胎土欄では混和剤を略記した。
　　例）石→石英、長→長石、金→金雲母、密→精製土
　　焼成欄では焼成具合を略記した。
　　例）◎→良好、○→良、△→不良

表16　溝一覧

溝(SD)	地区	断面形	規模(m) 長さ×幅×深さ	方向	埋土	出土遺物	時期	備考
1	B2～B3	舟底状	16.10×$\frac{0.7}{0.4}$×0.08	南北	(上層)暗赤褐色土 (下層)黒褐色土	土師・陶器	近世	
2	B2～B3	舟底状	15.1×$\frac{0.7}{0.34}$×0.07	南北	暗赤褐色土	土師・陶器	近世	
3	B3	舟底状	4.72×$\frac{0.7}{0.32}$×0.07	南北	暗赤褐色土	土師・備前焼	近世	SD4を切る。
4	B2～B5	U字状	25.7×$\frac{3.4}{1.3}$×0.12	南北～東西	(上層)黒褐色土 (下層)灰黄色土	土師・須恵 亀山焼・備前焼	中世	SD3に切られている。焼き骨(獣骨)出土。
5	B4～C4	皿状	2.64×$\frac{0.82}{0.53}$×0.08	東西	暗赤褐色土	／	近世	
6	B4～C4	皿状	3.0×$\frac{0.46}{0.22}$×0.11	東西	暗赤褐色土	土師・陶器	近世	
7	B4～C4	皿状	4.7×$\frac{0.82}{0.22}$×0.07	東西	暗赤褐色土	土師	近世	
8	C4	皿状	0.97×$\frac{0.22}{0.18}$×0.3	東西	暗赤褐色土	土師	近世	
9	B4～C4	U字形	2.8×$\frac{0.35}{0.35}$×0.35	東西	暗赤褐色土	土師・陶器	近世	
10	B3～B4	皿状	3.3×$\frac{0.36}{0.20}$×0.3	南北	暗赤褐色土	／	近世	
11	B4	皿状	1.26×$\frac{0.28}{0.22}$×0.02	南北	暗赤褐色土	／	近世	
12	B5	皿状	0.44×$\frac{0.32}{0.30}$×0.04	東西	暗赤褐色土	／	近世	
13	B5	皿状	0.78×$\frac{0.2}{0.14}$×0.01	東西	暗赤褐色土	／	近世	

表17　土坑一覧

土坑(SK)	地区	平面形	断面形	規模(m) 長さ(長径)×幅(短径)×深さ	床面積(㎡)	埋土	出土遺物	時期	備考
1	B4・B5	不整形 楕円形	皿状	1.18×0.88×0.10	1.04	黒褐色土	亀山焼	中世	

表18　SD4　出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
1	坏	口径(8.0) 底径(3.8) 器高 2.3	土師器の坏。体部は内湾ぎみに立ち上がる。口縁端部は丸い。平底。	ヨコナデ (底)回転糸切り	ヨコナデ	にぶい橙色 浅黄橙色	石・長(1) ◎	上層	
2	脚	厚さ 1.0	土釜または土鍋の脚部片。	ナデ		橙　色 ―	石・長(0.5～1) ◎	上層	
3	高坏	残高 4.4	須恵器有蓋高坏。脚部に方形の透かしを有する。	(坏底)回転ナデ →回転ヘラ削り (脚上)回転ナデ	(坏底)回転ナデ (脚上)ナデ	灰色・褐灰色 灰　色	石・英(0.5～1) ◎	下層	
4	上釜	残高 4.9	口縁端部に断面三角形の鍔が巡る。鍔の下部以下に煤が付着している。土師質。	(口端)ヨコナデ (口～胴)ナデ	ヨコハケ	橙　色 橙　色	石・長(1～3) ◎	煤付着 下層	10
5	土鍋	残高 2.0	口縁端部からやや下がった部位に断面「コ」字形に鍔を巡らす。口縁部下の鍔下部に煤が付着する。瓦質。	ナデ	ナデ	黒　色 褐灰色	石・長(1～3) ◎	煤付着 下層	

SD4　出土遺物観察表　土製品　(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
6	脚	残高 5.2	土釜または土鍋の胴部と脚部の接合部片。土師質。	ナデ	ナデ	黒色・にぶい黄褐 にぶい黄褐色	石・長(0.5～2) ◎	煤付着 下層	10
7	脚	厚さ 2.0	土釜または土鍋の脚部。胴部が剥離している。底部から脚内側にかけ煤付着。土師質。	ナデ	ナデ	浅黄橙色 浅黄橙色	石・長(1～4) ◎	煤付着 下層	10
8	脚	厚さ 1.8	土釜または土鍋の脚部。土師質。	ナデ	ナデ	にぶい橙色 にぶい褐色	石・長(0.5～1.5) ◎	下層	
9	坏	底径 5.2 残高 1.5	底部は円盤底形の平高台。内底面に同心円状の凹みが数条巡る。	マメツ	マメツ	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長(3.5) ○	下層	
10	坏	底径 5.7 残高 1.4	底部は平底。断面形が高台に見えるのは糸切り痕の失敗の為。	ヨコナデ (ア)糸切り 放状圧痕	ヨコナデ	橙色 橙色	密 ◎	下層	10
11	皿	口径(9.8) 器高 10.1 底径(6.0)	底部は平底。体部は内湾ぎみに立ちあがる。口縁端部は丸い。	ナデ (ア)回転糸切り	ナデ	灰白色 灰白色	長・石(1～2) ◎	下層	10
12	皿	底径(6.0) 残高 1.3	底部は平底。内底面には同心円状の凹みが数条巡る。	ナデ (ア)回転糸切り	ナデ	浅黄橙色 浅黄橙色	長・石(2) ◎	下層	
13	皿	底径 5.4 残高 1.7	底部は平底。体部は直線的に立ち上がる。	ナデ (ア)回転糸切り 板状圧痕	ナデ	浅黄橙色 橙色	長・石(1～2) ◎	下層	
14	甕	口径(35.5) 残高 8.2	頸部から口縁部にかけてゆるやかに内傾する。口縁端部は外反し、上下にやや拡張する。亀山焼。	(ア)ヨコナデ (イ)タテハケ→ナデ (ウ)格子目タタキ	マメツ	灰褐色 橙色	長・石(0.5～2) ◎	下層	10
15	甕	残高 2.3	亀山焼の大甕の口縁部。口縁部はゆるやかに立ち上がる。	マメツ	マメツ	青黒色 青黒色	長・石 ◎	下層	
16	甕	残高 2.0	亀山焼の甕の胴部小片。	格子目タタキ	ハケ	褐色 褐色	密 ◎	下層	
17	こね鉢	口径(25.6) 残高 5.0	口縁端部は肥厚し、上部が内向きに立ち上がる。体部の器壁は薄い。東播系須恵器。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰色 灰色	長(0.5～1) 灰色の石(6)も含む ◎	下層	10
18	不明	残高 2.6	青磁の小片。器種は不明。	施釉	施釉	オリーブ色 オリーブ色	密 ◎	下層	10
19	甕	口径(41.8) 残高 4.3	備前焼の大甕の口縁部分。内傾している。口縁は引き伸ばし折り曲げて玉縁口縁状に仕上げている。	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい褐色 灰赤色	長・石(1～3) 長(7) ◎	下層	10
20	擂鉢	底径(13.8) 残高 4.7	備前焼の擂鉢の胴部片。内面に一単位7～8条の櫛描きの平行条線を放射状に施す。	ナデ	ナデ	橙色 橙色	石・長・赤色粒 (1.5～4) ○	下層	10

表19　SD4　出土遺物観察表　石製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
21	不明品	完形	緑色片岩	8.0	4.7	1.5	105.3	自然石	

表20　SK1　出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
22	甕	口径(44.0) 残高5.0	頸部から口縁部にかけての外反は弱く、垂直に近い。口縁端部はやや拡張し、上端はつまみあげ気味。亀山焼。	ハケ	ヨコハケ	黒褐色 淡黄褐色	石・長(1～2) △		

表21　SD1　出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
23	擂鉢	残高1.4	内面に櫛描きの平行条線（単位不明）を放射状に施す。備前焼。	ヨコナデ	ナデ	にぶい赤褐色 にぶい赤褐色	石・長(1) ◎	上層	

表22　SD2　出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
24	擂鉢	残高2.3	内面に櫛描きはみあたらない。備前焼。	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい赤褐色 灰赤色	石(4) ◎		
25	皿	残高0.5	底部平底。土師器。	Ⓡ回転糸切り	Ⓡナデ	灰白色 灰白色	密 ◎		

表23　SD3　出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
26	脚	厚さ2.8	土師質。土釜または土鍋の脚。	ナデ		にぶい橙色	石・長(1～2) ◎		

表24　SD7　出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
27	土釜	残高1.45	三足付き羽釜の口縁部。口縁端部に断面三角形の鍔が巡る。土師質。	ナデ	ナデ	にぶい橙色	石・長(0.5～1.5) ◎		
28	坏	残高 1.5	底部は平底。体部は直線的に立ちあがる。	マメツ	マメツ	橙色 橙色	長(0.5以下) ◎		

表25　SD7　出土遺物観察表　ガラス製品

番号	器種	残存	材質	色	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
29	小玉	ほぼ完形	ガラス	青（透明）	0.3	0.3	0.2	0.019		10

表26　SD9　出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
30	不明	残高3.2	内面・外面の一部に黒褐色の施釉。	ナデ	ナデ	にぶい黄褐色 ―	長(1) ◎		

表27　包含層　出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
31	上釜	残高 1.8	口縁端部の直下に断面「コ」字形の鍔が巡る。口縁端部も厚も器壁が厚い。	ナデ	ナデ	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長(1~3) ◎		Ⅳ-②
32	甕	厚さ 2.8	亀山焼の甕の胴部片。	格子目タタキ	ハケ	灰褐色 明褐灰色	長・石(1.5) ◎		Ⅳ-②
33	擂鉢	残高 2.9	鉢前焼の擂鉢。 内面に櫛描きの平行条線（単位不明）を放射状に施す。	ヨコナデ	ナデ	黄灰色 灰色	長・石(1) ◎		Ⅳ-②
34	椀	口径(12.5) 残高5.05	外面に暗紺色の染付を施す。 文様は草花文。	染付		灰オリーブ色 灰オリーブ色	密 ◎		Ⅳ-②
35	椀	口径(9.2) 残高 2.6	外面に暗緑色の染付を施す。 文様は草花文。	染付		灰白色 灰白色	密 ◎		Ⅳ-②
36	不明	残高 1.9	白磁。外面に暗赤色の染付を施す。	染付		灰オリーブ色 灰オリーブ色	密 ◎		Ⅳ-②

表28　地点不明遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
37	坏身	残高 2.3	たちあがりは内傾する。受部は水平。	ナデ	ナデ	灰色 灰色	長・石(1) ◎		
38	土釜	残高 1.9	胴部は内湾する。鍔は口縁端部直下に垂下して巡っている。土師質。	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい橙色 にぶい橙色	長・石(0.5~1.5) ◎		

第4章

久米才歩行遺跡

2次調査地

第4章　久米才歩行遺跡2次調査地

1．調査の経過

(1) 調査に至る経緯（第31図）

1995（平成7）年、武智勝義氏より松山市南久米町476－1・2、475－3番地における埋蔵文化財の確認調査願いが松山市教育委員会文化教育課（以下、文化教育課）に提出された。当該地は、松山市が指定する埋蔵文化財包蔵地の『NO.126 高畑遺物包含地』内にあたり、周知の遺跡として知られている。同包蔵地内では、これまでに多数の調査が行われ、弥生時代～中世の遺構・遺物を検出し、同時代の集落関連遺跡が確認されている。

文化教育課では、確認願いが申請された地点について遺跡の有無、さらには、その範囲と性格を確認するために、平成7年に試掘調査を実施した。この結果、申請地内に遺物及び遺構が検出され、弥生時代～中世の集落遺跡があることを確認した。これを受け、文化教育課、財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センターと申請者は発掘調査についての協議を行った。発掘調査は弥生時代の集落構造解明を主目的とし、1996（平成8）年11月～1997（平成9）年1月の間に野外調査を実施した。

(2) 調査の経緯

調査地は、来住台地の北端を流れる堀越川の北側に位置し、標高は34mを測る。調査は、試掘調査の結果をもとに地表下30～40cmまで重機により表土の剥ぎ取りを行った。調査地は、調査以前は既存宅地であったため近現代坑（撹乱）が多く、遺構検出には困難を極めた。調査はまず近現代坑を掘り、つづいて時期の新しい遺構より順次調査を進めた。

(3) 調査組織

調 査 地　松山市南久米町476－1・2、475－3番地
遺 跡 名　久米才歩行遺跡2次調査地
調査期間　1996（平成8）年11月12日～1997（平成9）年1月31日
調査面積　361.91㎡
調査協力：武智勝義
調査担当：西尾幸則（文化教育係長）
　　高尾和長（(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター調査員）
　　梅木謙一（同上）

2．層　位（第32～35図）

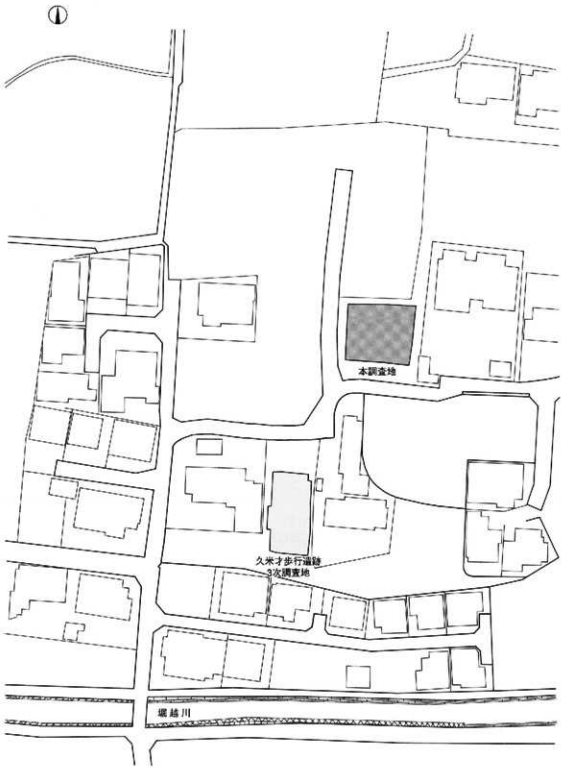
基本層位は第Ⅰ層造成土、第Ⅱ層耕作土、第Ⅲ層床土、第Ⅳ層灰褐色土、第Ⅴ層黒褐色土、第Ⅵ層黒褐色土（黄色土混入）、第Ⅶ層黄色土（地山）である。遺構は第Ⅶ層上面で検出した。

第Ⅰ層：調査区全域でみられ、層厚10～20cmを測る。
第Ⅱ層：調査区全域でみられ、層厚5～10cmを測る。
第Ⅲ層：調査区東側と西側の一部にみられ、層厚5～10cmを測る。
第Ⅳ層：調査区北西部にみられ、層厚5～8cmを測る。

第Ⅴ層：調査区東側にみられ、層厚10～20cmを測る。粘性の強い土壌である。本層中からは弥生土器・土師器・須恵器と石器・ガラス玉が出土した。

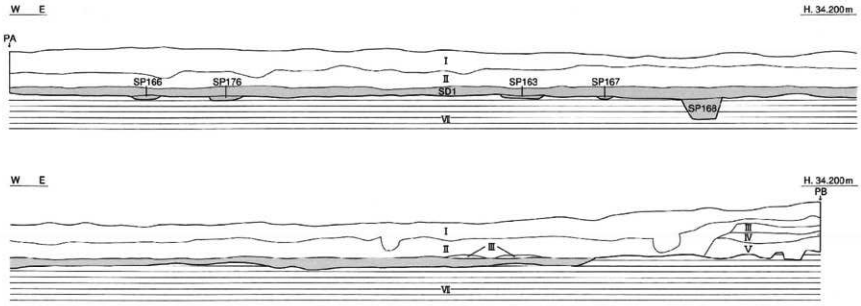
第Ⅵ層：調査区南東隅にみられ、層厚10cmを測る。

第Ⅶ層：黄色土で地山である。遺構は上面で検出した。

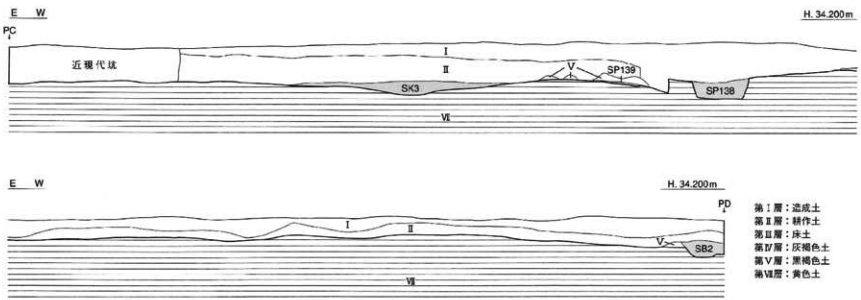


（S＝1：1000）

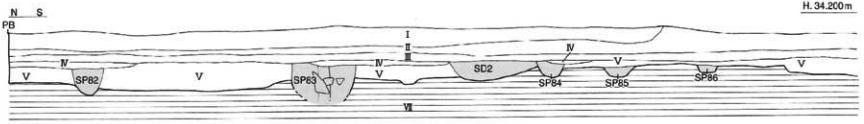
第31図　調査地位置図

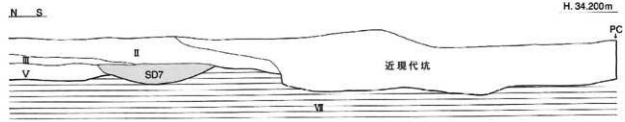


第32図　北壁土層図

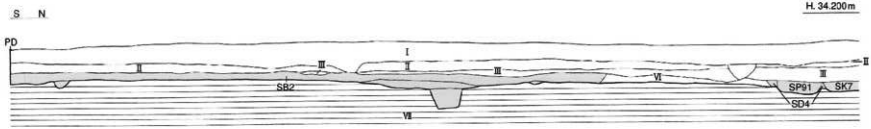


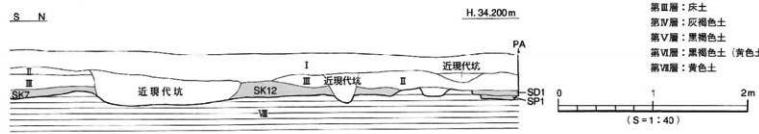
第33図　南壁土層図



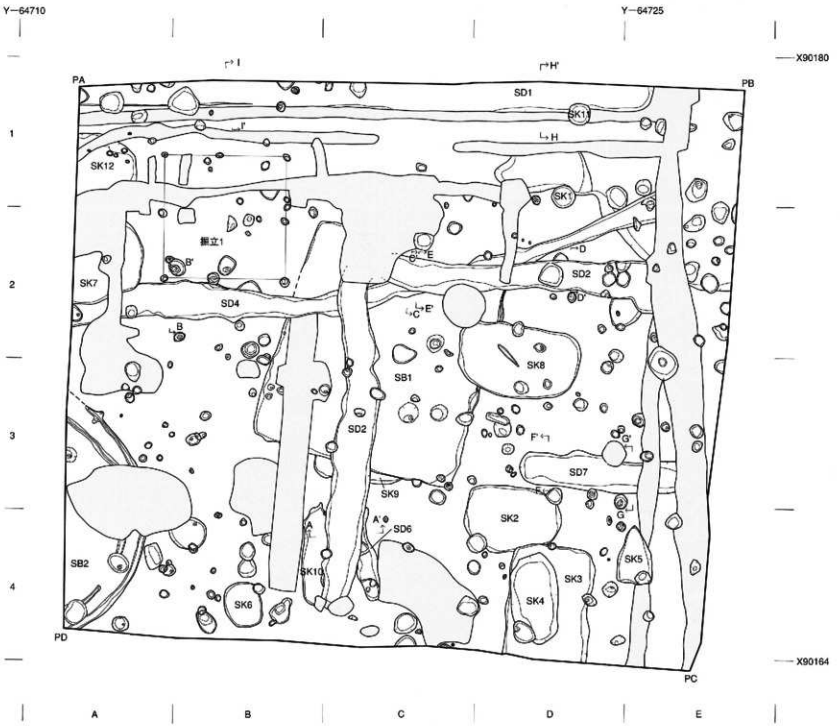


第34図　東壁土層図





第35図　西壁土層図


Y−64710
Y−64725
X90180
X90164
PA
PB
PC
PD
SD1
SK11
SK12
SK1
掘立1
SK7
SD4
SD2
SK8
SB1
SD7
SK9
SD6
SK2
SK5
SK3
SK4
SB2
SK10
SK6
A
B
C
D
E
1
2
3
4
□：近現代坑
0
5m
(S=1：100)

第36図　遺構配置図

3．遺構と遺物

〔1〕弥生時代（第36図）

弥生時代の遺構は、竪穴式住居址1棟、土坑3基を検出した。

(1) 竪穴式住居址（ＳＢ）

ＳＢ2（第37図、図版13）

調査区南西隅A3･4区に位置する。住居址東側は近現代坑に切られ、南側はＳＰ54･55に切られている。住居址西側は調査区外に続く。平面形態は遺存状況から円形を呈するものと考えられ、規模は南北検出長5.84m、東西検出長2.12m、壁高は8cmを測る。埋土は黒褐色土の単層である。

床面にて柱穴1基（ＳＰ①）と周壁溝2条を検出した。ＳＰ①は円形を呈し、径30～40cm、深さ20cmを測る。柱穴埋土は住居址埋土と同様の黒褐色土である。周壁溝①は幅8～25cm、深さ9cmを測り、住居址北側の一部を除き、ほぼ全周する。周壁溝②は住居址南東部に一部途切れた箇所があり、規模は幅8～18cm、深さ3.3cmを測る。周壁溝①に比べ、規模がひと回り小さくなっている。周壁溝①と②の間隔は50cmを測る。周壁溝埋土は両者共に、住居址埋土と同様の黒褐色土である。主柱穴は確定しえなかったものの、2条の周壁溝から判断すると、ＳＢ2は2棟の住居址の重複、もしくは改築が施された可能性がある。

遺物は埋土中より、弥生土器片が数点出土した。

出土遺物（第37図）

甕形土器（1･2）　1･2は折り曲げ口縁の甕形土器。1は胴部に2条1組の工具による沈線文11条と刺突文1列、口縁端面に刻目を施す。2は無文である。

鉢形土器（3）　3は縄文時代晩期の深鉢片。口縁部内面に段をもつ。

時期：出土した遺物が僅少で、明確な時期特定はしかねるが、遺物の特徴よりＳＢ2は、弥生時代前期末～中期初頭の住居址とする。

(2) 土坑（ＳＫ）

ＳＫ2（第38図、図版16）

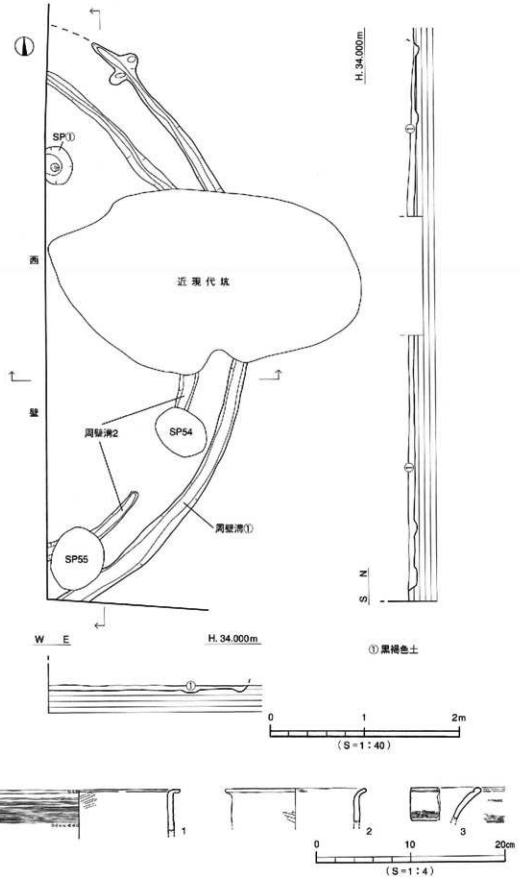
調査区南東部、D3･4区に位置する。遺構南東部はＳＫ3（中世以前）に切られ、遺構北東部と南西部はそれぞれＳＰ142・ＳＰ143に切られている。平面形態は隅丸長方形を呈し、規模は長さ2.54m、幅1.80m、深さ24cmを測る。断面形態は皿状で、埋土は黒褐色土の単一層である。遺物は埋土中より、弥生土器片と石庖丁、磨石が出土した。

出土遺物（第39図、図版18）

甕形土器（4～7）　4は折り曲げ口縁で、口縁端面に刻目を施す。5は胴部片。3条の沈線文と幅広のハケ状工具による1条の刺突文が残る。6･7は底部片。6はわずかに上げ底、7は平底となる。

壺形土器（8～14）　8～10は口縁部片。8は外反する口縁部で、粘土接合痕が顕著である。9の口縁端部はナデによりわずかに下方に拡張される。10は口縁端面に刺突文、内面に刻目をもつ凸帯を貼り付ける。11は口縁部～肩部にかけての小片。肩部に2条の沈線文と山形文（2条1組）を施す。12は頸部片。ヘラ状工具による3条の沈線文を施す。13は胴部片で、斜格子目文と山形充塡文を施す。14は平底の底部片。

ミニチュア土器（15）　くびれの上げ底。口縁端部は「コ」字状である。指頭痕が顕著である。



第37図　SB2 測量図・出土遺物実測図

石　器（16～18）　16は緑色片岩製の石庖丁。約2/3の残存である。穿孔は2箇所に両面から施され貫通している。刃部の研ぎ出しは両面から行われている。17は結晶片岩製の石庖丁の未製品。側面に加工痕を残す。18は磨石。両面に使用痕を残す。結晶片岩製

時期：出土した遺物は弥生時代前期末～中期初頭の特徴を示している。よってＳＫ2は、弥生時代前期末～中期初頭の遺構とする。

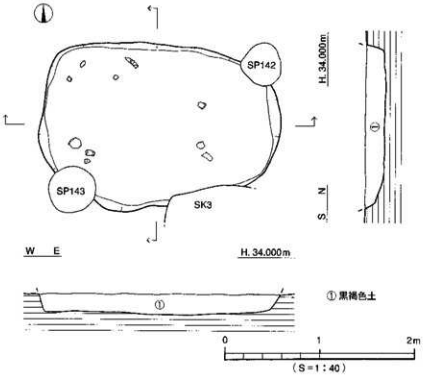
ＳＫ6（第40図）

調査区南西部、Ｂ4区に位置し、ＳＰ64に切られる。平面形態は隅丸長方形で、規模は長さ1.22m、幅0.98m、深さ6cmを測る。断面形態は皿状で、埋土は黒褐色土の単一層である。基底面は土坑中央部がややくぼむ。遺物は基底面及び埋土中より、弥生土器片が少量出土した。

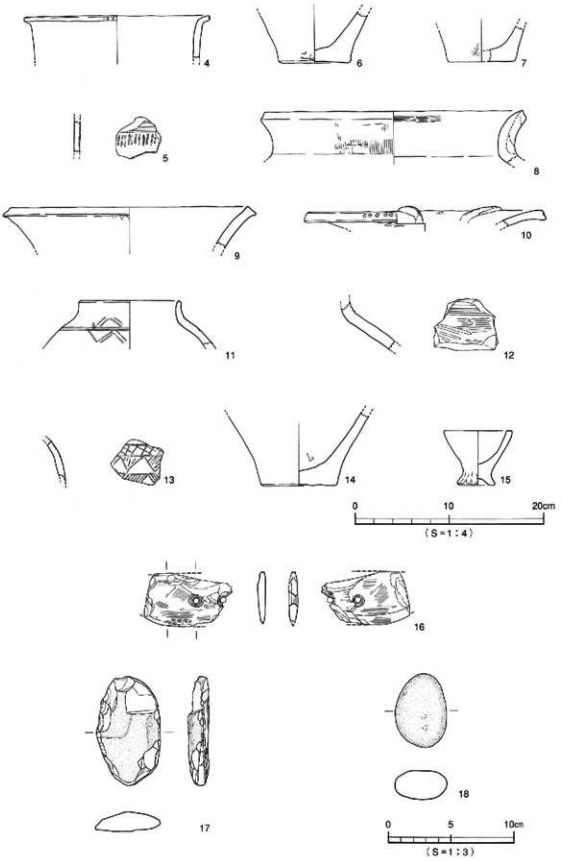
出土遺物（第40図、図版18）

壺形土器（19･20）　19は平底の底部より内湾しながら立ち上がり、胴上位で最大径を測る。口縁部は短く直立し、口縁端部は丸い。20は頸部片。断面三角形の凸帯を4条貼り付ける。

時期：出土した遺物は弥生時代中期中葉の特徴を示している。よってＳＫ6は弥生時代中期中葉の遺構とする。



第38図　SK2 測量図

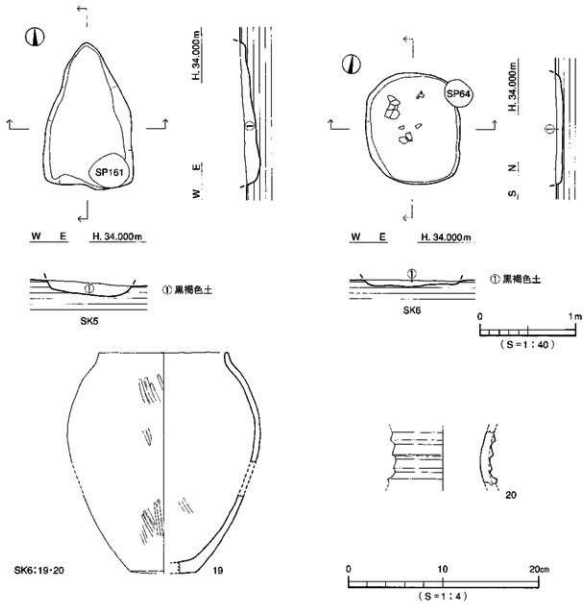


第39図　SK2 出土遺物実測図

ＳＫ5（第40図）

調査区南東部、Ｄ～Ｅ5区に位置し、ＳＰ161に切られる。平面形態は不整長方形を呈し、規模は長軸1.58m、短軸0.90m、深さ18cmを測る。断面形態は舟底状で、埋土は黒褐色土の単一層である。基底面は北から南に向けて傾斜をなし、比高差10cmを測る。遺物は埋土中より弥生土器片が少量出土したが、図化しうるものはない。

時期：出土した遺物が僅少で、明確な時期判断はしかねる。上坑埋土がＳＫ6に酷似することから、ＳＫ5は弥生時代中期中葉の遺構と考えておく。



第40図　SK5・6 測量図・SK6 出土遺物実測図

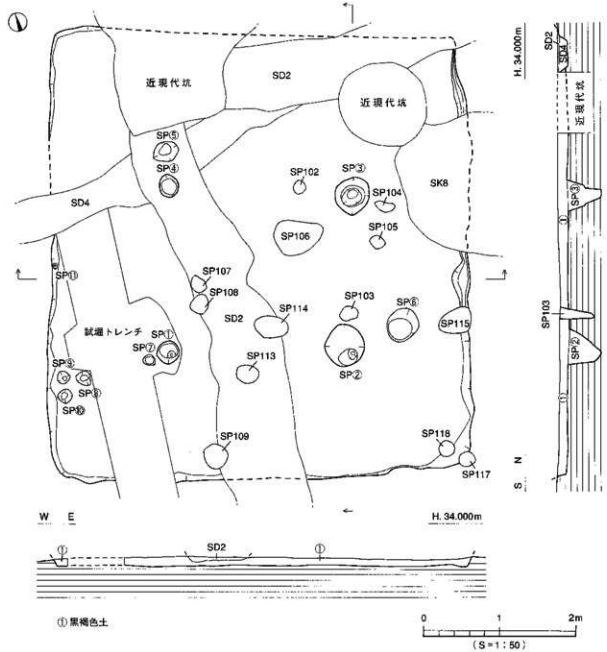
[2] 古墳時代

古墳時代の遺構は、竪穴式住居址1棟、溝1条、土坑4基である。

(1) 竪穴式住居址（ＳＢ）

ＳＢ1（第41図）

調査区中央部、B2～C3区に位置する。住居址南壁はＳＫ9（古墳後期前半）を切り、東壁はＳＫ8（古墳後期後半）に切られる。また、ＳＤ2（8世紀）及び、試掘トレンチと近現代坑に切られている。平面形態は方形を呈し、規模は長軸6.04m、短軸5.42m、壁高14cmを測る。埋土は黒褐色土の単一層である。住居址床面にてピット11基と周壁溝を検出した。主柱穴はＳＰ①・②・③・④の4本で、平面形態は円形を呈し、規模は径29～56cm、深さ22～55cmを測る。埋土は黒褐色土の単一層である。周



第41図　SB1 測量図

壁溝は住居址東壁で検出した。規模は幅6～24cm、深さ9cmである。このほか、住居址床面にて大小7基（SP⑤～⑪）のピットを検出したが、本住居址に伴うかは不明である。

遺物は埋土中より、弥生土器、須恵器、石製品のほか、臼玉が1点出土した。

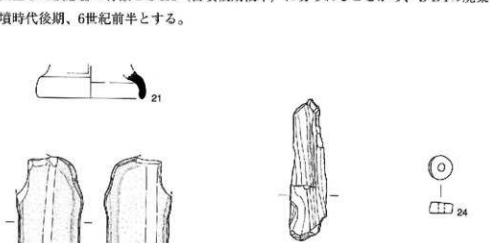
出土遺物（第42図、図版18）

高　坏（21）　21は須恵器の有蓋高坏の脚部片。内湾して接地し、脚端部は尖り気味に丸い。

石　器（22・23）　22は砂岩製の砥石。両面に浅い溝状の使用痕が認められる。23は緑色片岩の剥片。長さ11.2cm、幅2.8cmを測る。

装身具（24）　碧玉製の臼玉である。色調は緑灰色を呈し、重さは0.2gである。

時期：出土した須恵器の特徴とSK8（古墳後期後半）に切られることから、SB1の廃棄・埋没時期は、古墳時代後期、6世紀前半とする。



第42図　SB1 出土遺物実測図

(2) 溝（SD）

SD6（第43図）

調査区南側、C4区に位置し、SD2（8世紀）に切られる。規模は検出長2.5m、幅0.6m、深さ7cmを測る。断面形態は皿状で、溝底は北から南に傾斜している（比高差5cm）。埋土は黒褐色土の単一層である。遺物は埋土中より、弥生土器片と須恵器片が数点出土した。

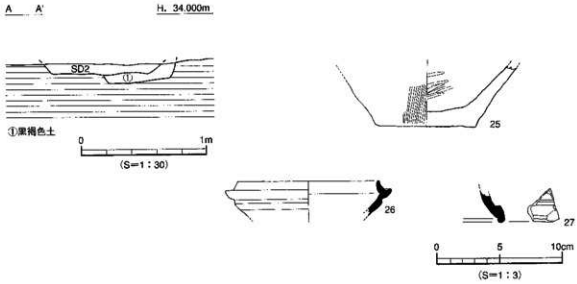
出土遺物（第43図）

壺形土器（25）　25は弥生土器の壺形土器の底部片で、平底となる。

坏　身（26）　26は須恵器坏身である。たちあがりは低く内傾し、端部は尖り気味に丸い。受部は短く水平に延びる。

高　坏（27）　27は須恵器高坏の脚部片。脚端部は丸く、内面にナデによる凹線が巡る。

時期：出土した遺物の特徴とSD2に切られることから、SD6は古墳時代後期、6世紀後半の遺構とする。



第43図　SD6 測量図・出土遺物実測図

(3) 土坑（SK）

SK9（第44図）

調査区中央部やや南寄り、C3区に位置し、SB（古墳後期前半）とSD2（8世紀）及びSP28に切られる。平面形態は長方形を呈するものと考えられ、規模は推定検出長2.37m、推定検出幅1.36m、深さ36cmを測る。断面形態は逆台形状で、埋土は黒褐色土の単一層である。基底面はほぼ平坦である。遺物は埋土中より、弥生土器片と須恵器片が少量出土した。

出土遺物（第44図）

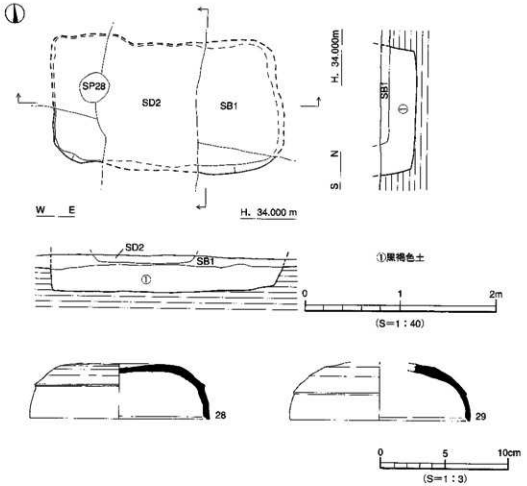
坏　蓋（28・29）　28・29は須恵器坏蓋である。28の天井部は凹み、口縁部はわずかに内湾し接地する。口縁端部は内傾する。29は丸味のある天井部から内湾しながら口縁部に続く。口縁端部は内傾する。

時期：出土した須恵器は6世紀前半の特徴を示している。よって、SK9は6世紀前半の遺構とする。

SK8（第45図）

調査区中央部、C2～D3区に位置する。SB1を切り、SP94と近現代坑に切られる。平面形態は隅丸長方形を呈し、規模は長さ3.22m、幅1.94m、深さ4cmを測る。断面形態は皿状で、埋土は黒褐色土の単一層である。基底面は北側から南側に向けて緩傾斜をなす（比高差3cm）。基底面にてピット3基（SP①～③）と溝1条（SD①）を検出した。SP①は円形を呈し、径40cm、深さ20cmを測る。埋土は住居址埋土と同じ黒褐色土である。SP②とSP③は楕円形を呈し、径20～40cm、深さ10cmを測る。埋土はSP①と同様の黒褐色土である。SD①は幅6～12cm、長さ90cm、深さ6cmを測る。埋土は住居址埋土と同様の黒褐色土である。これら3基のピットと溝は、いずれも埋土が黒褐色土であり、SK8に伴うものと考えられるが、性格は不明である。

遺物は埋土中にて、弥生土器片と須恵器片のほか、砥石が1点出土した。



第44図　SK9 測量図・出土遺物実測図

出土遺物（第45図）

坏　蓋（30）　30は須恵器坏蓋。緩やかに丸い天井部と、直線的にわずかに開く口縁部をもつ。口縁端部は内傾する凹面をもつ。

石　器（31）　31は結晶片岩製の砥石。片面の中央部だけに使用痕が有る。

時期：出土した須恵器の坏蓋は、6世紀中葉の特徴を示している。よってＳＫ8は6世紀中葉の遺構とする。

ＳＫ12（第46図）

調査区北西隅、A1～3区に位置する。ＳＫ7（7世紀以降）、近現代坑と5基のピットに切られ、西側は調査区外に続く。平面形態は隅丸方形を呈するものと考えられ、規模は東西検出長1.66m、南北検出長1.54m、深さ5cmを測る。断面形態は皿状で、埋土は黒褐色土の単一層である。基底面は東から西へわずかに傾斜する（比高差4cm）。遺物は埋土中より、弥生土器片と須恵器片が数点出土した。

出土遺物（第46図）

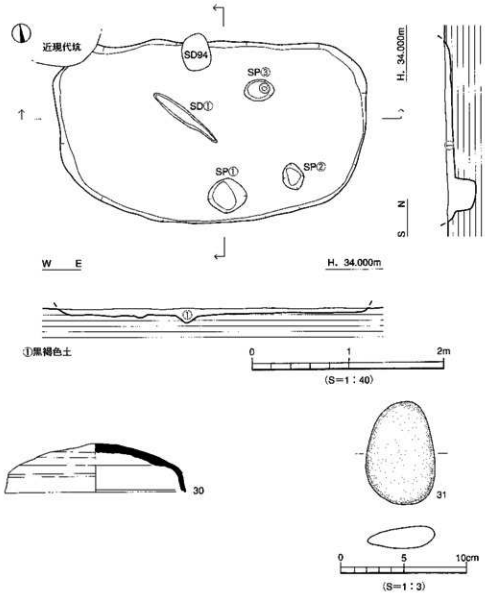
高　坏（32）　32は有蓋高坏のつまみ部。中央部が突出する。

時期：出土した遺物が僅少で明確な時期判断はしかねるが、須恵器の特徴より、ＳＫ12は古墳時代後期の遺構とする。

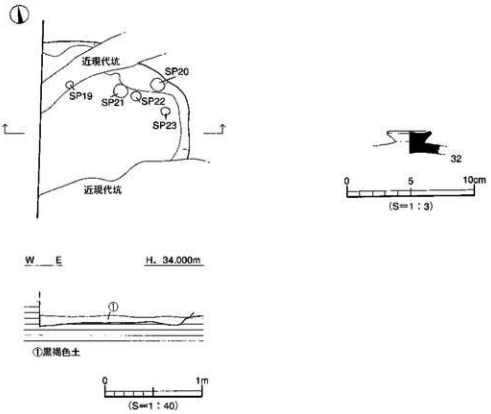
ＳＫ10（第47図）

調査区中央部南寄り、B2～C4区に位置し、ＳＤ2（8世紀）とＳＰ68に切られる。平面形態は長楕円形を呈し、規模は長径2.60m、短径0.74m、深さ4cmを測る。断面形態は皿状で、埋土は黒褐色土の単一層である。遺物は埋土中より、弥生土器片と須恵器片が少量出土したが、図化しうるものはない。

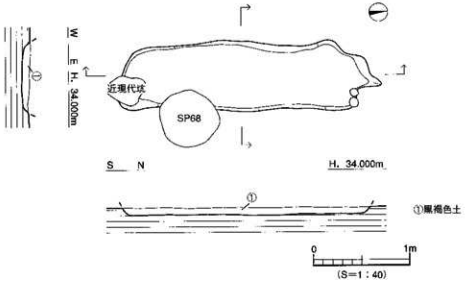
時期：出土した遺物から、ＳＫ10は概ね古墳時代の遺構とする。



第45図　SK8 測量図・出土遺物実測図



第46図　SK12 測量図・出土遺物実測図



第47図　SK10 測量図

〔3〕古　代

古代の遺構は溝2条と土坑1基である。

(1) 溝（ＳＤ）

ＳＤ4（第48図、図版18）

調査区中央部、A2～E2区に位置する。ＳＢ1（古墳後期）を切り、ＳＫ7（7世紀以降）、ＳＤ2（8世紀）と近現代坑に切られる。規模は検出長14.0m、幅1.0m、深さ15cmを測る。断面形態は皿状で、埋土は黒褐色土の単一層である。溝底は東から西に傾斜している（比高差10cm）。遺物は埋土中より土師器片、須恵器片のほか、管玉が1点出土した。

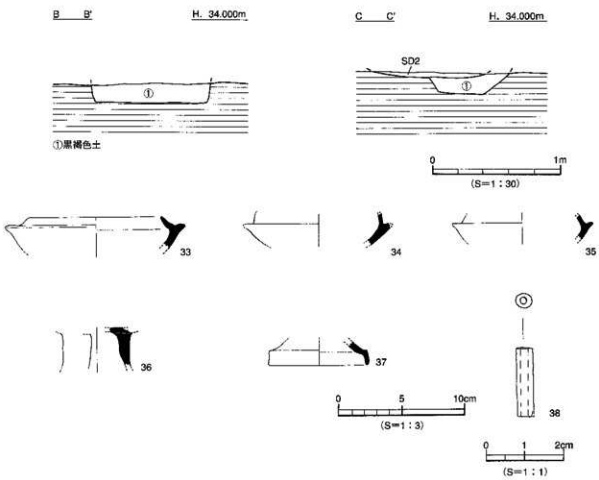
出土遺物

坏　身（33～35）　33～35は須恵器坏身である。33は受部は水平に延び、たちあがり端部は尖り気味に丸い。34は短い受部と直立気味なたちあがりをもつ。35は受部は短く水平に延び、端部は尖る。

高　坏（36･37）　36はスカシをもつ脚部片である。37は柱部は「ハ」の字状に開き、脚裾部は垂下し、端部は丸い。

装身具（38）　碧玉製の管玉である。長さ1.8cm、重さ0.5gを測る。

時期：出土した遺物には多少の時期幅が認められる。しかしながら、ＳＢ1を切り、ＳＤ2に切られることから、ＳＤ4は7世紀前半の遺構とする。



第48図　SD4 測量図・出土遺物実測図

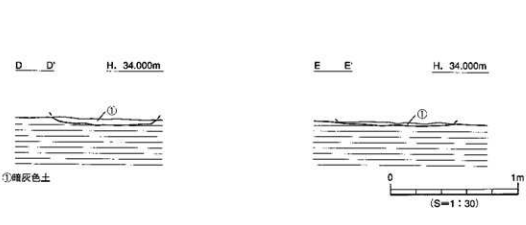
ＳＤ2（第49図）

調査区中央部から北東部、C2～E3区に位置し、途中「L」字状に折れ曲がる。ＳＢ1、ＳＫ9、ＳＫ10及び、ＳＤ4･6を切り、近現代坑に切られる。規模は検出長14.6m、幅1.0m、深さ4cmを測る。断面形態は皿状で、溝底は東から南に傾斜している（比高差5cm）。埋土は暗灰色土の単一層である。遺物は埋土中より、弥生土器片と須恵器片が少量出土した。

出土遺物

39は須恵器宝珠様つまみ、40は坏身片。たちあがりは低く内傾し、端部は尖る。41は高台の付く坏。高台は底体部境界付近よりやや内側に付く。

時期：出土した遺物の特徴より、ＳＤ2は古代、8世紀代の溝とする。



第49図　SD2 測量図・出土遺物実測図

(2) 土坑（ＳＫ）

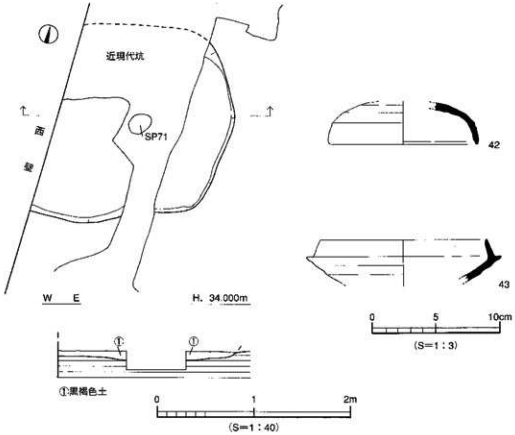
ＳＫ7（第50図）

調査区北西部、A2区に位置する。ＳＤ4を切り、近現代坑とＳＰ71に切られ、西側は調査区外に続く。平面形態は、遺存状況から隅丸方形と考えられる。規模は東西検出長1.96m、南北検出長1.76m、深さ3cmを測る。断面形態は皿状で、埋土は黒褐色土の単一層である。遺物は埋土中より、弥生土器片と須恵器片が少量出土した。

出土遺物

42は須恵器坏蓋。天井部は丸味をもつ。天井部と口縁部とを分ける稜は不明瞭である。口縁端部は丸い。43は坏身。受部は短く水平に延び、たちあがりは内傾する。端部は尖り気味である。

時期：出土した遺物の特徴とＳＤ4を切ることから、ＳＫ7は7世紀前半以降の遺構とする。



第50図　SK7 測量図・出土遺物実測図

〔4〕中　世

中世の遺構は掘立柱建物址1棟、溝1条、土坑3基である。

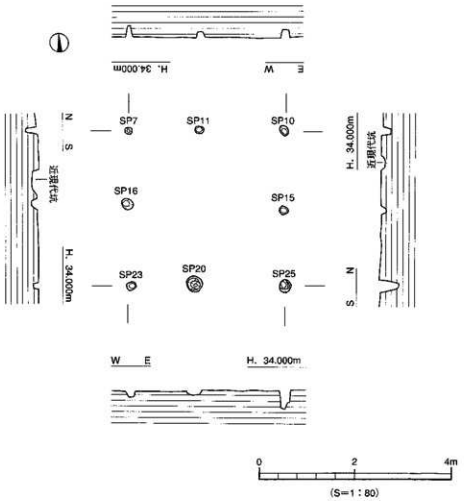
(1) 掘立柱建物址（掘立）

掘立1（第51図）

調査区北西部、A1～B2区に位置する。2×2間の建物址で、規模は桁行長3.30m、梁行長3.20mを測る。建物主軸はほぼ真北にとる。柱穴の平面形態は円形を呈し、規模は径16～33cm、深さ11～43cmを測る。埋土は暗灰色土と明灰色土の混合土である。

遺物は柱穴内より土師器片が少量出土したが、図化しうるものはない。

時期：出土した遺物は僅少で、明確な時期判断はしかねる。これまでの来住地区の調査では、灰色土を埋土にもつ掘立柱建物址は、中世に時期比定されるものが多い。よって、本調査検出の建物址の時期も中世と考えておく。



第51図　掘立1 測量図

(2) 溝（ＳＤ）

ＳＤ7（第52図）

調査区東部、D～E3区に位置し、近現代坑に切られる。規模は検出長4.2m、幅0.9m、深さ8cmを測る。断面形態はレンズ状で、溝底は東から西に傾斜している（比高差5cm）。埋土は暗灰色土の単一層である。遺物は埋土中より弥生土器片と石が出土したが、図化しうるものはない。

時期：出土した遺物が僅少で、明確な時期判断はしかねる。埋土が掘立1と類似することから、ＳＤ7は中世の溝と考えておく。

(3) 土坑（ＳＫ）

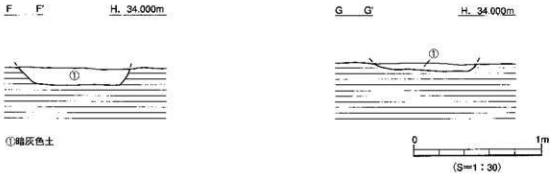
ＳＫ4（第53図）

調査区南東部、D4に位置する。ＳＫ3を切り、ＳＰ77に切られる。平面形態は楕円形を呈し、規模は長径2.84m、短径1.38m、深さ27cmを測る。断面形態は逆台形状を呈する。埋土は暗灰色土を基調とし、基底面付近に一部、黒褐色土が混入する。遺物は埋土中より弥生土器片と須恵器片、土師器片が少量出土した。

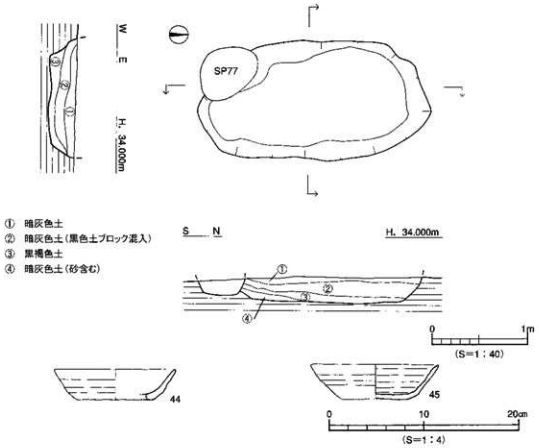
出土遺物（第53図）

44・45は土師器坏である。44は口縁部は外傾し、口縁端部は尖り気味に丸い。45は平底の底部から外傾し、口縁端部は尖り気味に丸い。底部の切り離しは回転糸切り技法による。

時期：出土した遺物の特徴より、ＳＫ4は14世紀代の遺構とする。



第52図　SK7 測量図

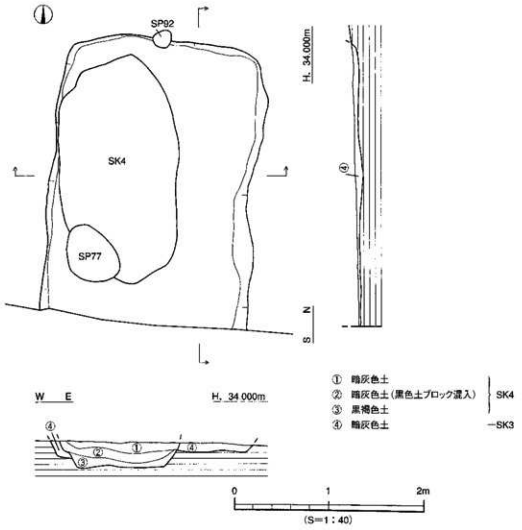


第53図　SK4 測量図・出土遺物実測図

ＳＫ3（第54図）

調査区南東部、D4区に位置する。ＳＫ4（14世紀）とＳＰ77･92とに切られ、ＳＫ2（弥生前期）を切り、遺構南側は調査区外に続く。平面形態は隅丸長方形を呈するものとみられ、規模は南北検出長3.4m、東西長2.1m、深さ8cmを測る。断面形態は皿状で、埋土は暗灰色土の単一層である。遺物は埋土中より弥生土器片と須恵器片、土師器片が少量出土したが、図化しうるものはない。

時期：埋土がＳＫ4と類似することと切り合いから、ＳＫ3は14世紀以前の遺構とする。



第54図　SK3 測量図

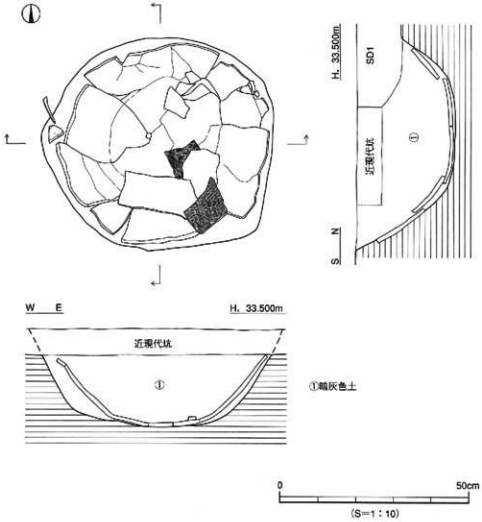
ＳＫ11（第55図、図版15）

調査区北東部、Ｄ1区に位置し、ＳＤ1（近世）に切られる。平面形態は円形を呈し、規模は径60cm、深さ18cmを測る。断面形態は逆台形状を呈し、埋土は暗灰色土の単一層である。遺物は亀山焼の甕の胴下半部が掘えられた状態で出土した。掘り方は土器の3cm外側に掘られている。

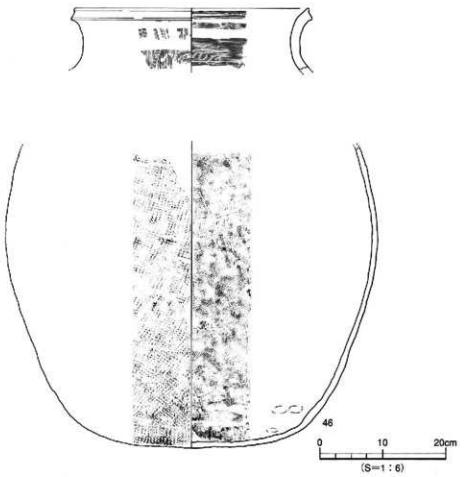
出土遺物（第56図）

46は亀山焼の甕である。口縁部は外反し、口縁端部は上下方に拡張する。底部は緩やかな丸味をもつ。口縁部外面は縦方向の刷毛目、内面は横方向の刷毛目調整を施す。胴部外面は格子目タタキ、内面には刷毛目調整を施す。

時期：出土した遺物は15世紀後半の特徴を示している。よって、ＳＫ11は15世紀後半の遺構とする。



第55図　SK11 測量図



第56図　SK11 出土遺物実測図

〔5〕近　世

近世の遺構は溝1条と土坑1基である。

(1) 溝（ＳＤ）

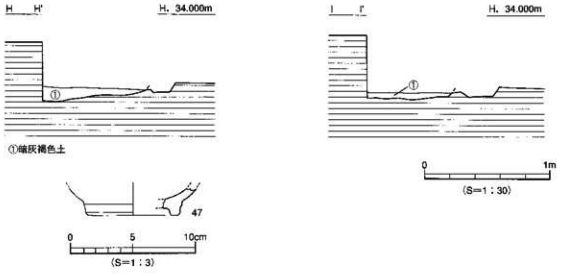
ＳＤ1（第57図）

調査区北部、Ａ～Ｅ1区に位置し、ＳＫ11（中世）を切る。規模は検出長15.0m、幅0.8m、深さ5cmを測る。断面形態は皿状で、溝底は東から西に傾斜している（比高差6cm）。埋土は暗灰褐色土の単一層である。遺物は埋土中より弥生土器片と陶磁器片が少量出土した。

出土遺物

47は肥前焼の碗である。「コ」字状の高台部の端部は水平に接地する。

時期：出土した遺物の特徴より、ＳＤ1は近世、江戸時代の溝とする。



第57図　SD1 測量図・出土遺物実測図

(2) 土坑

ＳＫ1（第58図、図版14）

調査区北東部、D1区に位置する。平面形態は円形を呈し、規模は径75cm、深さ47cmを測る。断面形態は逆台形状で、掘り方は土器の5cm外側に掘られている。埋土は灰色土の単層である。遺物は大甕の胴下半部が出土した。甕の底部は穴があけられ、底部下には5～15cmほどの河原石を敷いており、水琴窟と考えられる。

出土遺物（第59図、図版19）

48は備前系の大甕。口縁部は直立し外傾する。胴中位で最大径を測る。49は緑色片岩製の石庖丁の素材と考えられる。長さ6.8cm、幅2.95cm、重さ0.64kgを測る。

時期：出土した備前系の大甕から、ＳＫ1は近世、江戸時代の遺構とする。

〔6〕その他

本調査では、ピットや包含層中より弥生時代から近世までの遺物が出土した。ここでは、これらの遺物のうち、21点の実測図を掲載している。

(1) ピット出土遺物（第60図）

50はＳＰ29出土の龍泉窯系青磁碗の口縁部片である。口縁端部はわずかに外反する。外面に鎬連弁文を施す。13世紀。

51はＳＰ75出土の器種不明品である。内傾する口縁端部は「コ」字状を呈する。

52はＳＰ130出土の坏蓋のつまみ部である。中央部が凹む。

53はＳＰ143出土の坏である。外面に鶴と松が描かれる。

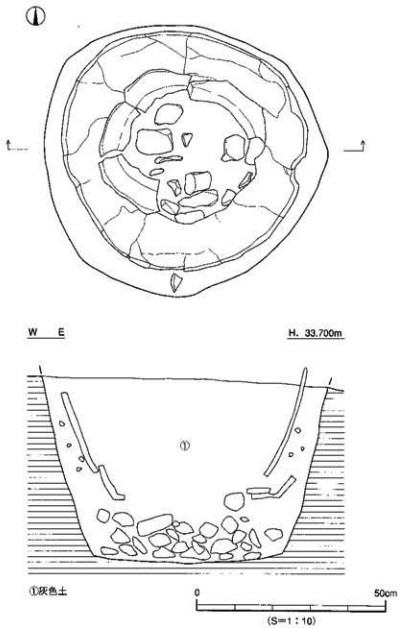
54はＳＰ197出土の甕形土器である。口縁部は「く」字状に折り曲げ、口縁端部はナデにより上方にわずかに拡張される。弥生中期後葉。

(2) 第Ⅴ層出土遺物（第61・62図、図版20）

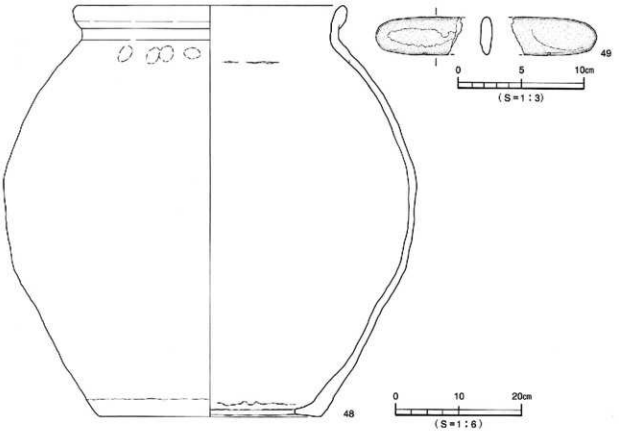
甕形土器（55～62）　55は口径42.4cmを測る大型品である。口縁部は折り曲げにより成形され、口縁端面に刻目を施す。56～59は貼り付けにより口縁部を成形するもので、胴部には、57は2条1組の工具による沈線文を施す。60は折り曲げ口縁で、沈線文と刺突文2列を施す。61は胴部片。刺突文と沈線文が組み合う。62は平底の底部片。

壺形土器（63）　63は口縁部内面に凸帯をもち、頸部外面に沈線文を施す。

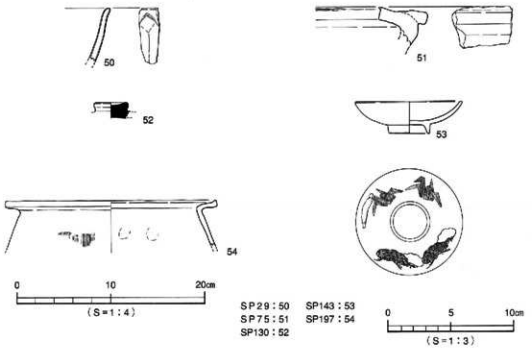
鉢形土器（64）　64は貼り付け口縁の鉢形土器。口径42cmを測る大型品である。



第58図　SK1 測量図



第59図　SK1 出土遺物実測図

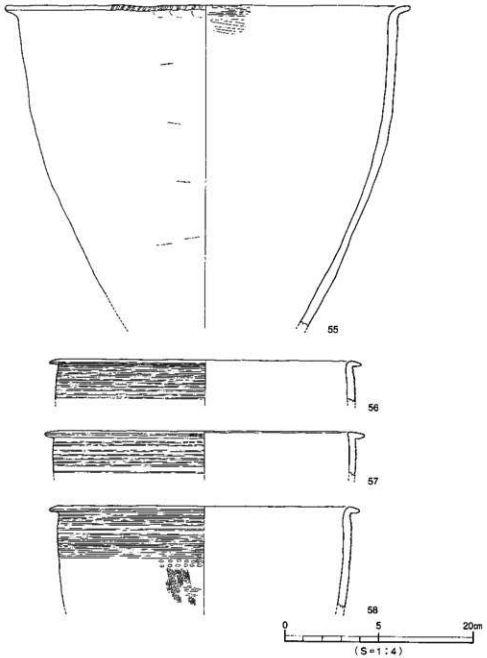


第60図　ピット出土遺物実測図

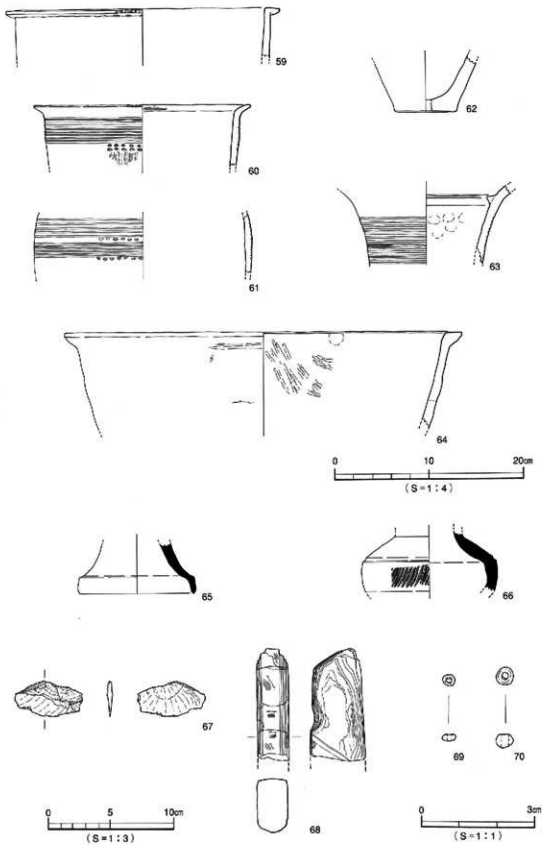
須恵器（65･66）　65は高坏の脚部片。66は甕で、胴中位に幅広刺突烈点文を施す。

石　器（67･68）　67はサヌカイト製のスクレイパーである。68は柱状片刃石斧。紐を掛ける為の抉りをもつ。蛇紋岩製。

装身具（69･70）　69は完形のガラス小玉である。色調は緑色を呈する。70は滑石製の小玉である。色調は灰色を呈する。



第61図　第Ⅴ層 出土遺物実測図（1）



第62図　第V層 出土遺物実測図（2）

4．小　結

本調査では、弥生時代から近世までの遺構と遺物を検出した。

(1) 弥生時代：遺構は竪穴式住居址1棟と土坑3基がある。

竪穴式住居址ＳＢ2は遺存状況が悪く、出土資料も少量であり、時期比定に絶対性を欠く。ただし、ＳＢ2の上面及び近現代坑内からは、弥生時代前期末～中期初頭の土器しか出土していないため、ＳＢ2は弥生時代前期末～中期初頭の住居址と考えておく。土坑は3基を検出した。特にＳＫ2からは甕形土器、壺形土器、ミニチュア土器、石庖丁が出土している。出土遺物の特徴から、ＳＢ2と同様、弥生時代前期末～中期初頭の遺構とする。来住台地では、同時期の土坑からの遺物の出土は少なく、ＳＫ2出土資料は土坑の性格を考える上で良好な資料と言えよう。

(2) 古墳時代：遺構は竪穴式住居址1棟、溝1条、土坑4基がある。

竪穴式住居址ＳＢ1は一辺約6mを測る方形住居址で、内部施設には主柱穴4基と周壁溝を検出した。ＳＢ1は時期比定に絶対性を欠くが、出土遺物とＳＫ8･9との切合い関係から、6世紀前半頃の住居址と考えられる。土坑は4基を検出し、このうちＳＫ8･9からは時期比定できる遺物が出土している。ＳＫ8からは6世紀後半、ＳＫ9からは6世紀前半の須恵器が出土している。

(3) 古　代

溝ＳＤ2は「Ｌ」字状に折れ曲がるもので、溝内からは8世紀代の遺物が出土している。溝の断面形態や形状より、区画りのための溝ではないかと推測される。また、土坑ＳＫ7からは7世紀代の遺物が出土している。古代に時期比定される住居址は未検出であるが、周辺地域に存在する集落に関連して、これらの溝と土坑が存在しているものと推測される。

(4) 中　世

中世の遺構は掘立柱建物址1棟、溝1条、土坑3基がある。

このうち、土坑ＳＫ11の掘り方は土器にそって掘られている。これは、土器を据えるためであり、水か物を貯蔵する為の埋甕と考えられる。このように、本調査区内では生活に関連する遺構を検出したが、同時期の住居址は検出されていない。よって、住居址は周辺にあると考えられる。

(5) 近　世

近世の遺構は溝1条と土坑1基がある。

土坑ＳＫ1は甕にそって掘り方があり、甕底部には穴があけられ、底部下からは河原石が出土した。よって、水琴窟と考えられ、松山平野では、伝旧松山藩陣屋跡より1基、若草町遺跡Ⅱより8基の出土例がある。

以上、調査では弥生時代から中・近世までの遺構と遺物を検出した。特にＳＢ2は弥生時代前期末～中期初頭に時期比定される可能性のある住居址である。この時期の竪穴式住居址は平野内でも検出例が少なく貴重な資料である。またＳＢ1は6世紀代の竪穴式住居址であった。同時期の住居址は南の来住台地、北の北久米浄遍寺遺跡でも検出されており、今回の調査結果は、福音寺から来住一帯にかけて6世紀代の集落が広く展開していることを補充する資料となる。

今回の調査によって、堀越川北部流域の遺跡状況が一部明らかになった。今後は、既存調査の成果をもとに、弥生時代から古墳時代の集落構造について、さらに解明していかねばならないであろう。

遺構・遺物一覧　－凡例－

(1) 遺物観察表の各記載について。

法　量　欄　(　)：復元推定値

形態・施文欄　土器の各部位名称を略記。

例）口→口縁部、口端→口縁端部、底→底部、胴上→胴上半部。

胎土・焼成欄　胎土欄では混和剤を略記した。

例）長→長石、石→石英、密→精製土。(　) の中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。

例）石・長 (1～4) →「1～4㎜大の石英・長石を含む」である。

焼成欄の略記について。◎→良好、○→良、△→不良。

表29　竪穴式住居址一覧

竪穴 (SB)	時　期	平面形	規　模 長さ×幅×深さ(m)	床面積 (㎡)	主柱穴 (本)	内部施設 高床	土坑	炉	カマド	周壁溝	備　考
1	古墳後期	方形	6.04×5.42×0.14	21.90	4					○	SD2・4、SK8に切られる。SK9を切る。
2	弥生前期末～中期初頭	円形	(5.84)×(2.12)×0.08	(9.70)	(1)					○	重複住居址か。

表30　掘立柱建物址一覧

掘立	規模 (間)	方向	桁　行 実長(m)	桁　行 柱間寸法(m)	梁　行 実長(m)	梁　行 柱間寸法(m)	方　位	床面積 (㎡)	時期	備　考
1	2×2	南北	3.30	1.40・1.90	3.20	1.50・1.70	N－4°－E	10.49	中世	

表31　溝一覧

溝 (SD)	地　区	平面形	規　模 長さ×幅×深さ(m)	埋　土	出土遺物	時　期	備　考
1	A1～E1	皿	15.00×0.80×0.05	暗灰褐色土	弥生・磁器	近　世	SK11を切る。
2	C2～E3	皿	14.60×1.00×0.04	暗灰色土	弥生・須恵	8世紀	SB1、SK9・10、SD4・6を切る。
4	A2～E2	皿	14.00×1.00×0.15	黒褐色土	土師・須恵 管玉	7世紀	SB1を切り、SK7に切られる。
6	C4	皿	2.50×0.60×0.07	黒褐色土	弥生・須恵	6世紀	SD2に切られる。
7	D3～E3	レンズ	4.20×0.90×0.08	暗灰色土	弥生・土師・石	不　明	

表32　土坑一覧　(1)

土坑 (SK)	地区	平面形	断面形	規　模 (m) 長さ(長径)×幅(短径)×深さ	床面積 (㎡)	埋　土	出土遺物	時　期	備　考
1	D1	円形	逆台形	0.75×0.75×0.47	0.45	灰色土	陶器・石	江戸時代	水琴窟。
2	D3・4	隅丸長方形	皿	2.54×1.80×0.24	4.57	黒褐色土	弥生・石庖丁	弥生前期末～中期初頭	SK3に切られる。
3	D4	隅丸長方形	皿	(3.40)×2.10×0.08	(7.14)	暗灰色土	弥生・土師 須恵	中世以前	SK4に切られ、SK2を切る。
4	D4	楕円形	逆台形	2.84×1.38×0.27	3.01	暗灰色土	弥生	中世	SK3を切る。

土坑一覧

(2)

土坑(SK)	地区	平面形	断面形	規模(m) 長さ(長径)×幅(短径)×深さ	床面積(㎡)	埋土	出土遺物	時期	備考
5	D・E5	不整長方形	舟底	1.58×0.90×0.18	1.35	黒褐色土	弥生	弥生中期以降	
6	B4	隅丸長方形	皿	1.22×0.98×0.06	1.19	黒褐色土	弥生	弥生中期中葉	
7	A2	隅丸方形	皿	(1.96)×(1.76)×0.03	3.45	黒褐色土	弥生・須恵	7世紀前半以降	SD4を切る。
8	C2～D3	隅丸長方形	皿	3.22×1.94×0.04	6.25	黒褐色土	弥生・須恵・礫石	6世紀中葉	SB1を切る。基底面にピット3基と溝1条あり。
9	C3	長方形	逆台形	2.37×1.36×0.36	3.22	黒褐色土	弥生・須恵	6世紀前半	SB1、SD2に切られる。
10	B2～C4	長楕円形	皿	2.60×0.74×0.04	1.56	黒褐色土	弥生・須恵	6世紀	SD2に切られる。
11	D1	円形	逆台形	0.60×0.60×0.18	0.28	暗灰色土	亀山焼	15世紀後半	SD1に切られる。
12	A1～3	隅丸方形	皿	(1.66)×(1.54)×0.05	2.57	黒褐色土	弥生・須恵	6世紀	SK7に切られる。

表33 SB2 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
1	壺	口径(21.6) 残高 4.5	折り曲げ口縁。胴部に沈線文11条(2条1組)＋刺突文。口縁端部に刻目。	㋑ナデ ㋺マメツ	ミガキ	暗灰茶色 暗茶色	石・長(1～2) ◎		
2	甕	口径(15.0) 残高 3.6	折り曲げ口縁。無文。	㋑ナデ ㋺ミガキ	㋑ナデ ㋺マメツ	乳茶色 灰色 (部分的乳茶色)	石・長(1) ◎		
3	鉢	残高 3.4	縄文土器。外傾し、わずかに外反する口縁部。口縁端部は丸く、内面に段をもつ。	㋑ココナデ ㋺ミガキ	㋑ヨコナデ ㋺ミガキ	暗茶色 暗茶色	石・長(1) ◎		

表34 SK2 出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
4	甕	口径(19.4) 残高 4.6	折り曲げ口縁。口縁端部に刻目。	ヨコナデ	㋑ヨコナデ ㋺マメツ	灰黄色 乳黄茶色	石・長(1～3) ○		
5	甕	残高 3.5	胴部片。3条以上の沈線文と、幅広のヘラ状工具による刺突文を施す。	マメツ	マメツ	暗灰茶色 乳黄茶色	石・長(1～3) ◎		
6	甕	底径(6.7) 残高 5.4	わずかに上げ底。	㋺ハケ(8～7本/cm)→ナデ上げ ㋩ナデ	ナデ	乳橙色 乳黄灰色	石・長(1～3) ○		
7	壺	底径(7.0) 残高 3.8	平底。	㋺ミガキ ㋩ナデ	ナデ	乳茶色 乳黄灰色	長(1) 石(1～4) ◎	黒斑	
8	壺	口径(27.2) 残高 5.6	外反する口縁部。口縁端面はナデにより凹む。粘土接合痕顕著。	㋑端ヨコナデ ㋑㋺ハケ(6本/cm)→ナデ	㋑ハケ(7本/cm) ㋺マメツ ㋩ナデ	黄茶色 (部分的に黒色) 灰茶色	石・長(1～2)		
9	壺	口径(24.6) 残高 4.4	口縁端面はナデにより凹み、口縁下部に指頭痕顕著。	㋑端ヨコナデ ㋺ハケ(9本/cm)→ナデ	ナデ	乳茶色 乳黄茶色	石・長(1～3) ◎	黒斑	
10	壺	口径(24.6) 残高 1.7	外反する口縁部。口縁端に刺突文を巡らす。口縁部内面に刻目凸帯。	㋑端ヨコナデ ㋑ハケ(5本/cm)→ミガキ	ミガキ	乳灰茶色 乳茶色	石・長(1～2) ◎		18

SK2　出土遺物観察表　土製品　(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
11	壺	口径(10.4) 残高 4.7	胴部に沈線文2条+山形文（2条1組）	ヨコナデ →ミガキ	ヨコナデ	乳白色 （一部黒色） 乳白色	石・長(1～3) ○		18
12	壺	残高 5.1	ヘラ沈線文3条。	ミガキ	マメツ	乳白色 乳黄色	石・長(1～4) ◎		18
13	壺	残高 4.3	胴部片。ヘラ描きの斜格子目文＋山形充填文。	マメツ	マメツ	乳橙茶色 黒灰色	石・長(1～3) ○		18
14	壺	底径(7.6) 残高 7.7	平底。	(胴)ミガキ (底)ナデ	ナデ上げ	乳橙色 乳灰色	石・長(1～4) 金 ◎		
15	ミニチュア	口径(7.2) 底径 3.5 器高 5.7	くびれの上げ底。口縁部は「コ」字状。指頭痕顕著。	ナデ	ナデ	乳茶色 灰黄色	石・長(1～3) ◎	黒斑	18

表35　SK2　出土遺物観察表　石製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(kg)	備考	図版
16	石庖丁	約2／3	緑色片岩	6.6	4.2	0.65	0.03		18
17	石庖丁	ほぼ完形	結晶片岩	8.6	5.0	1.5	0.09	未製品	18
18	磨石	完　形	結晶片岩	5.9	4.0	2.3	0.08		18

表36　SK6　出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
19	壺	口径(12.8) 底径(7.0) 残高11.6+8.2	平底の底部より外傾に立ち上がりながら胴上部で最大径を測り頸部に続く。口縁部は屈く直立し端部は丸い。	(口)ナデ (胴)ミガキ (胴)マメツ	一部ミガキ マメツが著しい	乳橙茶色 乳褐茶色	石・長(1～3) ◎	黒斑	
20	壺	残高 5.7	頸部片。断面三角形の凸帯を4条貼り付ける。	ナデ	マメツ	乳灰茶色 灰色	石・長(1～2) ◎		18

表37　SB1　出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
21	高坏	底径(8.2) 残高 2.1	内湾して接地する脚部。脚端部は、尖り気味に丸い。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		

表38　SB1　出土遺物観察表　石製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(kg)	備考	図版
22	砥石	ほぼ完形	砂岩	10.7	5.6	1.5	0.17	両面に浅い溝状の使用痕有り	18
23	剝片	完　形	緑色片岩	11.2	2.8	1.2	0.04		18

表39　SB1　出土遺物観察表　装身具

番号	器種	残存	材質	色	法量 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考	図版
24	臼玉	完形	碧玉	緑灰色	0.3	0.6	0.42	0.209		18

表40　SD6　出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
25	壺	底径 10.6 残高 9.5	平底。	(胴)ハケ(6本/cm) (底)ナデ	(胴)ミガキ (底)ナデ	灰色 乳茶色	石・長(1～4) ○		
26	坏身	口径(11.1) 残高 2.8	内湾わずかに外反する。口縁部の端部は、尖り気味に丸い。受部は鈍く、受部下に1条の沈線が巡る。	(口)回転ナデ (体)ヘラケズリ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		
27	高坏	残高 2.6	「ハ」字状の脚部の端部は丸く内面にナデによる凹線が巡る。	(脚)カキメ (脚端)回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		

表41　SK9　出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
28	坏蓋	口径(14.0) 残高 4.3	天井部は凹み、口縁部はわずかに内向し据地する。口縁端部は凹む。	(天井)回転ヘラケズリ (口)回転ナデ	(天井)ナデ (天井)(口)回転ナデ	青灰色 (一部褐灰色) 青灰色	長(1～3) 密 ◎		
29	坏蓋	口径(14.0) 残高 4.5	丸い天井部から内湾しながら口縁部に続く。口縁端部は、凹む。	(天井)回転ヘラケズリ (天井)(口)回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		

表42　SK8　出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
30	坏蓋	口径(14.0) 器高 3.8	緩やかな天井部と直線的にわずかに開く口縁部。口縁端部は凹む。	(天井上)回転ヘラ切り→ナデ (天井下)回転ヘラケズリ (口)回転ナデ	(天井上)回転ナデ→ナデ (天井下)(口)回転ナデ	青灰色 灰色	密 ◎		

表43　SK8　出土遺物観察表　石製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(kg)	備考	図版
31	砥石	完形	結晶片岩	8.1	5.5	1.7	0.11	片面の中心部分に使用痕有り。	

表44　SK12　出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
32	蓋	残高 1.8	つまみ中央部が突出する。	回転ナデ	ナデ	淡灰褐色 青灰色	密 ◎		

表45　SD4　出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
33	坏身	口径(10.3) 残高 2.6	たちあがりは低く内傾し、端部は尖る。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		
34	坏身	残高 2.5	たちあがりと受部端部は欠損。	マメツ	マメツ	乳灰色 乳灰色	密 △		
35	坏身	残高 2.0	短く水平に伸びる受部の端部は尖る。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	長(3) 密 ◎		
36	高坏	残高 3.0	スカシをもつ脚部片。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		
37	高坏	底径(7.5) 残高 1.9	「ハ」字状に開き裾部で折曲し、直線的に接地する。端部は丸い。	(脚)マメツ (脚端)回転ナデ	回転ナデ	乳灰色 灰色	密 ◎		

表46　SD4　出土遺物観察表　装身具

番号	器種	残存	材質	色	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
38	管玉	ほぼ完形	碧玉	緑灰色	1.8	0.4	0.22	0.553		18

表47　SD2　出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
39	蓋	残高 1.7	宝珠状つまみ。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		
40	坏身	口径(10.1) 残高 2.1	たちあがりは低く内傾した後、直立する。	回転ナデ	回転ナデ	乳青灰色 乳青灰色	密 ◎		
41	坏	底径(7.8) 残高 1.4	高台の付く坏。高台は低く直立する。	回転ナデ	回転ナデ	暗灰色 乳灰色	密 ◎		

表48　SK7　出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
42	坏蓋	口径(11.6) 残高 3.3	天井部は丸く、天井部と口縁部を分ける稜は不明瞭である。口縁端部は丸い。	(天)回転ヘラケズリ (口)回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		
43	坏身	口径(13.0) 残高 3.2	たちあがりは内傾し、端部は丸い。	(口)回転ナデ (体)マメツ	回転ナデ	乳灰色 乳灰色	密 ○		

表49　SK4　出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
44	坏	口径(12.6) 底径 (7.8) 器高 3.2	外傾して立ち上がり口縁端部は尖り気味に丸い。	マメツ (底)糸切り痕	マメツ	乳灰色 乳褐色	長(3.5) 密 ○		
45	坏	口径 13.2 底径 6.8 器高 3.7	平底の底部から外傾する口縁部。口縁端部は、尖り気味に丸い。	マメツ (底)糸切り痕	マメツ	白橙色 白橙色	密 ◎		

表50　SK11　出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
46	甕	口径(36.6) 残高(56.8)	直立気味に外反する口縁部。口縁端部はナデにより凹む。底部はゆるやかな丸味をもつ。亀山焼。	㋑回転ナデ ㋒ハケ(6本/cm) ㋓格子タタキ	㋐上回転ナデ ㋐下ハケ(6本/cm) ㋔指頭痕	灰色 青灰色	密 ◎		

表51　SD1　出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
47	椀	底径(7.2) 残高 2.2	「コ」字状の高台部は水平に接地する。肥前焼。	ヘラケズリ	ヘラケズリ	淡黄褐色 淡赤褐色	密 ◎		

表52　SK1　出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
48	甕	口径 41.6 底径 33.9 残高 65.2	口縁部は直立し、外傾する。胴中位で最大径を測り口縁部よりも大きい。備前系。	㋑ヨコナデ ㋕㋖ナデ	㋒ヨコナデ ㋗㋘ナデ	暗紫茶色 暗紫茶色	密 ◎		19

表53　SK1　出土遺物観察表　石製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(kg)	備考	図版
49	石臼上	約1/2	緑色片岩	6.8	2.95	0.95	0.64		

表54　ピット　出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
50	碗	残高 4.4	口縁端部はわずかに外反する。外面に鎬蓮弁文あり。龍泉窯系青磁。	施釉	施釉	灰オリーブ 灰オリーブ	密 ◎	SP29	
51	不明	残高 3.1	内傾する口縁部の端部は「コ」字状。	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	暗灰紫色 暗灰紫色	密 ◎	SP75	
52	皿	残高 1.2	中央部が凹むつまみ部。	回転ヨコナデ	ナデ	灰色 灰色	密 ◎	SP130	
53	坏	口径 8.2 底径 3.0 器高 2.6	外面に鎬と松が施されている。	施釉	施釉	白色 (脚部は赤茶色) 白色	密 ◎	SP143	
54	甕	口径(22.0) 残高 4.9	口縁部は「く」字状に折り曲げる。口縁端部はナデにより上方にわずかに拡張される。	㋑ヨコナデ ㋓ハケ(10本/cm)	㋒ヨコナデ ㋔マメツ	灰茶色 乳茶色	石・長(1~3) ◎	SP197	

表55　第Ⅴ層　出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
55	甕	口径 42.4 残高 33.8	折り曲げ口縁。口縁端部に刻目。無文。	マメツ	㋐ハケ(5本/cm) ㋑上ミガキ ㋒下マメツ	灰黄色 灰黄色	石・長(1~4) ◎		20
56	壺	口径(33.0) 残高 4.3	貼り付け口縁。胴部に沈線文11条（2条1組）。	マメツ	マメツ	乳灰黄色 乳茶色	石・長(1~3) ◎		
57	壺	口径(30.4) 残高 4.7	貼り付け口縁。胴部にヘラ沈線文8条。口縁端部に刻目。	マメツ	マメツ	茶色 茶色	石・長(1~4) ◎		
58	甕	口径(30.6) 残高 10.7	貼り付け口縁。胴部に沈線文13条＋刺突文2列。	㋑マメツ ㋺ハケ(8本/cm)→ミガキ	マメツ	白橙色 (一部黒色) 橙色	石・長(1~4) 金 ◎		
59	甕	口径(26.0) 残高 5.3	貼り付け口縁。口縁端部に刻目。	マメツ	マメツ	乳茶色 灰白色	石・長(1~5) ◎	黒斑	
60	甕	口径(22.8) 残高 6.5	折り曲げ口縁。胴部に沈線文9条（2条1組）＋刺突文。	㋒ヨコナデ ㋺ハケ(7本/cm)	㋑ミガキ ㋥マメツ	乳茶色 乳茶色	石・長(1~4) ◎		
61	壺	残高 6.3	5条と6条の沈線文（2条1組）＋刺突文。	マメツ	マメツ	暗灰茶色 乳黄茶色	石・長(1~4) ◎		
62	甕	底径(6.6) 残高 6.0	平底。	マメツ	マメツ	乳茶色 乳灰茶色	石・長(1~3) ◎		
63	壺	残高 8.3	口縁部内面に凸帯を貼り付ける。頸部にヘラ沈線文15条。	ミガキ	㋑マメツ ㋥ナデ 指頭痕	乳灰茶色 乳灰黄色	石・長(1~3) 金 ◎		
64	鉢	口径(42.0) 残高 10.3	貼り付け口縁。無文。	マメツ 一部ハケ(8本/cm)	ミガキ	灰白色 黒色	石・長(1~5) 金 ◎		
65	高坏	底径(9.0) 残高 4.0	脚部は「ハ」字状に開き端部は直立気味に接地する。	回転ヨコナデ	㋮ナデ ㋭カキメ(5本/cm) ㋬回転ヨコナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		
66	鉢	残高 4.8	胴部中位に巾広の櫛状工具による右上りの刺突文を施す。	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	灰色 (一部黒色) 青灰色	密 ◎		

表56　第Ⅴ層　出土遺物観察表　石製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
67	スクレイパー	完形	サヌカイト	5.3	2.3	0.4	6.086g		20
68	石斧	約3/4	蛇紋岩	8.9	2.4	4.1	0.18	柱状片刃	20

表57　第Ⅴ層　出土遺物観察表　装身具

番号	器種	残存	材質	色	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
69	玉	完形	ガラス	緑色	0.15	0.32	0.17	0.021		20
70	玉	ほぼ完形	滑石	灰色	0.38	0.48	0.29	0.111		20

第5章　おわりに

本報告書では、古代の官衙群や廃寺跡が立地する来住台地上の来住町遺跡6次調査地と、来住台地北縁を流れる堀越川の北側地域にあたる北久米町屋敷遺跡2次調査地・久米才歩行遺跡2次調査地の発掘調査の成果を収録した。おわりに、今回の調査成果を地区ごとにまとめてみることにする。

1．来住台地北東部地区

(1) 立地　来住町遺跡は、来住廃寺跡や久米高畑官衙遺跡群の東限域に当たる。これまでの5回の調査では、遺跡東側は中世まで、小さな流路や低地が形成されていたことを確認している（註1）。これは、集落の居住空間を立地的に制約するものになり、中世までの集落東限を規定するものになっている。この地形条件にあって、来住町遺跡6次調査地では弥生時代前期末～中期初頭の土坑や中世の畑地が検出され、遺跡の中ではやや微高地にあたることが判明した。したがって、6次調査地のやや東に低地部が存在するものとみられる。

(2) 弥生時代　来住台地上には環壕集落が形成されており、台地の南と北とに併存する可能性がある。来住町遺跡はこれらの集落から見ると、東方の地域になる。今回は少数の土坑を検出したが、近隣地に同時期の遺構を確認した例は稀薄なので、集落評価をするには依然資料数が少なく、第3の環壕集落の有無までを判断するには至らない。

(3) 中世　6次調査地は畑地として利用されていたことが判明したが、居住地は遺構の密度から、南西の来住廃寺跡の東側あたりが候補に上げられる。今回検出の畑地は、真北から西へ概ね45度振っており、来住台地上の古代以降の南北区画と異なるため、この時期に部分的な土地の改変が行われたと見られる。なお、貿易陶磁器片の出土は留意しておきたい。

2．堀越川北側地区

(1) 立地　堀越川の北側には、緩やかな起伏で、現状では概ね平坦な沖積地が広く形成され、北久米町屋敷遺跡、久米才歩行遺跡、南久米遺跡等の弥生時代～近世の遺跡が展開している。報告の北久米町屋敷遺跡2次調査地は、起伏が下がった部分にあり、何某かの治水工事が必要な場所である。一方、久米才歩行遺跡2次調査地は段丘上にあり、乾燥した土地に立地している。

(2) 弥生時代　久米才歩行遺跡2次調査地の竪穴式住居址は前期末～中期初頭であり、松山平野でも数少ない住居址資料である。同時期の集落は、先述した来住台地上にも展開しており、この時期には来住・久米地区に幾つかの集落が併存していたことを確認するに至った。この地区のように広い範囲で複数の集落が確認できたのは、当平野では未だ類例がない。

(3) 古墳時代　この地区には墳墓に前方後円墳の二つ塚古墳が知られるが、集落資料はよく分かっていなかった。しかしながら、久米才歩行遺跡2次調査地で集落存在が確実になり、居住域が判明してきた。なお、昭和58年に松山市教育委員会が二つ塚古墳の踏査をし、コンテナ（サンコウ商事・テン箱32号）1箱分を表採しているが、公表の機会に恵まれていなかったので、ここで取り上げておく（註2）。表採品には埴輪があり、うち異個体と考えられる円筒埴輪6点を第63図に掲載した（註3）。1～6は円筒埴輪片で、1・2は口縁部片、3・4はタガ2段と円形透かしをもつ。5はタガ部片、6は体部片で、円形透かしをもつ。

(4) 古代　来住台地周辺でも古代の建物が確認されるようになり、既に北久米町屋敷遺跡や久米才

歩行遺跡で検出が相次いである。今回は「L」字状の溝を検出し、区画域のあることを推定する資料を得たが、内容までを言及するに至らなかった。

(5) 中世　北久米町屋敷遺跡２次調査地の橋跡は、愛媛県内でも稀少な資料である。区画溝内には建物が配することも確認され、中世集落の構造やその復元にとって好資料を得ることができた。また、久米才歩行遺跡２次調査地の埋甕も稀少例として上げられよう。

(6) 近世　久米才歩行遺跡２次調査地の水琴窟は発掘調査事例としては、市内で３遺跡10例目となるものである。この地域には、中世以降に一定の上流階層の居住があったことを知ることになった。

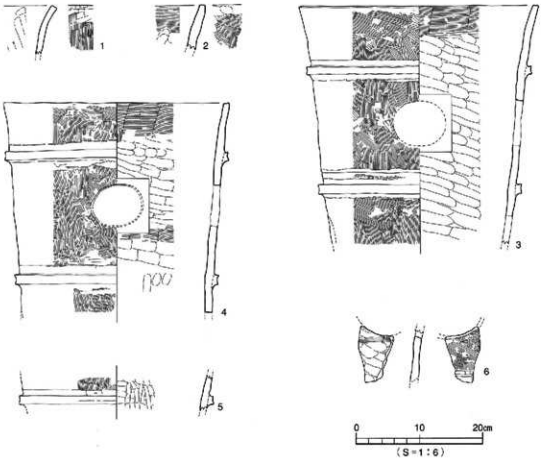
以上、今回の報告を地区別・時代別に簡潔に成果を上げてみた。来住・久米地区の歴史理解は、いずれの時代も、来住台地上の遺跡とその周辺地帯の遺跡との比較検討が必要な要素になる。

註１．関連文献は「第１章　３.環境」の文献一覧を参照していただきたい。

２．本資料については調査担当者の西尾幸則氏に助言と協力を得ている。

３．埴輪については山内英樹氏に教示と助言を得た。

山内英樹　2004　「愛媛県出土埴輪の基礎的研究（４）」『紀要愛媛』第４号(財)愛媛県埋蔵文化財調査センター



第63図　二つ塚古墳採集品

写真図版

写真図版データ

1．遺構は、主な状況については、4×5判や6×7判の白黒ネガフィルム・カラーリバーサルフィルムで撮影し、35㎜判で補足している。久米才歩行遺跡2次調査地の撮影には高所作業車を使用した。

使用機材：

カメラ	トヨフィールド45A	**レンズ**	スーパーアンギュロン90㎜他
	アサヒペンタックス67		ペンタックス67　55㎜他
	ニコンニューFM2		ズームニッコール28～85㎜他
フィルム	白　黒　プラスXパン・ネオパンSS・アクロス		
	カラー　エクタクロームEPP・RDPⅢ		

2．遺物は、4×5判または6×9判で撮影した。すべて白黒フィルムで撮影している。

使用機材：

カメラ	トヨビュー45G・69ロールフィルムホルダー
レンズ	ジンマーS 240㎜F5.6他
ストロボ	コメット／CA32・CB2400
スタンド等	トヨ無影撮影台・ウエイトスタンド101
フィルム	白黒　プラスXパン・ネオパンアクロス

3．単色図版は、白黒プリントを等倍で使用できるように焼き付けている。

使用機材：

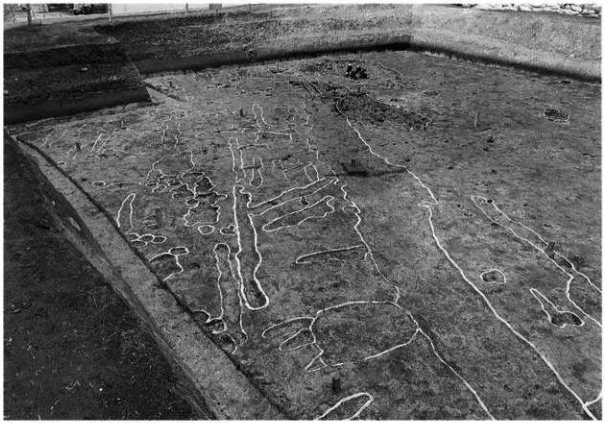
引伸機	ラッキーMD・90MS
レンズ	エル・ニッコール135㎜ F5.6A・50㎜ F2.8N
印画紙	イルフォードマルチグレードⅣ RCペーパー

4．**製　版**　写真図版175線
印　刷　オフセット印刷
用　紙　ミューマット菊判93.5kg
製　本　アジロ製本

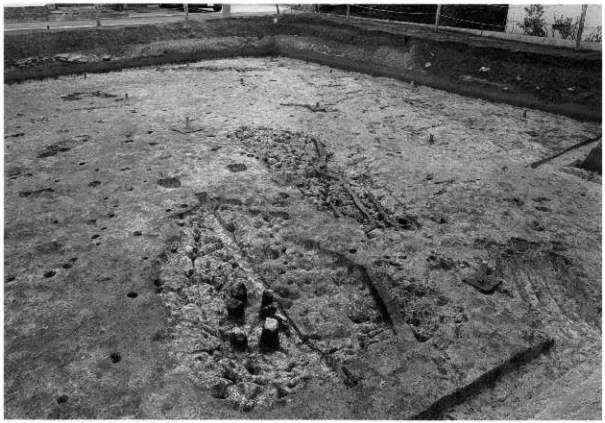
【参考】『埋文写真研究』vol.1～13　『報告書制作ガイド』

［大西朋子］

1　調査地完掘状況（東から）

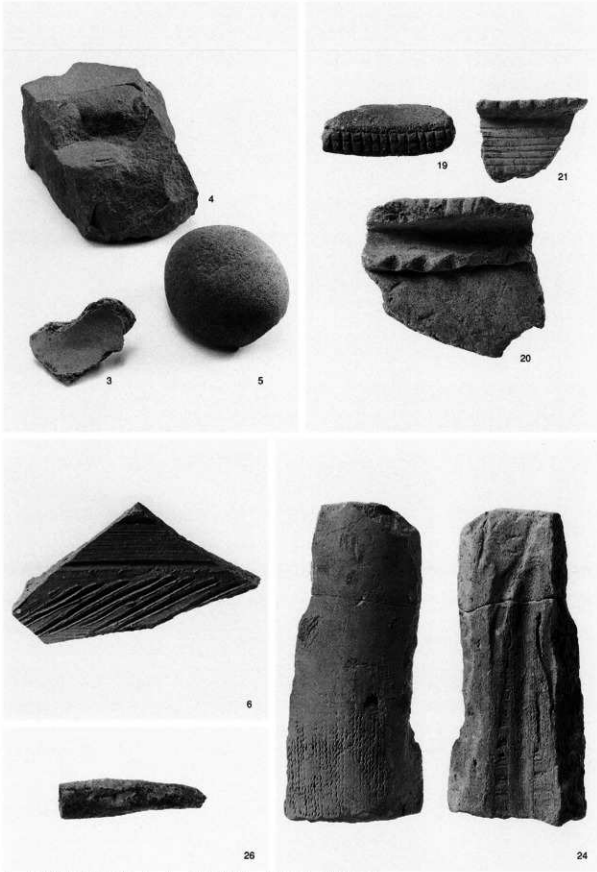


2　ＳＤ１・耕作痕完掘状況（南東から）



1　ＳＫ１完掘状況（北西から）

2　ＳＸ２完掘状況（東から）



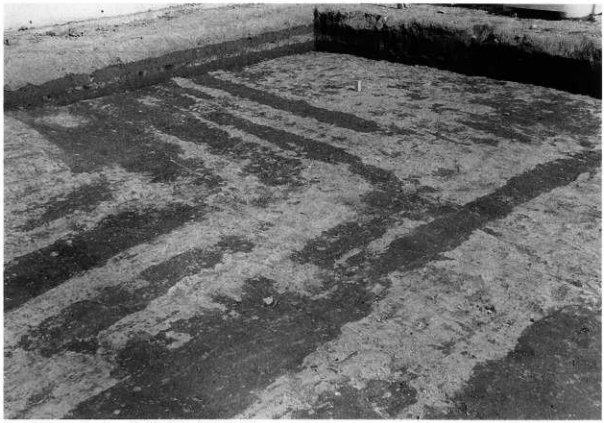
1　出土遺物（ＳＫ１：3～5・ＳＸ２：6・Ⅰ層：24・表採：26）

1　調査地近景（南西より）

2　東壁土層（西より）

1　遺構検出状況（北より）

2　ＳＤ４検出状況（北より）



1　ＳＤ１～３・５～13検出状況（北西より）

2　北半部遺構検出状況（南より）

1　ＳＤ４完掘状況（北より）

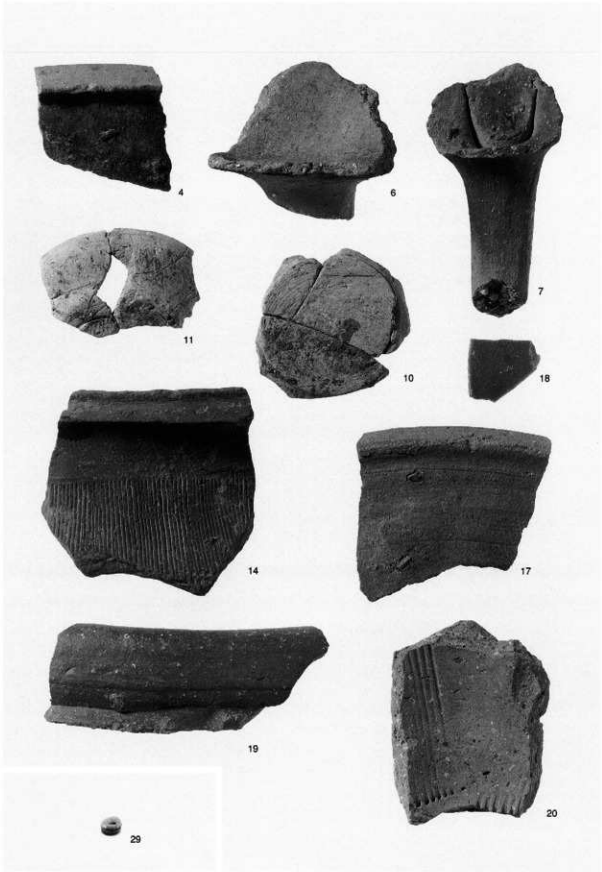
2　北半部遺構完掘状況（北より）

1　橋１完掘状況（北西より）

2　ＳＤ１～３・５～13完掘状況（北より）

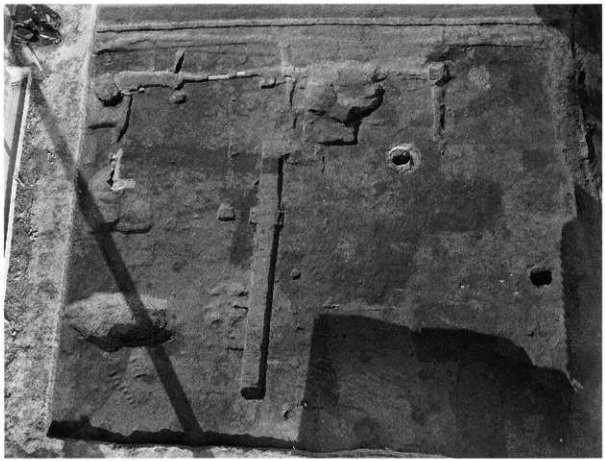
1　１次調査地完掘状況１（北より）

2　１次調査地完掘状況２（東より）

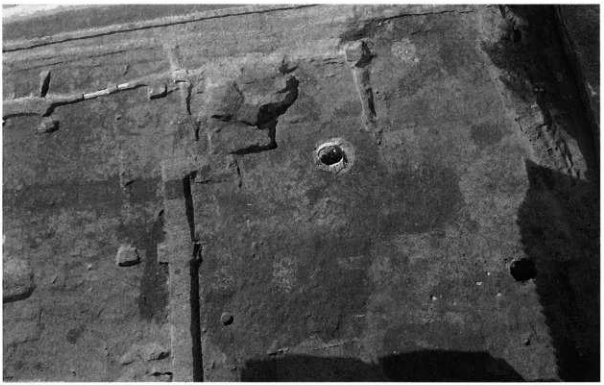


1　出土遺物（ＳＤ４：４～20・ＳＤ７：29）

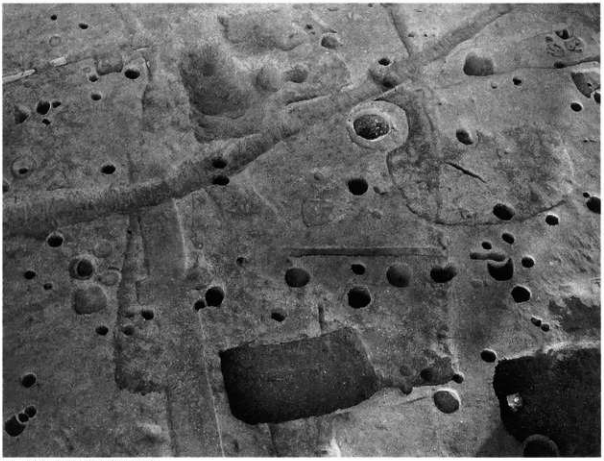
1　調査前の状況（南東より）



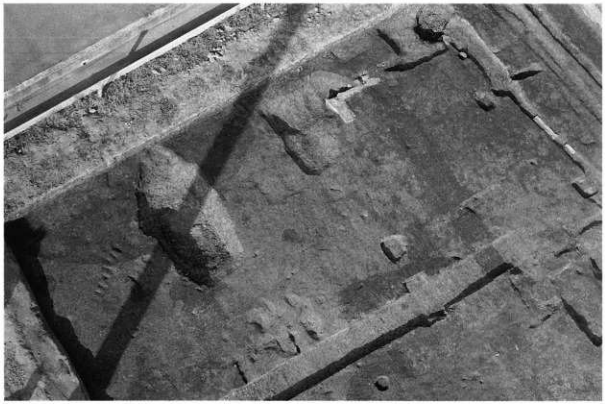
2　遺構検出状況１（南より）



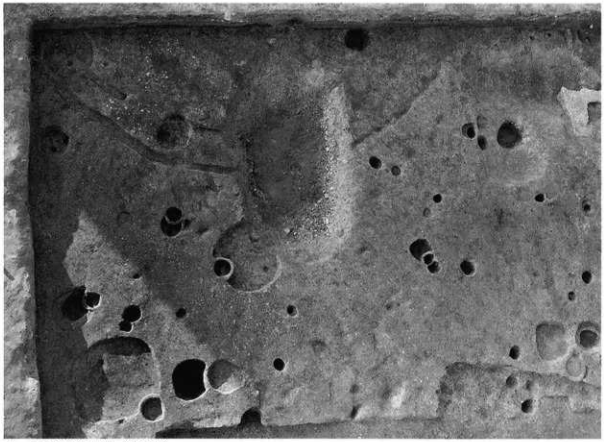
1　遺構検出状況２（南より）



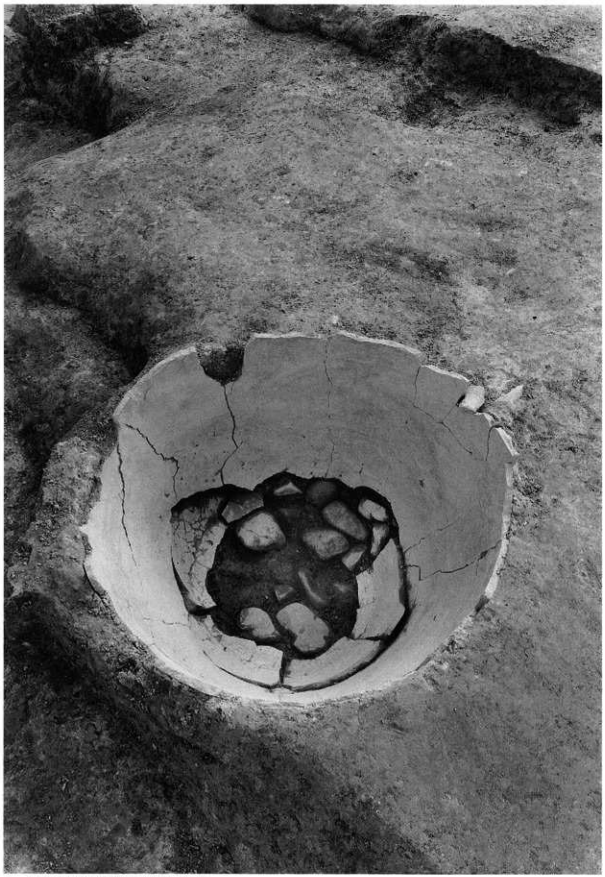
2　遺構完掘状況（南より）



1　ＳＢ２検出状況（南東より）



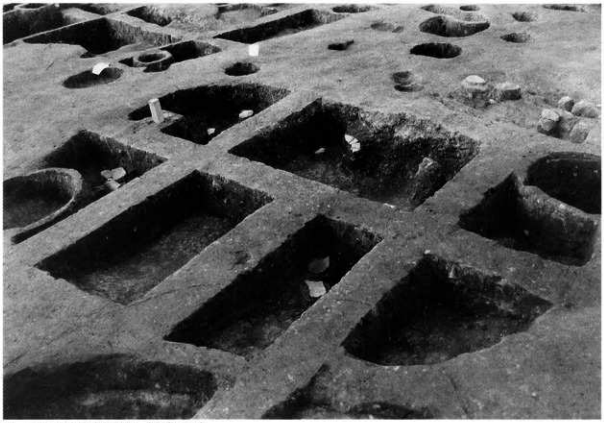
2　ＳＢ２完掘状況（東より）



1　ＳＫ１遺物出土状況（北西より）

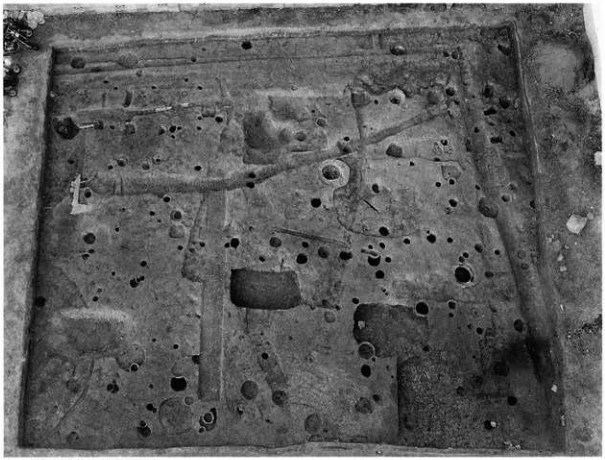
1　ＳＫ11遺物出土状況（北東より）

1　ＳＫ６遺物出土状況（南より）

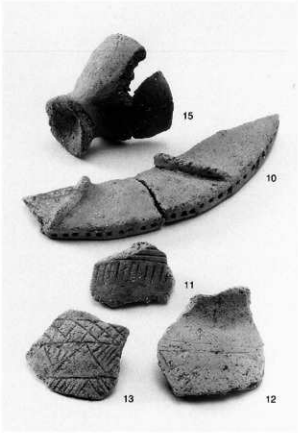


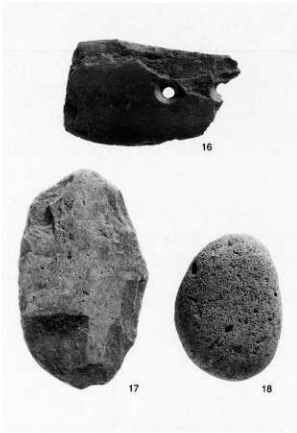
2　ＳＫ２遺物出土状況（南東より）

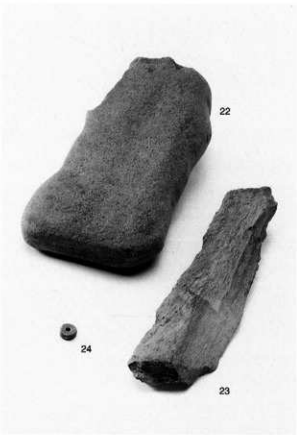
1　遺物出土状況（東より）



2　遺構完掘状況（南より）





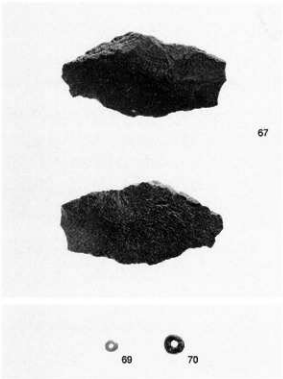


1　出土遺物（ＳＫ２：10～18・ＳＫ６：20・ＳＢ１：22～24・ＳＤ４：38）

48上

48下

1　ＳＫ１出土遺物



1　第Ⅴ層出土遺物

抄　録

ふりがな	きし・くめちくのいせき
書名	来住・久米地区の遺跡Ⅳ
副書名	来住町遺跡6次・北久米町屋敷遺跡2次・久米才歩行遺跡2次
巻次	
シリーズ名	松山市文化財調査報告書
シリーズ番号	第100集
編著者名	田城武志・高尾和長・小玉亜紀子・池本雄一・大西朋子
編集機関	松山市教育委員会
所在地	〒790-0003　松山市三番町６丁目６−１　TEL 089-948-6605
発行年月日	西暦　2004年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
きしまち 来住町遺跡　6次	きしまち 来住町	38201		33°48′28″	132°48′24″	19951211～ 19960209	202.85	宅地開発
きたくめまちやしき 北久米町屋敷遺跡 2次	きたくめまち 北久米町	38201		33°48′42″	132°48′01″	19960701～ 19960830	347.64	宅地造成
くめさいかち 久米才歩行遺跡 2次	みなみくめまち 南久米町	38201		33°48′38″	132°48′03″	19961112～ 19970131	361.91	宅地開発

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
来住町遺跡　6次	集落	弥生 中世	土坑 小溝	弥生土器 青磁	鐘泉窯系
北久米町屋敷遺跡 2次	集落	中世 近世	溝・柵 溝	陶磁器	木橋
久米才歩行遺跡　2次	集落	弥生 古墳 古代 中世	竪穴式住居・土坑 竪穴式住居・溝 溝 掘立柱建物址	弥生土器・石庖丁 須恵器・臼玉 土師器	

松山市文化財調査報告書　第100集

来住・久米地区の遺跡　Ⅳ

平成16年3月31日　発行

編集・発行　松山市教育委員会
〒790-0003　松山市三番町6丁目6－1
TEL (089) 948－6605

印　刷　原印刷株式会社
〒790-0056　松山市土居田町396－6
TEL (089) 974－8711